かつて日本に生きた者から、
未来の自分に宛てたメッセージ

時を超えて伝えたいこと

桐生敏明

**君は、今どこに生きているのだろう。
アジアのどこかの国なのか？
ヨーロッパ？アメリカ？
それとも、また日本なのか？**

でも、君の時代にも、まだ日本という国は存在するのだろうか？
返事がないのは分かっているが聞かずにはおれない。
僕の生まれた国、僕が生きた国、そして大切な人たちと出会った国だ。
僕は今、日本という国に生きている。
この地で大事な人と出会い、大事なことを伝えられた。
「人間は意識だ」ということ、「永遠に存在し続ける意識こそが本当の自分の姿だ」ということ。
このことを心で分かり、「肉体」を中心とした生き方を、「意識」を中心　に据えた生き方に換えていかない限り、何も変わらないということ。その転換をするためにこそ与えられた人生だということ……。

かつて日本に生きた者から、
未来の自分に宛てたメッセージ

時を超えて伝えたいこと

桐生敏明

時を超えて伝えたいこと／目次

序　章　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第一章　発端について　・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第二章　開かれたパンドラの箱・・・・ 40
第三章　エルという会社・・・・・・・・・・・・・ 90
第四章　ベスト・パートナー・・・・・・ 120
第五章　世間という現実　・・・・・・・・・・・ 160
第六章　他力の反省　・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第七章　新しい流れ　・・・・・・・・・・・・・・・ 230
終　章　母なる宇宙へ向かって　・・・・ 249

時を超えて伝えたいこと

かつて日本に生きた者から、
未来の自分に宛てたメッセージ

序　章

人の心は転生する。

こんな言葉が珍しくなくなった。テレビや本でいろんな事例が紹介される。

少し前にも、太平洋戦争当時、硫黄島の近海で撃墜されたアメリカ軍パイロットの心が、一人の少年となって転生した。そんな話がテレビで紹介され話題となった。

少年は、物心がつくようになると、毎夜炎に包まれて飛行機とともに海へ落ちていく夢にうなされるようになる。それればかりか両親に、自分が乗っていた飛行機の機種や所属していた部隊の名前まで話し、自分は硫黄島近くで撃墜されたと、転生前の名前や住んでいた場所まで語る。半信半疑だった父親も、その話にあまりにもリアリティがあるためか、とうとう事実関係を調べ始める。すると彼の家族は実在し、彼の戦友も実在し、彼が語った飛行機の特徴や欠点までが合致し、彼が撃墜された場所までがハッキリしてくる。

父と子は、やがて硫黄島近海の彼が撃墜されたという海域へと旅立った。その地点に達した２人は、用意

した花束をそっと、その海へ流した。
「君を忘れないよ……。」
　そう語った少年の目から涙が流れた。
　以来、少年はこの話を口にしなくなったという。

　冒頭、こんな話を紹介したからといって、転生をテーマに語ろうというのではない。
　ただこの本の語り手である私自身は「転生を信じている」――そのことを知ってほしかったに過ぎない。
　20数年前の私は、転生などということは、はなから信じていなかった。転生とか来世とかいうのは錯覚か、今がうまくいかない人間が「あってほしい」と願うだけの架空の世界だと思っていた。「今しかない」と思うからこそ、「精一杯に生きられる」、そう信じて疑わなかった。
　ところが、そうはいかなくなってきた。
　人生の中で、誰にだって大きな転機があるはずだ。自分の場合は、一人の人物と出会ったことだ。出会った頃、その人は大阪府下の公立高校の校長先生をしていた。
　土曜や日曜ごとに、ある時は喫茶店で、ある時は知

人の家で、「人間は意識です」「永遠に存在する意識こそが本当の自分の姿です」と、その人は語っていた。

その人は、やがて校長職も捨て、セミナーという形で、そのことを20年以上も無報酬で語り続けてきた。

詳しい話は後に譲るが、僕は、今では自分が転生することを信じている。自分という肉体が転生するのではなく、「意識」というエネルギーが転生するのだと思っている。

この本は、将来転生してくるであろう未来の自分に向けて書いている。

僕の人生に大きな転機を与えた人物、その人が、自分の後半生をかけて何を言おうとしたのか。何を伝えようとしたのか。僕たちが、その人から何を学ぼうとしてきたのかを、未来の自分に伝えておきたい。

無論、無事転生してきた意識が、そのことを覚えているかどうかも分からない。この本と出会える確率といったら、ほんのわずかなものでしかないと思うし、第一、この本自体が残っているものかどうか、出会えたとして日本語が分かるのかどうかさえ定かではない。

それでもなお思う。未来の自分を念頭に置き、「僕たちが何を学んできたか、今世も来世も何を目指して

生きていこうとしているのか、自分がその人と関わった20数年の変遷をたどりながら、ぜひ、そのことを書き残しておきたい」——ただそう思って筆を執っている。

この本を手にしたあなた、それは未来の私であるかもしれない、そうでないかもしれない。でも、この本を手にしたうえは、仮に未来の僕、未来の私であるとして、過去からのつぶやきに耳を傾けてほしい。

第一章　発端について

1

君は、今どこに生きているのだろう。アジアのどこかの国なのか？　ヨーロッパ？　アメリカ？　それとも、また日本なのか？

でも、君の時代にも、まだ日本という国は存在するのだろうか？

返事がないのは分かっているが聞かずにはおれない。

僕の生まれた国、僕が生きた国、そして大切な人たちと出会った国だ。

僕は今、日本という国に生きている。

この地で大事な人と出会い、大事なことを伝えられた。「人間は意識だ」ということ、「永遠に存在し続ける意識こそが本当の自分の姿だ」ということ。このことを心で分かり、「肉体」を中心とした生き方を、「意識」を中心に据えた生き方に換えていかない限り、何も変わらないということ。その転換をするためにこそ与えられた人生だということ……。

本当のところを言うと、僕はまだ何も分かっていない。頭では確かにそうだと思うんだが、目で見られるもの、耳で聞けるもの、肌で感じられるこの世界の実感が大きくて、どうしても、そこを中心に動いてしまう。

ある時、「違ってきた」「間違ってきた」ということが、理屈じゃなく、心から湧き上がってくることがある。その時は、もう何もいらないと思うし、心からフツフツと湧き上がってくる喜びに、いつまでもこうしていたいと思うのだが、そこへ生活や仕事という現実の問題が起こると、たちまち心で感じた思いは雲散霧消してしまうありさまだ。

まったく自分という人間のお粗末さがイヤになる。

かといって、生活や仕事にまみれて、何も分からず死んでいくのはもっとイヤだ。

僕の生きた時代に「アンパンマン」というアニメが幼児の間で爆発的にヒットした。僕も孫がいるせいで、テレビやＤＶＤでよく観ることがあるが、この主題歌がたまらない。

♪ そうだ　うれしいんだ　生きる喜び　たとえ　胸の傷がいたんでも

♪ 何が君の幸せ　何をして喜ぶ　分からないまま終わる　そんなのはイヤだ……

この主題歌が流れてくると、胸が熱くなり、何も分からない自分が見えてきてソワソワし始め、「仕事、仕事」と言っている場合じゃないなどと焦り出し、あわてて『意識の流れ』のホームページ（心を見る仲間たちが拠り所としているウェブサイトを開くありさまだ。

僕は、この時代、こんな漫画のような生活を繰り返しながらも、やっぱり本当のことに出会いたくて、ズボラはズボラなりに自分と向き合おうとしている。

こうして未来の君に、自分が出会った人たち、自分がしてきたことを、語りかけるのも、そうすることで自分と向き合う時間を持とうとしているのかもしれない。

2

僕の勤める会社は大阪の西区というところにあるのだが、その得意先に柳々堂書店という建築専門の本屋さんがある。明治26（1893）年創業というから、今

年（2007 年）で 114 年になる。書店としては老舗中の老舗だ。創業当時は、龍角散の創業者とも縁があって、「ゴホンといえば龍角散」をもじって「御本と言えば柳々堂」のキャッチフレーズで一般書を扱う書店だった。それが三代目から、設計事務所が多いという西船場特有の立地条件を活かし建築専門書を扱うようになった。

この柳々堂書店の現会長松原さんは、その人、田池留吉氏の中学時代の教え子だった。そして、この田池という人が、先ほどから言っている「肉」から「意識」への転回を説いている元府立高校の校長先生だという訳だ。

ところで松原さんは、70を過ぎた今も目鼻立ちがハッキリし、若い頃はどんなすごい美人だったろうと思わせる方だが、その松原さんから、ある日、ご自身の若い頃の思い出話を聞かせていただく機会を得た。

少し、その思い出話に付き合ってほしい。

昭和20（1945）年11月というから日本がアメリカとの戦争に敗れて直後のことだ。戦後生まれの僕にとっても、随分昔のことになるのだから、君にとっては大昔の話になるのだろうが、その頃、日本という国は、アメリカや中国をはじめとして世界の国々を相手に戦っていた。その戦いも昭和20年を迎えて、いよいよ大詰めとなった。

この年の2月には硫黄島へ米軍が上陸し、4月には沖縄上陸。4月5日にはソ連という国が日ソ中立条約の破棄を通告し、8月6日には広島に、9日には長崎に原子爆弾が投下された。これと相前後して8月8日にはソ連が宣戦布告し、北部満州、朝鮮、カラフトで一斉進撃を開始し、かくして8月15日、日本はポツダム宣言を受諾、9月2日にはアメリカ太平洋艦隊旗艦ミズーリ号で降伏調印が行われた。

皇居前広場を進む米軍機械化部隊

終戦時、松原さん一家は、四国の讃岐に疎開していたのだが、そんな松原さん一家に「そろそろ関西へ帰ってきたらどうだ」と、古くから付き合いのあった大手建設会社から声がかかった。新しい日本の再建に向け、日本のあちらこちらで建築工事の槌音が聞こえ始めた頃だ。

兵庫県の仁川というところでも大規模な建設工事が開始され、松原さんのお母さんは、その建設現場の寮母として求められたのだという。かくして松原さん一家も、昭和 20 年 11 月、疎開先の四国からこの仁川へ

と移り住むことになった。
　松原さんは、この学区にある某小学校に転入したが、当時、この小学校には同和地区の子供や韓国人の子供らも多く在籍しており、その二つのグループが対立ししのぎを削っていた。松原さんは在校中、クラスの級長をしていたが、なぜかこの両グループの女番長にも人気があり、二つのグループが松原さんを互いの陣営に取り込もうと喧嘩になることもしばしばだったという。
　特に同和地区の女の子は独特の美人が多く、その番長に気に入られたのか、解体した豚肉を塊で盛んに自宅へ持ってきてくれた。
　だが、その女の子は決して家へは入ろうとせず、玄関先に立って大声で「肉､持ってきたで」と来意を告げ、最後にこう言ったという。
「腐りかけがうまいんや、つるしとけや。」
　松原さんの人柄や、番長と言われた女の子のやさしさが感じられて面白いエピソードだが、敗戦の混乱の中で、人のバイタリティやあたたかさを感じさせる時代でもあった。

　昭和 22 年になって、松原さん一家はやっと大阪へ

と戻り、書店を再開するべく今の京町堀にバラックを建てた。しかし売る本とてなく、古物商の鑑札を取り古本屋としてのスタートだったという。

この年、教育制度も旧制国民学校から六・三・三制へと移行し、松原さんは九条の千代崎にある新制西中学校へ、その三期生として入学した。

そして二年生の時だ。その人、田池氏が、この西中学へと赴任してきた。

その人は、大正15（1926）年、大阪市港区に生まれた。この年12月25日、大正天皇が崩御し昭和元年となった。当時言われていた皇室の始まりから数える習わしでは、皇紀2586年になるという。

この年、韓国では6月10日に日本からの独立を目指す運動が大弾圧を受けるという、いわゆる万歳事件が起こった。日本では1月15日、京都学連事件ではじめて治安維持法が適用された。5月24日には北海道で十勝岳が大噴火し、死者144名を出した。

かわったところでは、5月14日に兵庫県宝塚市に「宝塚ホテル」が、阪神間初の郊外型ホテルとして誕生している。

このホテルは、戦後には一時連合軍に接収されたこ

田池氏の幼少時代（お父さんと）

ともあるが、僕たちが「心の勉強」の会場として何度か使わせていただいた懐かしい場所でもある。

こんな時代環境の中で、その人は成長していった。小さな頃から「本当のことを知りたい」という欲求が強く、そのことに対し一途でもあった。ご両親は、その人のことを「どへんくつ」（頑固者）と呼んだ。

お父さんは高松の出身だが、大阪へ出てきて「大津組」のもとで「田池組」を興し、荷役業に従事していたようだ。いわゆる任侠の人であった。ただ子供の教育には熱心ではなかった。自分自身は字が読めなかったため、小学校低学年のその人に新聞を読んでもらっていた。好きな野球の試合について知りたかったのだという。

知りたかったのは、勝敗の予想についてなのだが、もちろん小学校低学年で新聞が全部読める訳ではない。分かる文字を拾いながら推測して読んでいくのだが、この予想が不思議に当たる。お父さんにしてみれば鼻

高々、息子は小学校の低学年にもかかわらず字が読める。字が読めるのに勉強する必要などないと考えていたようだ。

このため、その人は学業は良くできたが、教科書一つ買ってもらうにしても、入学時に買い与えられるだけで、遅れて入荷した教科書などは「必要なものは、みんな最初に買ってある」と追加購入してもらうのも大変な状態だったという。

大阪市立吾妻尋常小学校を卒業したその人は、大阪府立市岡中学校へと進学した。当初、その人の資質を知る恩師は、大阪きっての名門校である北野中学への進学を助言していた。それを聞いたお父さん、学校へ出かけていくや「うちの子は電車で通うような学校へは行かせない」と、旧制市岡中学校への進学が決まったという。

電車賃を払って通わせるような余裕はなく、それより野球の強い市岡へ行かせたいというのが、お父さんの本音だったようだ。

そのお父さんが、中学四年の時に亡くなった。食道ガンを患い、その手術後、肺炎を病んでの最期だった。亡くなる前は、よく咳き込んでいたという。

学年主任の先生や担任の先生は、何とかその人に勉学を続けさせたいと案じていたのだろう。「自分が学費を出してやるから進学しろ」とまで言ってくれた。

また、ある企業が、学費を負担するので、市岡中学校からも一名を選ぶよう言ってきており、それにその人を選ぼうともした。

「人に金を出してもらってまで勉強したくない」と、その人は両案ともに断った。

一計を案じた学年主任は、「海軍兵学校」「陸軍予科士官学校」「高等商船学校」へ願書を提出したうえで、受験に行くよう、その人に指示したという。

ここなら授業料もいらず、学業が続けられるとの配慮からであったろう。

しかし海軍兵学校の入試では、選考試験の最終段階で、「おまえの父親は国賊である」と言われたそうだ。お父さんが任侠に生きた人だからだろうか。

その話をした時、お母さんが「悪かった」という顔をされたのが忘れられないという。

海軍に比べ、陸軍ではこのようなことがなく、あくまで成績重視であった。

結果、陸軍予科士官学校と商船学校の二つに合格した。

どちらにするか迷ったという。当時の高等商船学校は、どちらかというと海軍の予備将校の養成機関的な色彩が強い。要するに「陸軍」を選ぶか「海軍」を選ぶかという選択である。

その人は言う、「兄貴が海軍に行っていたので陸軍にすることにした」と。

かくして一人のどへんくつな陸軍将校生徒が誕生するに至った。

さて、君に陸軍予科士官学校といってもどういうものか分かってもらうのは難しいだろう。戦後生まれの僕もよく分かっていない。ここで陸士のなんたるかを説いても意味のないことなのだろうが、僕が、君にこの本を書き残そうとの思いの中には、「心の学び」のことだけではなく、僕たちが生きた時代、僕たちが生きた日本のことをも知ってもらいたいという思いが厳然としてある。

したがって話が本筋から脱線するところは多々あると思うが、堪(こら)えてほしい。

陸軍予科士官学校というのは、昭和12（1937）年、

陸軍士官学校予科が分離独立して創設されたものだ。入学資格者は、陸軍幼年学校卒業者と旧制中学四年の学力を有する者、修学年限はおおむね二年、士官候補生となるべき生徒を育成するという目的を持ち、従来は市ヶ谷台にあったが、生徒数の増加に伴い、昭和16年、埼玉県朝霞（あさか）町に移転し、やがて18年には「振武台」と命名されるに至った。

　さて当時の日本は、今の戦争放棄をした日本ではなく、軍国日本である。そして「軍の強弱は士官の精否による」という建軍以来の精神に基づき、質の高い士官の養成が最重要課題とされてきた。このため陸軍予科士官学校も、近視眼的な教育ではなく、社会のすべてに通ずる高い視野を持ち、深い同胞愛、広い人類愛に根ざした教育を目標としており、今の若い人たちが考えるような、非人間的な側面はなかったと言える。ただ、それだけに生徒に求めるものも大きかった。

　そこで、当時の入学者を選抜する方法を見てみよう。

　まず、身体検査と学科試験とに合格した者をもって入学候補者とする。学科試験は、当時の旧制高校の入試試験と大差なかったが、作文が重視されたようだ。他の国漢・数学・外国語・地歴・物理化学の配点が、

それぞれ100点満点なのに対し、作文には別に40点を配していたようだ。

それは、一般的には志願者の思想的傾向を知るためだと言われるが、戦場における迅速な状況判断力を養成するためだとも言われる。陸予士校の『生徒心得』にも「将校の言語・文章は質直簡明にして要を得、明快荘重にして礼儀に欠くる所なきを要す。ゆえに生徒は常時これが修得に努め自己の意志を的確に発表通達する術に熟し、いやしくも柔弱・野卑・虚飾・誇大の言辞は厳にこれを戒むるを要す」とある。

決して、虚飾・誇大の言辞を弄(ろう)さず、一途に真理を探求していく「その人」の姿勢は、この陸予士時代に更に拍車がかけられたことであろう。

陸予士での教育期間は2年間だが、「常在戦場」の教育方針の元、午前中4時間は一般教科学習、午後は教練と体操、夜は自習で10時には就寝という毎日である。

教授はラッパとともに講堂（教室）に入るが、この時点で、全生徒が席に着いていなければならない。130万坪の大キャンパスである。10分間の休憩時間で教室を移動しなければならないこともあり、ほぼ駆け足で教室へ集まるというのが常となった。

陸軍航空士官学校での訓練風景

教授が教壇に立つと、取締生徒（学級委員）が「起立」「礼」の命令を出し、その後、「第何中隊第何区隊、総員40名、事故何名、現在員何名」と報告し、授業が開始され、時間終了のラッパが鳴るまで続くことになる。

一教科は50分授業で一日四時間授業、2カ年で1675時間となるが、これは当時の高校3カ年に匹敵する授業時間であり、かなりハードなスケジュールだったと言えよう。

こうして陸士60期として陸軍予科士官学校を卒業した「その人」は、埼玉県入間郡にある陸軍航空士官学校に配属された。ちなみに陸軍航空士官学校は60期をもって敗戦により終了している訳だから、最後の入校生となる。

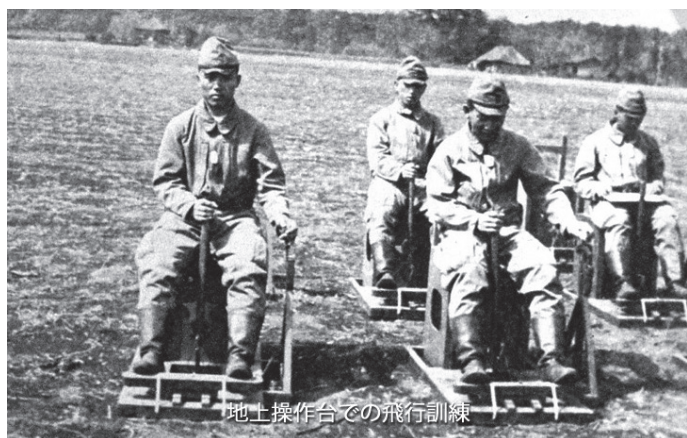
その人は、「陸軍の中枢にありながら空襲の驚異に曝されることが少なかった」と言う。日本本土を空襲するようになったアメリカ軍は、東京を空襲する際、まず富士山を目標に飛行し、富士山上空で方向を予科士官学校へと転換する。さらに予科士官学校上空で、再び東京市街へと方向転換することになる。つまり予科士官学校は、アメリカ空軍が東京を空襲する際の通り道になっていた。

こんなエピソードがある。朝霞の陸予士時代、米軍機が飛来すると蛸壺(たこつぼ)に避難するのだが、実際に爆弾を落とされることはなかった。それが航空士官学校に配属され、入間へ移るなり、その一週間後、自分たちが避難に使っていた朝霞の蛸壺に一トン爆弾が落とされたというのだ。

僅差(きんさ)のズレで空襲から逃れ、命拾いをしたという。

また訓練中に心臓の不調から病棟に入院させられるという事態が起こった。軍医は「ゆっくりしていけ」というが、出席日数が足りなくなると卒業ができない。あわてて、「回復したので退院したい」と言っても、「貴様は優柔不断である」と認められない。

おそらく戦局を考慮しての軍医の配慮だったのだろ

地上操作台での飛行訓練

うが、何より卒業できない、卒業が遅れるということが耐え難く、何度も「回復した」旨を訴えた。

事情を察した軍医がやっと退院を認めてくれた。ただし練兵休ということで訓練には出ず通院することになった。

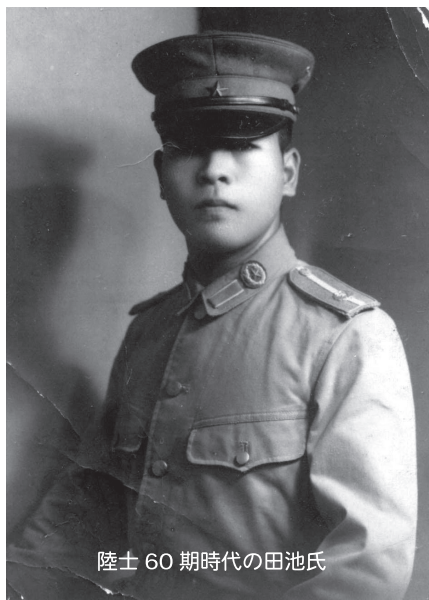
そんな折り、米軍機が襲ってきた。練兵休で寝ている兵舎で、米軍機が機銃掃射しながら真っすぐに自分に向かってくるのが感じられる。

その時、逃げようという気が起こらなかった。死を覚悟し、そのまま寝台に寝ていたという。そして米軍機が、自分の真上を通り過ぎていった。

後で分かったことだが、米軍機が狙っていたのは、

兵舎の向こうに作られた爆撃機の実物大模型だったらしい。
　しかし、あの時、間違いなく「死」を覚悟したという。
　もう一つ不思議なのは、航空士官学校の生徒でありながら飛行機に乗ることがなかったということだ。
　普通、航空士官学校の生徒は、在校期間中に約150時間の飛行時間を消化する。それが戦局の悪化に伴い、関東地区での飛行訓練はできなくなった。昭和20年に入り、第59期生からは満州に移り操縦訓練に当たることになったが、この年8月、ソ連軍の侵攻で満州での演習計画も潰れた。

3

「とにかく変わった人やった。」
　松原さんが、その人、田池氏について話した第一声だ。
「最初から普通とは違う、何か変わった雰囲気を持った先生やった。教科書なんかあってないようなもんや。数学の授業は、そら高度なもんやった。けど気むずかしいとこもあったな。何が気にいらんのか、一時間、

陸士 60 期時代の田池氏

ほとんど何にもしゃべれへんことかてあった。そんな時は、藁半紙一枚配っといて、『自分の人生観を書け！』それだけや。」

敗戦ですべてが変わった。

皇国日本の現人神であった天皇が、「人間宣言」を行い、神から人間になった。その皇国日本を救うため、「お国のため、陛下のため」と一命をなげうって戦ったのは何のためだったのだろう。「鬼畜米英」と叫んだその口が、今や欧米文化をもてはやす。

価値観が 180 度転換してしまった。人間の価値観など、いくら大上段に構えたところで、所詮、その程度のものなのだろう。その人、田池氏がそう思ったかどうかは分からない。ただ終戦間際、特攻として死ぬべく、自分と真向かいになり「死生観」を培ったのは紛れも

ない事実だ。

だが、その人が特攻機に乗るより、終戦になるのが早かった。

その人は、生きて復員した。そして家庭教師をしたり、亜鉛工場でアルバイトをしたりしながら、旧制大阪高等学校（現大阪大学）を卒業した。

大阪市西中学校の教師時代

理数系を専攻したその人は、卒業後は、教師を志した。曰く、「生物は解剖があるから嫌い」「理科は実験があるから危険」。そこで目指したのが数学教師だったという。

最初は、大阪市立西中学で補欠要員として「数学」や「英語」を教えたりもしていたが、職業軍人だった教師が、軍属の公職追放で辞め、２年Ｃ組の担任がいなくなった。そのクラスを引き継いだのが、その人、田池先生だった。

「３年Ｅ組……」

松原さんが、何かを思い出したように口を開いた。
その人が、２年Ｃ組の後、受け持ったクラスだという。
そのクラスの黒板の上に、一枚の紙が貼られていた。
そこには「自然に従い　真実を愛し　純粋な魂の命ずるままに　自己及び自己以外の人々への愛を尽くさん」という言葉が掲げられていた。
その人は、「あの頃は何も分かっていなかった」「言葉はきれいだが、中身は空っぽだった」と、その頃を恥じるように話されたことがある。
しかし、３年Ｅ組は和気あいあいとしていた。松原さんは「そら、高度な授業でしたで」と当時を懐かしむように話される。
「できない子も、率先して数学の問題のガリ刷りをしてましたなあ」とも言う。
その人が宿直当番の夜は、生徒たちが毛布を宿直室へ持ち込んで、分からないところを教えてもらったりして一緒に泊まり込んだ。
その時、みんなで安いキャベツを食べたりしたので「カエル学級」と言うそうだ。その人は、金のない学生時代、新世界の串カツ屋でよくキャベツを食べた。キャベツはいくら食べても只（ただ）なので、串カツは二本と決め、

後は、ひたすらキャベツを食べたという。串カツ屋の親父も、良くしたもので、見て見ぬ振りをした。

私自身、若い頃、ＰＲ映画の制作部にいたが、その事務所が天王寺にあり、撮影部の助手連中とよく近くの新世界の串カツ屋に飲みに行った。多分、同じところではないかと思うのだが（時代的には20年以上も後のことだが）、やはりキャベツが自由に食べられた。３センチ大に四角く切られたキャベツが何ヶ所かのバットに山のように盛られており、これを串カツのタレにつけてビールのあてにする。

映画を観て面白かったと言っては、映画論をぶちながら飲む。仕事が上がったと言っては「お疲れさん」とばかりに飲む。撮影部の助手や照明部の助手たちのこととて金はない。ビールと串カツを大事そうに楽しみ、後は、ひたすらキャベツと映画への情熱をあてに、ビールか安酒を飲む。この頃も､親父さんは何も言わず､ただ黙って見ているだけで、いつまで座っていても追い出されることはなかった。

いい親父さんだった。また、人情のあるいい時代でもあった。

閑話休題。

その頃の思い出からか、その人は、宿直室へ毛布を持って押し掛けた子供らに、「キャベツは、カエルの食い物や」と、よくキャベツを振る舞った。

それで「カエル学級」というらしいのだが、なぜ、キャベツがカエルの食い物なのかが分からない。一度、訊いてみたいと思いながら、そのまま忘れて今に至っている。

おそらく、この先も訊くことはないだろうが……。

また、こんなエピソードもある。

その人は、クラスのみんなを率い、ハイキングやら研修やらと、よく、いろんなところへと出かけたが、クラスの生徒たちとともに六甲山を歩いた時のことだ。

……道に迷ってしまった。

軍隊時代の経験を活かし、星の位置から方向を定め、やっと下山して出てきたのが、進駐軍の駐留する「宝塚ホテル」。

何ごとかと質問してくるＭＰを相手に、その人は流暢な？英語でやりとりをした。

背後で「オーッ」と、生徒たちの感嘆する声があがった。

以来、その人には、数学だけではなく、英語にも優れた先生という評判が生まれた。

ちなみに、この宝塚ホテルは、その人と同じ大正十五年生まれ。米軍の管轄下にあったとはいえ、20代半ば、青春の真っ只中にあった。

創設時の宝塚ホテル

こうして、その人は、生徒たちから「変わった人や」と慕われながら、西中学校から、大阪市立高津中学校、夕陽丘中学校、更には大阪府立市岡高等学校、西成高等学校と教諭を続け、大阪府立登美丘高等学校では教頭として、大阪府立東百舌高等学校では校長として四十年近くを教育畑で歩み、定年まで一年を残し依願退職された。

松原さんは最後に、その人、田池先生から「行き当たりばったりはダメ」、きっちりプランを立てて行動するようにしつけられたと言い、「未だにその習慣は抜けていません」と胸を張られた。

西中学時代に、田池先生を中心に作られた「零クラブ」は、今も「零クラブ同窓会」として続いている。

4

これ以降、その人のたどった長い学校生活を追いかけることはできない。紙数も情報も足りない。たとえ知り得たとしても、それだけで優に一冊の本になるだろうし、また、それを綴って君に伝えることが、この本の目的でもないと考える。

ここでは、その人が、幼い頃から抱えている疑問——「人間はなぜ生まれてくるのか」「自分とはいったい何者なのか」——にいかに対処し、いかなる答えを出していったのか、また40年近く勤めてきた教職を、なぜ定年を待たずに依願退職したのか、そこにポイントを絞って君に伝えておきたいと思う。

２、３年前のことになるが、仕事の関係で「町歩きの会」が主催する「九条・川口・市岡を歩く」という催しに参加したことがある。

僕の生まれたのが西区の半田一丁目、その後、大正区へと引っ越したが、懐かしさも手伝って、会の面々と一緒に、自分の生まれた町を歩き回った。

大阪府立市岡高等学校

そのコースの終点が市岡高等学校であった。

「市岡高校は、明治34（1901）年2月大阪府立第七中学校として創設され、6月12日大阪府立市岡中学校と改称されました。校地は創立以来ずっと変わっていません。その当時は、辺りは一面のスイカ畑。市岡高校となった今では当時の面影を偲ぶよすがもありませんが、校訓としての『自彊（じきょう）の精神』が一世紀にわたり脈々と受け継がれ、朝に夕に鳴り渡る『自彊の鐘』が生徒たちに『市岡の心』を語っています。」

そんな案内人の解説を聞きながら、「ここが田池先生

のいた学校か」と、漠然とその人のことを思っていた。
……と、唐突に「間違ってきた」という思いが込み上がってきた。
「みんな間違ってきた。」「根本からすべて間違っていた。」
そんな思いに突き動かされ、口からは嗚咽（おえつ）さえ漏れそうになり、大あわてで校舎の影に身を隠し、声を殺して泣いた。
でも、いったい何を間違ってきたというのだろう？

小さかった頃、市電の電車道を一人で歩きながらよく思った。「死んだらどうなるんだろう？」答えの出ない思いに不安を感じた頃が、この場所にいると、なぜかよみがえってくる。そんな思いに終止符を打つ方法は「まだ先のことだ。今は楽しいことを考えよう」と、その思考を中止させることだった。
町歩きは、この市岡高校で終点らしいが、「何が間違っているのか」、答えは出ないまま。またぞろ思い出した「死んだらどうなるのか」、その答も思考停止のままだ。
これから後は案内人はいない。自分の内へつながる道は、自分で歩いていくしかないようだ。ただ道しる

べとして、その人の存在があった。
　真実に至る道は「自分を見ていくしかないよ」と、その人は道を示していた。

　その人が子供の頃から思っていた疑問、本当のことを知りたいとの切実な思いは、戦争中、特攻として死ぬかもしれないという状況の中で、更に拍車がかけられた。
　戦争は終ったが、抱えている疑問は解決されないまま残った。
「人はなぜ生まれてくるのか？」「自分とはいったい何者なのか？」
　その人は思った。
（自分は数学教師だ。自分が子供に問題を出す時は、必ずその設問が解けるようヒントを与えている。だから、自分が抱えている問題だって、必ず、誰かしらがヒントを与えてくれているはずだ）と……。
　しかし、いくら自分の周りを見渡しても、そんなヒントを暗示してくれるような「人」はいそうもなかった。
　それが昭和 49 年のことだ。「おまえの説いてきた愛は偽物だ」と、自分の中から響いてくる思いがある。

人から言われたことではない。自分の胸奥から響いてくるのだから認めざるを得ない。

更に、その翌年のこと。

当時は、西成高校で教鞭をとっていたのだが、問題が山積みしており疲労困憊（ひろうこんぱい）して家路に着くということが多くあった。我が家にたどり着くと、疲れて何をする気もなくボーっとテレビを観ていることもある。テレビドラマで「銭形平次」という番組があるが、いつも同じパターンで安心して観ていられる。そんな理由から、その人も毎回、観るともなく、その番組を観るようになっていた。

ところが番組の終わり頃になると、ドラマの筋とは関係なく、なぜか母親のことが思い出され、目頭に涙が滲むようになった。それが何度も続く。

まさかと思った。

お母さんは何の取り柄もない人だった。文字も知らず、教養もない。

活動写真（映画）が好きで、赤ん坊であったその人を、「危ないから」と、柱に長い紐をつけて括り付け映画を観にいくような人だった。

だからと言って、お母さんを見下す気持ちはない。

こんな両親のもとに生まれて不幸せだとか、惨めだったとか、そんな思いもない。
ただ地区の町会長などは、長い間、その人とこのゑさん（お母さんの名前）が親子だということが分からずにいた。陸軍士官学校へ行くような秀才と、信号を無視して小走りに道を渡っていくこのゑさんが、どうしても結びつかなかったのだという。
そんなお母さんが、自分の長年の疑問にヒントを与えてくれている。
そこでお母さんの反省をしてみた。部屋に閉じこもり、母親が自分にしてくれたこと、逆に自分が母親にどんな思いを使ったのかを大学ノートに書き始めた。
涙が止まらなくなったという。特別に慈悲深いとか、何か特別なことがある訳でもない。その母親が、言葉ではなく大切なことを自分に伝えてくれていた。
申し訳ない思いと、うれしい思いで、畳が、涙でグショグショになったという。
そんな折り、学校の春休みに滋賀県の草津高校へ視察旅行に行くことになった。昭和51年3月のことだという。視察旅行を終え、その人は、他の先生と別れ山中温泉へと足を延ばした。旅行の目的は、母親の反

省をすることだった。そして「北陸荘」に宿を取り、思うまま、感じるままに母親への思いを書き始めた。「北陸荘」から帰ってからも、春休み中、母親の反省を続け、書き出した大学ノートは七冊になったという。

もう間違いはなかった。お母さんこそ、大きなヒントを与えてくれている人だ。母親の思いが分からなければ、本当のことなど分かるはずがない。本当のことが分かるために、人間は肉体を持って生まれてくるのだということ、そのためにお母さんとなる人に産んでもらってきたのだということ、そのことが確信となっていった。

自分は何者か、何のために生まれてくるのか……その答えはすべて自分の中にある。自分を見ていけばいい、自分の中を探っていけばいい。

しかし、自分を見るというのはどういうことだろうか。瞑想をすれば、座禅を組めば、教典を読めば、それで、自分が見えるとでもいうのか。そんな訳はない。

自分に一番近い存在は、お母さんだ。お母さんがいない人は存在しない。その母親に、自分がどんな思いを出してきたか。またお母さんは、あなたにどんなことをしてくれたのか、どんなことをしてくれなかった

1985年8月　湯の山温泉での初の宿泊セミナー

のか、思い出せる限りを書いていく。

　肉体はその時代に戻れなくとも、思いは、いつの時代へでも自由に向けることができる。そうしていく中で、今まで見過ごしてきた汚い自分が見えてくるかもしれない。見たくない自分が顔を出してくるかもしれない。許せない自分が現れてくるかもしれない。そんな自分を許し受け入れていくことから、少しずつ、自分の本質に近づいていけるのでは。

　人間は生まれ、その環境の中で生きていくうちに、肉体を自分と思い、数々の心癖や汚れを付けてくる。

自分を見ることで、その心の闇に気付き、それを排除するのではなく受け入れ認めていく。
その汚れは、今だけのものではなく、長い転生の中で培われてきた闇や心癖もある。それに気付いていくこと、それこそが肉体を持つ目的ではないだろうか。
その自分と対面するために母親という存在がある。そのためにこそ、母親は自分を産んでくれたのではないだろうか。
それらのことが、「母親の反省」を通して確信になった。
以来、多くの人が、その人の話を聞くようになっていった。学校の休みの日に、喫茶店で、また有志の家で、いろんな形で、いろんな機会に、その人は、自分の気付いたことを無償で多くの人に伝えようとした。
耳を傾けようとしたのは、子供の問題を抱える主婦、仕事のことで悩むサラリーマンや経営者、人の身体を治す治療師、心の問題を扱う心理療法士、インチキ宗教団体にだまされた人、超能力を求め心をゆがめてしまった人……そして、本当のことを知りたいと思うたくさんの人たち。

とても、学校の休みを利用してできる範囲のことで

はなくなってきた。しかも校長職として学校に勤めている限り、思うように休暇をとることはできない。

その人は、定年を翌年に控えて、これからは命がけで本当のことを伝えていこう。本当のことを知りたいと思う人の手助けをしていこうと、校長職を依願退職した。

やがて、心を見るセミナーがスタートする。

第二章　開かれたパンドラの箱

1

　君は「心を見る学びをしている」などと言うと、いかにも心のきれいな人間のように聞こえないかい。俗世間から離れた、なにか普通の人とは少し違うようなイメージを持つ人もいると思うんだ。これは大きな勘違いだと思う。

　心を見るというのは、自分の中にしまい込み、決して見たくない闇の自分に出会うことに他ならないんだ。だって、自分の中を覗いたって、良いものなんて出てくるはずがないよなあ。日頃、自分がしていること、考えていることを見たって想像がつくと思うんだ。それを、自分は素晴らしいって思ってしまうところが、人間の悲しさっていうもんだろうね。

　そんな人が自分の心の中が見えてきたら、ぶったまげるしかないよなあ。

　舌切り雀の意地悪婆さんみたいに、宝の葛籠（つづら）だと思って開けてみたら、化け物や汚いがらくたが飛び出して

くるんだからね。
　心を見る勉強会が始まった頃は、学んでいるみんなも、ハッキリそのことに気付いていなかったと思うんだ。
　みんな、我こそはとしのぎを削り、競争の中にあって、競争すること自体が「熱心に学んでいる」「熱心に心を見ている」、そんな勘違いの上に成り立っていた。
　もちろん、その人がそんなことを言う訳はないんだけど、学んでいる人の心の中には、どうしてもそういう思いがあったと思うんだ。
　それこそが、僕たちが「第一の危機」って言ってるもんの正体だと思うんだよ。

　ゴメンゴメン、いきなり君に「第一の危機」などと言っても分かる訳ないよねえ。
　そこで、ここでは、大阪に住む何人かの方々の口を通して「心の勉強会」と呼ばれていたセミナーの初期の状態。そして、少し暗い話になるかもしれないけど、学ぶ人の心から出てくる闇の思いが、「心の学び」をねじ曲げていく状態、つまり「第一の危機」と僕たちが呼んでいるものについても語っていこうと思うんだ。
　ところで、君に分かりやすく伝えるために、僕は「心

の学び」を続ける何人かの仲間のもとを訪問取材してみた。
　誰を訪ねるのかは、特に意味があって選んだんじゃない。
　それは、自分が気になっている人間だったり、話す内容について、その人が何か大きな示唆を与えてくれるんじゃないだろうか、そんな当てずっぽうに近い状態で選んだに過ぎない。
　ただ名前をあげるにあたっては、僕のこの時代では、まだ本名をあげるとまずいのかなあと思われる方々もいる。そこで、これ以降登場する方は、すべて名前を変えている。名前が誰であっても本筋とは関係ないと思うからだ。
　それに、人の心っていうメンタルな部分を扱うだろう。聞き手の僕と話してくれている人の間に微妙な行き違いだって起こりかねない。どうしても「僕」というフィルターを通らざるを得ないからだ。しかも気付かないうちに、人の傷口に手を突っ込んで引っかき回している場合だってある。
　それは僕の未熟さから来るもんなんだけど、それにもかかわらず、みんな喜んで取材に応じてくれた。

また、たくさんの方を取材したが、取材に応じてくれたのに、誌面の都合で載せられなかったり、取材できなかったりってことも起こってきた。

唐突だけど、本当にありがとうございました。

2

目指すご夫婦は、大阪の千里に住んでいる。

実は僕たち夫婦も、17 年前は、この千里に住んでいた。僕たち夫婦はよく転々と住まいを換えるが、この千里には 15 年近く住み、懐かしい思い出が詰まっている。

自分の家を持たず、ライフスタイルに合わせて住む所を換えていくというのが、僕たち夫婦の共通した考え方だった。ほぼ 10 年周期で大きな転居をしており、どの場所もそれぞれ忘れがたいのだが、中でも千里が一番懐かしい。

よく「第二の故郷」などと表現する人がいるが、僕たち夫婦にとっては、千里は「故郷」そのもののような場所でもある。

特に目良さん夫妻には、夫婦共々、ひとかたならぬ

お世話になった。
　そこで目良さん宅には、懐かしさも手伝って夫婦でお邪魔することにした。
　女房の運転で近畿自動車道を吹田で降り、千里の町並みに入ると、街路樹や公園の緑が「お帰り」と言ってくれているようでホンワリとうれしくなってくる。

　やがて目良さんの家に到着。
　目良さん夫妻がこの学びと出会った経緯は、実は、僕の妻がこの学びを始めたこととも深く関わっている。
　当時、と言っても今から20年以上も前のことになるが、僕の妻は「朝起き会」という集まりに参加していた。その普及活動に近隣の家を訪問して回ったりするらしいのだが、妻が訪ねた家に目良さんの家があった。
　ご主人の名前は目良義泰さん、奥さんの名前は文代さんという。何でも目良さんのお父さんは、関西に本社を置く日本屈指の大会社の会長であり、奥さんのお父さんはといえば、これまた関東に本社を置く大会社の社長、結婚当初は、政略結婚だなどと騒がれたりもした。
　なぜこんなことに触れるかというと、こんな家柄だ

から、やたらガードが固いのだ。家の門は電子ロックされており、突然の訪問者はここで追い返され、中へ人を通すことはまずない。子供の頃から「人に利用されないよう」にとしつけられ、しかも奥さんの文代さん自身も家の中に他人を通すのがイヤなタイプ。警察が来ても鍵を開けないという人で、多くの場合インターホンで話を聞いて終わりということになる。それがどうしたことか、妻が訪問した時、客室へ通され、朝起き会の勧誘のつもりが逆に「阿津多美子」さんという霊道者を紹介されることになったという。文代さんは、「どうして部屋へ招き入れたのか、今思うと不思議だわねぇ」と話してくれた。

　ところで、なぜ目良さんが霊道者に知り合いがあるのかというと、それは目良さん夫婦のご両親が絡んでくる。それぞれのご両親、特にお父さん同士が大の信心家なのだ。それは仏教、神道などの伝統的宗教から、霊的なものにまで及んでいる。

　目良家では、姓名判断から結婚まで、なにかというと大山剛直という密教系の宗教家に相談するのが習わしとなっていたようだ。目良さん夫婦の結婚からして、仲人はというと大徳寺瑞宝院の住職だが、二人の相性

とかになるとこの大山剛直氏に相談し、氏がＯＫしないとダメだったという。しかも本人同士もさることながら、父親同士がお互いに気に入り、息子夫婦の結婚後も、何かというと、家族ぐるみで神社仏閣巡りの旅行をしたという。那智大社や今宮戎（いまみやえびす）、２月のお水取りなどは毎年欠かしたことがなく、その都度目良さんが運転手をすることになった。

こんなエピソードがある。

両家の家族の中で「名前」が変わっていないのは数名しかいないというのだ。他はすべて大山剛直氏の姓名判断で名前が変わってしまっているという。ちなみに義泰さんの元の名前は清明さん、奥さんの文代さんは光子（てるこ）さんであった。

この大山剛直氏が亡くなってからは、ご両親は、その遺骨が納骨されている神呪寺（かんのうじ）への参拝も欠かさないようになった。

こんな環境の中、義泰さんは育った。

父親に喜んでもらおうと、自然と宗教や霊的なものへの関心が強くなっていった。ある時には九州の寺まで滝に打たれに行ったという。それは一つには精神修養ということもあるが、奥さんの弟さんが「ギランバ

レー症候群」という難病にかかったためでもある。
　その頃、ある人に紹介されて知ったのが、阿津多美子さんだった。彼女は霊道者として除霊や浄霊に力があり、人に知られる存在となっていた。その阿津さんが、弟さんの病を「先祖の障りによるものだ」と言ったのだ。義泰さんが滝に打たれにはるばる九州まで足を延ばしたのも、奥さんの弟さんの病気平癒を願っての水垢離だったようだ。
　さて、この阿津多美子さんが、その人、田池氏のことを知っていた。
　当時、その人は、大阪府立高校の校長先生をしており、「人間はなぜ生まれてくるのか」「人生の目的は何か」ということを必死になって考え、自身の変革を教理の主体に置くある宗教団体に参加していたこともあった。しかし、何かここも違うような気がし、その会からも抜け、自力でこの壮大なテーマに取り組んでいた。
　阿津多美子さんとは、この団体で知り合ったようだ。

　ところで僕の妻だが、本当のものはどこにあるのかと会う人ごとに情報を求めていた。そして目良さんの奥さんから阿津多美子さんを紹介され、早速、阿津さ

んのお宅を訪ね、その阿津さんから、その人のことを聞いた。

　今では、阿津さんも、熱心にその人の指導のもと「自分の心を見る」ということに必死になっておられるが、その頃は、あまり重要とは思っておられなかったように感じられる。

「会ってみるのもいいけど……」

　そんな雰囲気で、その人田池氏のことを教えてくれたという。

　何を求めて妻がその人のもとを訪ねたのか、そのことは後に譲るとして、今度は、妻が目良さん夫婦に、その人のことを伝えることになる。

「私はいいの。心を見るなんて面倒くさいからイヤです。」

　妻は、何度も断る文代さんを、なかば強引に、小南さんの家で開かれたセミナーに引っ張っていった。

　当時は、土曜や日曜、つまりその人、田池先生が校長職を休める日に、有志の家に来てもらい「心を見ること」「人間の本質は意識だ」ということを話してもらったり、心を見ていく手助けとして、霊道者の人が、希望者の意識を出してもらったりということをしていた。

小南千代子さん、僕の妻と一緒に熱心に「朝起き会」をやっていた方だ。それが二人して、田池氏のもとを訪ね、二人して感銘を受けて帰ってきた。帰ってきてしばらくして、その小南さんの家に、その人、田池氏が来てくれることになった。

文代さんはイヤイヤの参加だったという。それでも、何かもっと新しいものに出会えるかも……そんな期待がない訳ではなかった。

しかし、その期待は外れたという。

「誰かさんの真似をしてるだけじゃないの。大した人じゃないわ。」

そんな思いを抱えて文代さんは帰った。

ところが、そんな思いを抱えて帰ったというのに、富田林簡易保険保養センターで一泊の「反省セミナー」が開かれると聞いた時、文代さんは、「試しにもう一度だけ……」そう思って参加することにした。

このセミナーで、文代さんは、自ら進んでチャネリングを受けてみた。それは一歩引いていた自分が積極的に自分の心を覗いてみようと思ったということなのだろう。チャネラーから出た自分の思いは「私は素晴らしい。私はすべて整っている……」、そんな内容だっ

たことを覚えている。

　それより何より自分でもビックリしたことがある。

　自分でもあんなにイヤがっていたのに、はじめてノートを開き、本気で自分を見つめようと「母親の反省」を書き始めたのだ。母親がどんな人かを書くのではなく、母親にどんな思いを使ってきたかをできるだけ思い出し書き綴っていく。

「はじめて自分と向かい合った。」

　そう思うと、妙にうれしかった。よほどウキウキしていたのか、その日、ご主人の義泰さんが勤めから帰ってくるなり言った一言。

「おまえ、今日は何かいいことでもあったのか？」って。

「これが私に起こった第一の奇跡です」と文代さんはうれしそうに語った。

　以来、文代さんは熱心に自分の心と取り組むようになり、ご主人の義泰さんも、自分の母親の家で開かれたセミナーにはじめて参加することになった。

　ところで文代さんにとっての第二の奇跡は、夫婦喧嘩だという。波風を立てないよう、今まで良い妻、良い嫁を演じてきて夫婦喧嘩もしたことがなかったという。それがセミナーに参加し自分の心を見るように

なって、そんな自分の苦しさが分かるようになってきた。セミナーの中で、自分の心を覗く手助けとして「闇出し現象」という時間があるが、その時、文代さんは、自分の苦しい心とはじめて出会い、「苦しかった！」と叫びながら会場中を転げ回ったという。

これ以降、夫とも喧嘩をするようになった。今までは抑えていたが、我慢せずに思ったことを言い、衝突もする。しかしズルズルと後は引かず、すぐに自分の心を見る、そんな習慣がつくようになった。その人に言われた「言いたいことを言って仲良くしなさい」、今はこれを実践し「心が楽になった」とうれしそうに話してくれた。

ところでご主人の義泰さんにもセミナーに参加するようになって、大きな変化が起こってきた。まずはタバコを喫わなくなったということ。

タバコは大航海時代、カリブ海からヨーロッパに持ち込まれ、ポルトガル人の手で日本へと渡ってきた。以来、爆発的なヒット商品となり「相思草」とか「泥棒草」とか呼ばれるようになる。「泥棒しても喫わずにおれない」ということらしい。江戸時代には、タバコの不始末による失火が相次ぎ、「火事と喧嘩は江戸の花」

と言われるほどとなった。このため徳川幕府はたびたびの禁煙令を発するが、にもかかわらず「江戸城内」でも禁煙が徹底できず、ついにタバコの不始末による失火から江戸城天守閣が燃え落ちるという事態となった。豊臣にも落とせなかった江戸城本丸がタバコにより消失するという皮肉な話。以来、江戸城には天守閣がなくなった。それほどの強敵であるタバコ、ちょっとやそっとでやめられるはずもない。

セミナーでも、「タバコは喫ってはいけない」という訳ではないが、「百害あって一利なし」と言われるように身体に悪いだけのものだから、できるだけ喫わないよう、よくその人も講話の中でそんな話をされていた。目良さんも、タバコは良くないのは分かっているのだが、なかなかやめられない。

そんな目良さんにタバコをやめる決心をさせたのはお母さんだった。

目良さんのお母さんは言う。

「何でもできたお父さんやったけど、一つだけできないことがあった。タバコをやめること、禁煙だけはできなかった。」

「……………。」

「お父さんにもできなかったことや、おまえにはできんやろなぁ。」

この一言が、目良さんにタバコをやめさせた。

こんな話をしたからといって、目良さんのお母さんが、セミナーに賛成していた訳ではない。むしろ強硬に反対しており、このことでは奥さんの文代さんともよく衝突したという。今までは良い嫁を演じていた文代さんも、自分の思いを述べ、引き下がることはしなかった。一時は「嫁にそんなことを言われる筋合いはない」と、大喧嘩の末、勘当ということになった。しかし、姑さんも良くできた人で、お互いが分かり合おうと何十通という手紙のやりとりの末、その人にも「早く仲直りをしなさい」と言われていた矢先、そのお母さんが、文代さんの好きなものを持って目良さん宅を訪ね、「本当は仲良くしたいんだよ」と本音を吐露された。

お互いが言いたいことを言ってぶつかり、そのうえで自分の心を見ていき、謝るところは謝ってズルズルと後を引かない。目良さんのお母さんは、セミナーにこそ反対していたが、本質のところで「心を見る」実践をされている人だったと思う。

義泰さんも、「タバコの件から考えても、母は反対の

ことを言って、自分たちを導いてくれている。そんな役割を果たしてくれているように思えてならない」、そんな風にお母さんのことを話されていた。

以来、義泰さん、文代さん夫妻は、今まで以上に熱心に「自分の心を見る」ということに本気で取り組まれるようになった。

そんな時、大阪で開かれたセミナーで義泰さんにある事件が起こった。

文代さんのところでも触れた、俗に我々が「闇出し」と呼んでいるものがセミナーの中で行われる。それは、自分が抱えている闇を、知識ではなく、自分の身体で感じてもらおうというものだ。具体的には、その人が、手かざしのようなことをしたり、指先を誰かに向けたり、時にはその人の目を見るように仕向けたりする。その人の言うところによると、形は別に何でもいいそうだ。要は、その人が、その人のほうに意識を向けるようにするだけのことだという。だから、相手の名前を呼んだり、指を向けたり、手をかざしたりする、それだけのことだという。

では、そうされると、一体どうなるのか。僕の場合は、最初のうち笑っているのだが、そのうち心臓がギューッ

と締め付けられたような感じになり、一瞬、周りのすべてが消え、頭の中が、というより、周りが真っ白になり、このまま死んでしまうのかと思うような苦しみに包まれる。でも肉体的に痛いとか、苦しいとかいう感覚ではない。

気が付くと、いつの間にか転げ回っている自分がいる。その頃には、頭もハッキリし、自分が何をしているかも分かっているのだが、自分の中から、わめき声が、叫び声が、止めどもなく湧き上がってくる。

やがて、田池先生の「ありがとうございました」という声で我に返ることになる。

その間、せいぜい10分か20分ぐらいだと思うのだが、終わってから、なぜか分からないが、ともかく、間違ってきた、みんな自分のせいだ、間違ってきた、間違ってきたという思いが止めどもなく込み上がってきて、先ほどとはまた違う叫びが涙とともに噴き上がってくる。

これを闇出し現象と呼んでいるのだが、誰でもなる訳ではなく、良いも悪いも意識の世界に、ある程度、敏感になっている必要がある。そうでないと、見ていても何のことか分からず、まるで狂っているか、お芝

居をしているようにしか見えない。
　目良義泰さんも、このことが最初分からず、自分がそんな状態になるなど、とても考えられず、なぜ、あんな風になるんだろうと、醒めた目で見ておられた。
　それが大阪の八尾で開かれた男子ばかりのセミナーの時、自分がそうなってしまった。
　椅子に座った状態で、義泰さんは、その人に指さしされ、その途端、全身から絞り出したような叫び声を上げ、椅子ごとひっくり返ってしまったのだ。義泰さんは、その時のことを「頭のてっぺんから足の先まで、全身に電気が走ったように感じ、同時に何かあたたかいものに全身が包まれたような感じだった」と表現されている。
　また、今まで、人のことを見て「おかしい」と思っていたが、まさか自分があんな風になるとは思ってもみなかったとも述べておられた。
　今はご夫婦ばかりか、娘さんも加わり、熱心にこの学びを続けておられる。

　インタビューの冒頭、文代さんがこんなことをポツリと言われた。

「私は死ぬのが怖かった。死は平等だと思う反面、死とは何か、生まれてくるとはどういうことか、どうして生まれてくるのか。小さな頃、そんなことをよく考えた。でもそんなことを考えていると、分からなくて叫び出しそうになる。だから考えるのをやめた。」

　インタビューも終わった翌日のことだ。文代さんから電話があった。

「あの時、死が怖いと言いましたが、今は永遠になくならない自分、意識が自分だということを知り、うれしくてたまりません。

　自分を見つめていった時、自分が怖がっていたのは自分が消滅してしまうことだったように思います。限りないさびしさを封じ込め、それを見ないよう、考えないよう生きてきました。まだ死は怖くないとは言い切れませんが、意識が永遠だということを信じるたびに、少しずつ死への恐怖が薄れてきているのを感じます。うれしい……それを言えなかったのが残念で、お電話させてもらいました。」

3

目良さんのお宅から車で５分ぐらいの所に小南さん夫妻の住むマンションがある。

箕面の山並みを見晴らす眺望の良いマンションで、僕たちがまだ千里にいる頃は、家族ぐるみで付き合っていただいており、このマンションからの眺めは、僕のお気に入りの一つだった。

さて、小南さんがこの学びに出会ったきっかけは、二番目のお子さんを亡くしたことが大きく影響している。二番目のお子さんは、心臓病で、生まれて五ヶ月ぐらいで亡くなった。次の子を身ごもったが、絶えず不安が付きまとっていた。かといって宗教は嫌いで宗教にすがろうという気はない。そこへ中学以来の友人が「朝起き会」を勧めにきた。聞けば社会教育団体で宗教ではないという。

その時ふと「自分は今まで努力らしい努力を何一つしてこなかった。これを機会に何か一つ努力してみよう」と思い、朝起き会に参加してみることにした。

ここで、今までしたこともなかった「自分を振り返る」

ということを、はじめてしてみようということになる。この「自分を振り返る」ということが強く心に響いたのを覚えている。
　ただ、他のことは、どこか違うような気がしていた。なにか本当のことがあるように思い、会で知り会った僕の妻と一緒に、本当に納得できる「心の学び」はないかと探し歩くことになったという。
　そんな矢先、目良さんを通じて、その人のことを知ることになった。
「しかし、今思うと、自分は傲慢だった」と、彼女は述懐する。
　というのは弟さんがお母さんと折り合いが悪かった。だから弟がこの勉強をしたらいいと思ってしまったのだ。その為には、「まず自分が勉強しなければいけない」と思った。自分は大丈夫だけれど、人を救ってやるために、そんな傲慢な思いでこの学びを始めたというのだ。
　そのうちに霊道を開いてしまった。今のようなちゃんとした勉強もないまま、訳も分からず霊道を開いてしまった。自分はできているから霊道を開いたんだ。霊道を開いたものはでき上がっているんだ、そんな傲慢な思いがあったとも言われる。

その人は、「間違ってきたからこそ生まれてきて、そして、この学びに出会った」と言われているのに、「自分だけは違う」、その思いがしっかりあった。そんな基盤の上に霊道を開いたと思う。

しかし気付かせてもらうことは多々あった。一番最初に、昔は「光を入れる」というようなことを言っていたと思うが、先生が今の闇出しのようなことをしてくれたことがある。（それは、じっと相手の目を見つめたり、手かざしのようなことをしたりというようなことなのだが、それは光を入れるとか、力を与えるとか、そういったことではなく、相手の意識を自分に向けさせる、ただ、それだけのことだという。）

小南さん、その時は何ともなかったのだが、家へ帰るなり、真っ暗な中を漂っている自分があり、それがいきなり掬（すく）い上げられたような、引っ張り上げられたようなイメージを感じたという。

こんなことを感じさせてもらいながらも、霊道を開いてしまったら、「ハッキリ言えば競争の世界ですね」と、小南さんは言う。

私、鈍感だったので、何にも分からないから、たとえば○○さんがすごく羨ましいとか、あの人はチャネ

リングでも、きれいな言葉を出すとか、私はそれがなかったから……競争の中で、道を見失い、その人が誰を認めてくれるかとか、その人の言葉で一喜一憂する、そのような思いの中でやってきた。それこそ闇への直行便だったように思う。今思えば、波動が分からず、自分で競争心をあおり立て、その人を信じるよりも、肉の自分を信じていたと思う。

そんな中、起こるべくして「第一の危機」とか「第二の危機」とか言われるものが起こった。これは本来、霊道とは自分の間違いに気付くためにあるべきものなのに、その霊道を開いていることが「偉い」、他より「優れている」と勘違いし、その間違った方向の当然行き着いた結果であった。それも一人や二人ではなく、何十名という霊道者の多くがエラーを起こし始め、その意識が危険な状態に陥り出した。

自分の妻も含め、霊道者と言われた多くの人が、今にも気が狂い出しそうな不安な心の状態が続いたという。ただ、この状態は暗いほうにも、明るいほうにも、心が超過敏な状態にあり、自分は「どうしようもなくダメな人間だ」と底の底まで落ち込んだかと思うと、良いほうに向いた時には、周りの人のちょっとした励

ましの言葉や、鳥の声、草の一本一本のたたずまいにも、心の底から込み上げてくるような喜びや感謝を感じたりもする。

小南さんに、その頃のことを書いていただいたものがある。重複するところもあるが、心の向け先が違うとどんなに危険なのかが分かりやすく書かれているので、できるだけ、そのままを紹介させていただくことにする。

私がこの学びを始めて３年ほど経った頃、学びの姿勢が問われる大きな転機がありました。それが第一・第二の危機といわれる出来事でした。私にとって大きな挫折でしたが、その体験を経て、ようやく自分を真剣に見つめ直す契機となりました。まだまだ肉が基盤でしたが、セミナーに向かう姿勢が一変しました。

この時の心の体験が、今に生きていることを感じます。

昭和 60 年３月、私は初めて半日の勉強会に参加しました。当時は宿泊セミナーもなく、その人も現役の校長先生でした。その勉強会の帰り道、地下鉄

を待っていると、「私には何かやるべきことがある」と背中を強く強く押される思いになりました。

後日、その人とお会いした時には、「真っ暗闇から引き上げられた」と感じました。こんなことを書くと随分敏感なようですが、それまでの私はまったく鈍感で、こんな体験は初めてでした。

まだ心の中の地獄の蓋をしっかりと閉ざしていた私は別に苦しくもなく、当面悩みもありませんでした。その人から「みんな自分の心を修正するために生まれてきたのです」と聞いても、心に響くはずもなく、それは他の人であって私は違うと内心思っていました。そんな私が学び始めて一年も経たない頃、学びの方たちの集まりで急に異語が口から飛び出して、いわゆる霊道が開いてしまったのです。霊道が開けば色々な事が分かるのかと思っていましたが、そんなこともなく、流されるままに「私は霊道者」というプライドだけを膨らませていきました。

真実の世界を知るには、肉のレベルのことがいくら分かっても意味がないということに気付くのは、ずっと後のことでした。いつの間にか、「心がきれいだから霊道が開いた」「霊道を開いた私はできて

いる」と思っていました。

霊道が開く前、その人は、私たちの前で「なぜ霊道が開くか分かりますか。自分の心を見易くするためですよ」とハッキリと言われていました。そんな言葉も、最初感じた思いも、どこかへ吹き飛んでいました。自分の心を真摯（しんし）に見ることもなく、その人の講話も都合の悪いことは全部他人事（ひとごと）でした。

でも、私の心の地獄の蓋は確実に開き始めていました。一緒に勉強を始めた友達も次々と霊道を開くようになり、親しいが故に比べ合い、競い合いが始まりました。その人の言動に一喜一憂し、勉強会に集ってきた人々の態度に翻弄され、誰が認められているか、評価されているか、そんなことにばかり思いがいくようになりました。有体（ありてい）に言えば、嫉妬、妬み、勝った、負けた……が、私の心を大きく占領しました。とても心の学びをしているとはいえない情けない状態で、私の中にこんな愚かな心があったことに驚きました。一番認めたくない心でした。毎日こんな心を出しながら、相手ばかりを責めていました。やがて霊道者を中心に多くの人たちが、心の段階を競い合うようになりました。

私たちはすっかり学びの本道から外れ、第一の危機が起こったのです。それでも原因はあの人だ、私ではないと、責任を転嫁していました。

今から思えば、その人は、そんな私たちの「己一番」の思いが出易いように言葉を投げかけ、環境を整え、早く気付きなさいと心をかき混ぜてくれました。

でも相変わらずの私たちに、起こるべくして第二の危機が起こりました。戦いに明け暮れていた私たち霊道者の意識があらわになりました。まさに、その人に刃向かい、己を高く高くそびえ立たせている真っ黒な意識でした。

自分の心を見ることなく、外へ外へ思いを向けていた私にとって、大きな衝撃でした。その時、友達同士で出し合ったお互いの意識のテープを、夜を徹して起こしていると、言葉や内容ではなく、自分が流している波動の何とも言えない重苦しさが心に迫ってきました。波動というものが、はじめて自分の事として心に突き刺さりました。何の言い訳もありませんでした。今までは頭の学びだったことがよく分かりました。

夜が明けるのを待って、その人へ電話しました。

「私はもの凄い波動でした。生まれ変わりたいです！」と必死に伝えました。

その時、「それは尊い言葉です。でも、ちょっとやそっとでは変りません」と、きっぱりと言われました。その通りでした。

霊道者といっても鈍感だった私が、しばらくの間超敏感になり、苦しくて苦しくてたまらなくなりました。このまま狂うかもしれないという恐怖で一杯でした。自分の心の世界がこんなにも苦しいものだと、やっと実感できました。

もう心を見るしかない、ボロボロの中で、母の反省を始めました。心を見るということは、決してきれいごとではないことを思い知りました。そして私の心の闇を暴いてくれたこの学びは、本物だと思いました。

また心を見るということは、波動を感じるということでした。

少しでも「自分の中」に思いが向き、何かに気付いた時、とたんに心が和んで安らかになります。波動には明と暗があることがよく分かりました。色々な波動の世界を心に感じるようになりました。その

中のいくつかを書いてみます。

昼間は苦しくてざわついていた心が、主人が仕事から帰ってくると、ほっと和むのです。子供が中心だった私には、新鮮な驚きでした。私の心にとって、主人は大切な存在だと感じました。

また夜が眠りにくかった頃、イヤイヤ帰った実家でぐっすりと眠ることができ、お母さんの存在ってすごいと思いました。翌々日実家から帰ってきた駐車場で、集団で遊ぶ雀の姿が目に入りました。その瞬間、うれしくてうれしくてたまらなくなりました。今でも忘れることはできません。

ある日、母の反省をしていたら、息子が私の膝に座りにきました。その時、幼かった私が、母の膝の上でただうれしくて幸せだった思いが、心によみがえってきました。

心の向け先を、「外」から「内」へ変えようとしただけで、私の心の世界は少しずつ変り始めてきました。

そんな中でも大きな転機となった二つの体験があります。当時、その人からの言葉は非常に厳しいものでした。でも流れてくる波動は違いました。自分

の心を振り返っていた時、「あー私は愛されている」と、心にハッキリと感じました。もう一つは、狂いそうな心を抱えながら一人で東京セミナーへ向かっていた時のことです。

新幹線のホームで、ある方が「小南さん」と大声で呼びかけてくれました。優越感の裏返しで、みんなから軽蔑されていると思い込んでおり、こんな時に声をかけてもらって、驚くと同時に、心からうれしいと思いました。新幹線の中で、うれし涙がこぼれました。

セミナーから帰宅して、気付きました。私は自分の闇を嫌って嫌って、闇から逃げることばかり考えてきた。私は本当に間違っていた。あの時一声かけてもらったように、私も心の中の闇たちに思いを向けていこう……そう思った時、心の中から喜びが爆発しました。自分の中の闇たちが、もう大喜びしているのが分かりました。

懺悔の涙と喜びの涙が一緒になって、タオルがぐしょぐしょになりました。自分の中の闇に心を向けることは喜びでした。愛でした。私が今まで頭で考えていた世界と、まったく違う世界が開け始めてき

ました。

道のりは遠くても、向かおうとしている方向に間違いはないと、心に感じました。ここから私の本当の学びがスタートしました。

少し波動を感じるようになって、ようやくその人の真価が心で分かり始めてきました。それまでその人の言動を、すべて私の頭で判断し、肉の次元に引きずり落としてきました。その人を、意識の世界を、見くびり侮ってきました。本当に申し訳ありませんでした。そして共に心を出し合い、私の凄まじい闇を受けてくれた仲間たちに、ただただありがとうしかありません。

第二の危機から早や十八年。つまずきながら転びながら、それでも一生懸命この道を歩いてきました。今、その人の波動を真っ直ぐに感じる時、心は驚きと喜びで一杯になります。「お母さん、ありがとう」が溢れます。

お母さんはすべてを分かっていて、そしてすべてを許して受け入れてくれていました。その人と出会い、私の生き方は大きく変わりました。これまで体験してきた一つひとつが大切で愛しいです。物事に

プラスもマイナスもない、すべてがプラスですと言われるその人の言葉通りの20数年でした。

インタビューの終わりに、ご主人の敏治さんは、「自分はあまりこの学びに熱心ではないが」と前置きされたうえで、奥さんの喜ぶ顔が見たいから一緒に学んでいると言われました。仕事を持つと、家庭の中で奥さんと一体感を持てるようなことが少なくなる。一緒に一つのことをやっている実感が欲しくてやり始めたが、それでも「この学びに自分なりに取り組むようになって、自然とすべてのことが整い出した」と淡々と話してくれた。

お二人は、大学時代からの付き合いで、同じ大学・同じクラブで活動された、まるで同志のような仲の良いご夫婦だった。

4

人を思い通りに動かしたいとか、人の心が読めればとか……いろんな場面で、人は、往々にして、こんな思いを使うんじゃないのかなあ。

今、霊道とかチャネリングとかいう言葉が出てきたけど、これは思いを波動としてキャッチすることだと思うんだ。霊道を開くということは「意識の世界」に敏感になることで、自分の心を見ていくうえでは必要なことだと思うんだ。

でも、それが欲と結びついた時、とんでもなく危険なことになってしまう。本来、自分の中へ向かうべきことが、外へ向き、自分の思い通りに周りを動かそうとか、人の知り得ない情報をつかもうとしたりとか、また霊道を開くことが競争になり、霊道を開くことで、周りの人に自分を認めさせようとしたりとか……。

霊的に敏感になった人が、こんな思いを持ち始めると、僕たちが「第一の危機」とか「第二の危機」とか言ってるような大変なことになってくる。

この学びの中で、霊的に鈍感な男連中の間でも、誰が「男の中で最初に霊道を開くのか」だとか、「その人の跡を継ぐのは誰だ」とか、そんな話題が、最初の頃は絶えなかった。

周りからも「次はあいつだ」なんて思われてると、その人間も知らず知らず本気になって「俺が頑張らなきゃ」なんて、どこかで思ってしまう。

次に紹介する阿津多美子さんの弟さんも、そんな経験者の一人だ。
まずは彼の話を聞いてほしい。

上から下までドスーンと落ちたような、あの感覚は二度と忘れられない。
冒頭、彼は、そう語り始めた。
白浜の「ホテル千畳」というところでセミナーがあった。
この頃になると、有志の人が交代で、会場の手配やらセミナーの運営等々をお世話してくれ、開催場所も関西だけではなく、東京や東北等でも行われるようになっていた。
その人田池氏は、学びたいという人が集まれば、手弁当でどこへでも出かけていった。
なかでも白浜の「ホテル千畳」は、一般の勉強会だけではなく、男だけの勉強会をやったりとか、よく利用させていただいたホテルだ。
「ホテル千畳での現象で、何がなにか訳が分からなくなった。」
そう彼は言う。
現象というのは、今では闇出し現象のことを指して

田池留吉氏（白浜温泉「ホテル千畳」でのセミナーの合間に）

いうが、その頃は、チャネリングによる勉強、つまり希望者の内面の思いをチャネラーが言葉で語り、それを耳で聞きながら次第に心で感じられるようになっていこうという勉強、これをも現象と呼んでいた。

そこでチャネラーは、勉強していく人たちが心を見ていくお手伝いをする訳だが、それを見守る人の目は、自分もチャネラーになりたいという思いを向けてくる。次第にチャネラーはスターとなり、ついには、チャネラーになるのが目的という本末転倒的なことが起こってくる。

ただ、こういったことは、「違う方向ですよ」「間違っ

ていますよ」と厳しく言われているため、誰もそのような思いを外に出そうとはしない。
「チャネラーが気付くだろう」って？　そうはいかない。そのチャネラー自体が、様々な思いを向けられているうちに、どっぷりと競争という闇の中に埋もれていく。
　チャネラーはでき上がった人間がやっているのではないのだ。
　彼は、自分の中にも、「チャネラーになることが目的」「チャネラーを目指すことが勉強」、そんな思いが確かにあったという。
　また、その人を手本にするという思いが強まり、よくその人の家に通い、その人の姿を追いかけていたように思う。「頑張ります」と言うたびに「何を頑張りますねん」と言われていた。
　今思えば、いずれ自分はその人の代わりをしなければ、そんな思いで「頑張ります」と言っていたようだ。
　彼は、白浜のセミナーで自分が自分でなくなっていくのを感じた。
　帰りの電車の中では、彼の様子がおかしいのに気付き、その人は、列車が終点の天王寺に到着するまで、

彼の傍に付き添い、彼の心に語りかけていた。

　そのせいもあってか、天王寺に到着する頃には、顔色も表情も元に戻り、彼を気遣う人たちに、喜びいっぱいで別れの挨拶をした。僕も、その場にいたが、こちらまでうれしくなるような喜びようだった。

「天王寺に着いた時、すごくうれしかった。でも、その後、部屋で瞑想した時、何かドーンと落ちていくような感じになった。すると部屋の絵が語りかけてくる。周りが、みんな敵に見える。自分の口から出る言葉と、自分の中から聞こえてくる思い、そのどちらが本当の声か分からなくなっていった。」

　そのうち一睡もできなくなった。その人が死んだ時、自分が代わってやっていかなければ。そんな思いがひっきりなしに出るようになる。そのうち、その思いが「その人を殺せ」になり、その人を殺さないためには、自分が死なないといけない。そんな強迫観念に襲われるようになった。

「あの時は、自分が死んだ感じやった。」

　彼は、「自分の意識が落ちていく感覚が忘れられない」と言う。どうしたらいいか分からなくて、誰彼なくチャネラーに電話していたが、その人から、「チャネラーに

心を向けたらダメ」ときつく叱られたと言う。また、「こういうことになってしまったら、家族の愛情が何よりも大きい」とも言われた。

　それからは、お姉さんの阿津多美子さんや、そのご主人の良男さん、それに彼のお兄さん夫婦やご両親と、家族ぐるみで彼を治すことに心を向けた。

　自殺しようとする彼を、布団で簀巻き（すまき）にして警察病院へ連れていったこともある。思いあまって彼を精神病院へ入れようとした時、彼のお兄さんが「弟を病院に入れないでほしい」と泣いて止めた。そんなお兄さんの意をくんで、多美子さんのご主人良男さんは、彼を自分の家へと連れて帰った。

　家族の愛情だけが、彼の支えだと信じていた。

　今、彼は完全に回復し、前よりも元気になってセミナーに通っている。その彼に「なぜ治ったの」「治った瞬間はどんな感じだったの」と訊いてみた。

「なぜと言われても分からないんですけど、自分の中から声が聞こえてきても一切聞かないようにし、公園に行ったりしてゆったりしているように心がけていました。

　そうしたら、ある時、ふーっと楽になったんです。」

その時は誰かがテープにダビングしてくれた唱歌や童謡を聴くともなく聴いていたと言う。「スーッと楽になって、すごく不思議な感覚でした。すごくうれしくなり、何かゆったりした気持ちになって、『普通にしててええのかなあ』『普通にしてててええんや』と思いました。そうしたらお腹が空いてきて、『普通にご飯食べてええんかなあ』『普通にご飯食べてええんや』。そんなことを思ったと言う。

それが、自分が治ったと思う瞬間だった。

それから、しばらくはセミナーで彼の顔を見ることはなかった。

が、ある時から、また彼がセミナーに来始めた。それも毎回、休むことなく参加するようになった。

最後に、彼がボソッと言った。

「治って結婚して、仕事もしないといけない、自分はセミナーに行けないと思い込んでいたようです。姉に『一泊でもいいから行ってみたら』と言われ、行く気になりましたが、最初は『行けるんかなあ』と半信半疑でした。

でも、行った時、『やっぱりここはええなあ』と思い、

ずっと行くようになりました。
『セミナーなんか行って何になるの』って言う人もいるけど、セミナーに来ると、うれしい。行けないと思っていたのは自分で、『自分が行こうと思ったら行けるようになるんやなあ』。それが今の実感です。」

5

この取材のため、彼の実家にお邪魔した。
昔、彼の家で「勉強会」が開かれたこともあり、何度かお邪魔したことがある。20 年以上も前のことになるが、その頃は、八尾の町並みを見下ろす高台にあり、昔からの家並が続き、のどかな田園という風情だったのを覚えている。
ところが今回行ってみると、高台は新興住宅地として家屋が埋め尽くし、元の家並みも、その中に紛れてしまって、自分がどこにいるのかも分からない。
電話では「大丈夫です。一人で行きますから……」と偉そうなことを言ったが、結局、迎えにきていただく羽目になってしまった。

家には彼とお母さん以外に、お姉さんの阿津多美子さんとご主人の良男さんにも来ていただいていた。
ひとしきり彼の話題が続いた後、阿津多美子さんがセミナーに参加するようになった経緯を話してくれた。

多美子さんは、最初、自己の変革を教理の主体に置いた、ある宗教団体に所属していた。彼女は、この教団が主催する箱根のセミナーで、実に不思議な体験をすることになる。
自分の身体が、どんどんどんどん上へあがっていくのだ。もちろん、実際に浮き上がる訳ではない。浮揚感というか、高揚感というのか、自分がどんどん浮き上がっていくような感覚に包まれたのだという。
「そんな現象がその時は何も分からず、『こんなんイヤヤなあ』と思ったぐらいで、その後結婚し、主人の反対もあり、自然とその教団へは足が遠のいていきました。」
この体験の後、その団体が発行する本を読んでみた。
そうしたら思いもせず異語が出るようになったという。異語とは、異語現象とも言うが、習得しない言葉、それはおそらく、どこの言語体系にも属さないような言葉が口をついて出てくるのだと言う。

この現象は収まるどころか、ますます顕著になり、聞こうともしない他人の思いまで伝わってくるようになった。こうして多美子さんは、霊道者となった。

多美子さんは思った。自分には使命があると……。

これに反し、ご主人の良男さんは、多美子さんをこのままにしておいたら大変なことになる。そう感じて、奥さんを止めよう、守ろうと必死になったという。

そんなご主人に多美子さんは、「私は、人を助けるために生まれてきました。どうか理解してほしい」と、熱心に説得する。

「誰も助けんでええ。子供を守って家庭を守っていればええんや」と、ご主人は言い返す。こんなやりとりが続く毎日だった。

良男さんとの軋轢（あつれき）もさることながら、霊道者としてのプレッシャーも強い。霊道者として分からないことがあってはいけない。みんなの疑問に答えていかなくてはいけない。みんなを救わなければ……。

そこへ、ご主人の良男さんがお兄さんとうまくいかず、そのトラブルが持ち込まれる。まさに多美子さんは、嵐の渦中にあったと言える。

そんな時、この団体で知り合ったその人が、新たに

「心の勉強会」を開かれるということを聞いた。しかも、ある人から「あなたからの電話を待ってるよ」と言われ、矢も楯もたまらずその人に電話したという。

電話した時、「嵐の真っ只中ですね」と言われ、話の意味より、なぜか涙が止まらず、この時、この勉強をしていきたいと思ったという。

そして、大阪の駒ヶ谷で開かれた勉強会にはじめて参加した。

駒ヶ谷は大阪府羽曳野市にあって葡萄の産地として知られている。駒ヶ谷から上ノ太子にかけての山地は一面の葡萄畑で、山全体が温室用のビニールシートで埋め尽くされており、遠くから見ると、まるで山が雪で覆われているかのような錯覚にとらわれる。

ところで、この駒ヶ谷でも、その人の教えに共鳴する人が多く、その地域の有志のお宅でよく勉強会が開かれていた。

僕も、この駒ヶ谷での勉強会に何度か参加したが、土地柄もあってか、作業着姿の男性が、手の先を真っ赤に染めたまま勉強会に顔を出される。おそらく作業の合間を見て参加されたのだろう。聞けば、指の赤いのはジベレリンのせいだという。ジベレリンに葡萄を

浸けることで種なし葡萄ができるのだという。
　そんな話を聞いて、何か一つ利口になったような気がしていたが、こっちがそんな暢気（のんき）なことを考えている時、多美子さんは真剣に自分の心を見る学びと取り組もうとしていた。

「阿津さん、分かれへんことは分かれへんでええねんで」と、その人が多美子さんに言った。その時は、プレッシャーで苦しくて苦しくて仕方がない状態だったが、この言葉を聞いて、なにか抱えてきたものがスーッと軽くなったような気がした。
「その時は、肉が本当の自分だと信じて疑わなかったから、何も分からないままでした。本当に自分の心が苦しいと叫び、苦しみ続けていることに気付き始めたのは、学びをして20年以上も経ってからのことでした」と、多美子さんは言う。
　そして、この時から、人を救うために生きる霊道者から、自分を救うために生きる霊道者となろうとした。
　しかし、ご主人の良男さんは、多美子さんのやっていることについて、通う会が替わっただけで、同じことをしているように思っていたのかもしれない。

「男は仕事がすべてだ」と、この学びには反対し、妻の多美子さんが勉強会に行くことにも猛烈に反対した。
ところが、多美子さんばかりか、多美子さんのお母さんや弟さんまでが、こぞって勉強会に参加するようになる。しかも自分の母である滋子さんまでが参加したいと言い出す始末。特に滋子さんは、この後、病で弱った身体をセミナーに運び続け、セミナーで死ねたら本望とまで言い出すような人であった。
良男さんは、このお母さんの熱意に屈し、彼女の運転手として勉強会に通わざるを得なくなっていった。
またお兄さんとのトラブルや仕事のトラブルを抱え、良男さんの心も悲鳴を上げ始めていた。
「心の安らぎを求めていたのかもしれませんなあ。」
良男さんは、奥さんの多美子さんに誘われ、東京で開かれた勉強会にはじめて参加した。そして勉強会に行くようになった動機をそんな風に話した。

自分の心が苦しさであふれかえっていた時、田池先生から電話をもらいました。
「おどかす訳やないけど、これから大変なことが起こってきます。他力の反省が何もできてないやろ」

と……。

本当にその通りでした。しかし、その時はまだ肉が納得しただけで、心はとてもとても納得できない状態でした。「あなたは肉を信じていきますか、意識を信じていきますか」と、自分の心が崖っぷちで問いかけられたと思いました。

「やっぱり意識を信じていきたい……。」

他力の思いの中にどっぷりと浸かりきった自分の心は、どこを向いても真っ黒な闇の中でした。

「今まで何をしていたんだろう。何も分かっていなかった。」

そんな思いが繰り返し繰り返し心の中を駆けめぐりました。

こうして阿津さん一家は、家族総出で「心の学び」に参加するようになる。

ところで良男さんは、勉強会に通うようになって、やっかいな問題にぶち当たった。母親がどうしようもなく嫌いなのだ。

自分の母親が、なぜこんなにもイヤなのか分からなかった。歳と病のため老醜さえ感じさせる母を生理的

に嫌った。部屋の中に入るのも汚らしくてイヤだった。
　そんな自分がイヤで、「母親の反省」もできなかった。セミナーに参加しても鈍感なままで、闇出し現象でも自分の中に根付いた闇を出すことはできなかった。
　しかし、その後、セミナーで「ふるさと」の歌を聞いた時、母親のやさしさが伝わってきたという。
　セミナーでは、その人を中心にして、よく「ふるさと」をみんなで歌う。ただ歌うだけではなく、そこから流れてくるやさしい波動、あたたかい波動、喜びの波動を、歌ったりリズムを取って身体を動かしたりしながら共有していく。音叉が共鳴し合って大きな振動となっていくように、喜びの波動も共鳴し合い大きくなっていく。
　良男さんも、この喜びが共鳴し合う波の中に押し包まれ、今まで閉ざしていた心が開いたのだろう。
　夜、セミナー会場になっているホテルの温泉でその人に会った。そして、言われるままに、湯船に浸かったままお母さんを思って瞑想した。
　それからだ。お母さんのことが汚いと思わなくなった。お母さんが愛しくなった。
　良男さんは本腰を入れて「自分の心」を見つめようと思った。

以来、ご夫婦で毎日のようにお母さんの病院に介護に通った。産毛(うぶげ)が伸びていたので、二日がかりで良男さんが顔をそり、多美子さんが散髪をしてあげた。

良男さんが、お母さんの顔を暖かいタオルで拭いてあげるのを見て、多美子さんは「お母さんにしてあげることがなくなったなあ」と思った。

次の日、お母さんが亡くなった。

突然のことだった。その時良男さんは、急な用向きで旅行に行く途中だった。京都駅まで来たところでお母さんの死を聞いた。大あわてで引き返したが、葬儀会場がいっぱいということで、その日は病院へ置いてもらうことになり、病室で、はじめてお母さんと対面したという。

目を閉じたら、「お母さん、ごめんなさい、ありがとう」という思いが出てくる。

目を開けると、現実に戻る。その繰り返しで一晩中泣いていた。

その人に報告の意味もあって二人で電話したが、泣いて話せない。多美子さんが「ただ、ありがとうしかありませんでした」と、やっとのことでそれだけを言った。

「これからやなあ」と、その人は言われた。その言葉

が心にずっしりと響き、うれしくて涙が止まらない。
「これからが本当の学びのスタートや」、そんな思いが込み上げてきたという。

良男さんは、お母さんが死んでから、本当に母親の反省ができるようになったという。それまで母親の反省といっても、何をしていいのか分からなかった。

幼稚園でお母さんの絵を描けと言われても、無茶苦茶に描き、手で塗り広げた。母親へのさびしさ、苛立ち、不満が溢れていたようだ。

「おまえはいらない子やった。水風呂に入っても流産しなかった。」

お母さんの滋子さんに、生前聞いた話だが、その頃は子供も多いうえに貧しくて、良男さんには本当に生まれてほしくなかったという。お腹の子を堕ろすために階段から飛び降りたり、水風呂に入ってみたり、お腹を踏んづけてもらったりしたが、どんなことをしても堕りなかった。そんなにして要らないと思った良男さんに、結局、最後は面倒を見てもらうことになったと、しみじみと話されたことがあった。

良男さんは言う。

「小学校から帰ってきた時、母親が入り口で手を振っ

て待ってくれている。それが何とも言えずうれしかった。母親のことを思うと、必ずその時の光景が浮かんできて、どうしようもなくあたたかいようなうれしいような……。

死んでからですなあ、母親のぬくもりが分かったのは。」

多美子さんから寄せていただいた一文がある。その一部を掲載する。

（上略）今まで心を外に向け、己一番、他力どっぷりの心で学びをしてきました。そんな心で、本当のことが心に響いてくるはずがありませんでした。

それからでした。本気になってホームページを開き、自分の心と真剣に向かい合うようになりました。自分の心を見て、自分のために生きていきたい……そのことが、どんなに大切なことだったのかを、心で気付き始めました。

そんな中、自分の今住んでいる世界は、どんな世界なんだろうと思った時、自分の心は地獄の底にあったんです。そんな自分の現状を心で確認できた時、うれ

しくてうれしくてたまりませんでした。
　こんな地獄の中に住んでいたんだから、何を誇ることもない。己を高く見せることも、己を表すことも、何も必要なかった。真っ黒なんやから、そのありのままの心を認めていけばよかったんや、そう思ったら、うれしくてうれしくて涙が止まりませんでした。何もかもすべてに、「ありがとう」しかありませんでした。
　私にとっての「第一の危機」は、「肉」しか信じられないで生きてきた心を転回していくために、自分の選んできたシナリオでした。
　たくさんの意識の出会いと、たくさんの方々との出会いで、己一番の心を出させてもらいました。ただただ出会ってくださってありがとうございました。
　何も求めず、ありのままの心で「お母さん……」って呼べることがうれしくてたまりません。本当にたくさんの出会いに「ありがとう」って思えることが、何よりうれしいです。

　今は良男さんと多美子さんの間にできた子供たちも、それに息子さんの婚約者までが勢揃いでセミナーに参加し、家族全員が自分の心と向き合おうとしている。

第三章　エルという会社

1

君の住む世界は、今、どんな風なんだろう。僕の住む世界では、今日もテレビで異常気象に関する番組を流している。例年より春が早く来て暖かくなったかと思うと、急に寒冷化して雪が降ったりしている。

今、我々が住む世界で一番ホットな話題が地球温暖化だ。

ある人は、アマゾンの熱帯雨林が 100 年ほどで砂漠化し、すべての陸地の森林が 400 年ほどで消滅し、この時点で世界の人口が現在の 100 分の一に減少、その後急速に砂漠化すると言われるし、またある人は、地球温暖化にどんなストップもかけられずこのまま進むと、240 年後という説もあるし 300 年後という説もあるのだが、平均気温は 100 度に達し、人類は死滅すると言われている。

心を見る仲間の一人に塩川香世さんっていう女性がいるんだ。これは本名だ。彼女は僕たちが今一番信頼

しているチャネラーで、「ありがとう」とか、「母なる宇宙とともに」Ⅰ・Ⅱという本も出している。だから名前を変える必要はないだろう。

　これらの本は、心を見ていく人にとって道案内となるよう書かれたものだが、「母なる宇宙とともに」のⅡのほうには、「天変地異」についても詳しく書かれている。予言書じゃないから、未来の情報を得るためではなく、天変地異というものが人類にとってどういうものかが書かれている。

　一言で言ってしまえば、「天変地異」というのは、人類が本当のことに気付いていくための大きな「愛」だというのだ。「天変地異」から流れるエネルギーは、私たちに「喜びに帰ろう」「ぬくもりに帰ろう」「母なる宇宙に帰ってきなさい」というメッセージを流しているという。「天変地異が愛だ」なんて、こんなこと書かれた本は今までなかった。それだけに大きな意味を持った本だと思う。

　でも、これらの本は、本当に君の手許に届くんだろうか。

　心配しても仕方がないか。

ところで、今まで何組かのご夫婦や家族に登場いただき、彼らがどんな心の体験をしてきたかを紹介してきたが、これは短い期間に起こったことばかりではないんだ。5年、10年と、自分の心を見ようとしてきた中で起こってきたことだってある。

最初、「勉強会」だと言ってたものが、「セミナー」という言い方に変わったり、勉強の仕方だって長い間に変遷してきている。

だから、ここまで書いてきた中にも、ある時には「勉強会」と言い、ある時は「セミナー」という言い方をしている。それは時間の差の中で生じたことだと理解してほしい。

さて、これから述べようとするのは、まさにこの「勉強会」から「セミナー」という名称に変化するようになった「エル」という会社の登場についてだ。

当初は、この学びをする仲間の間で、有志がボランティアとして会場を探したり、申込者の世話をしていた時期があった。

それがエルという会社ができることで、会場探しや、申込者の整理、学びについての情報を流したりとか、

いわば専属のお世話係ができたということだ。

これ以降、「勉強会」は「セミナー」という呼び方が定着するようになってくる。

そして、このエルという会社を設立したのが、現在、神奈川県で製造業を営まれている久保徹夫さんと久保明子さんのご夫婦であり、ここで僕自身もエルという会社と関わってくることになる。

2

1989年というから今から約18年前のことになるが、その年の12月に、株式会社エルが設立された。

そして、この同じ年の10月、「光のなかへ」という一冊の本が出版された。

それが僕が編集に携わった最初の本だ。

第二章で少し触れたと思うが、僕の妻は、大阪の千里に住む目良さんから、阿津多美子さんを紹介され、更に阿津さんを経てその人田池氏に出会うことができた。妻は、友人の小南さん共々、その人を訪ね、やっと本当のものに巡り会えたと大喜びをすることになった。

そこに悪役の登場。それが他ならぬ僕という訳だ。

僕は、先ほど登場いただいた阿津さんのご主人と同じく、いや、それ以上に女房どもの動きに胡散臭（うさんくさ）いものを感じていた。何がなんでも「反対」という立場をとっており、反対するための理論武装にと、「禅」を始める始末だ。

たかが高校の校長風情が、新興宗教まがいのことを説いているに過ぎない。何が分かるものか。こちらには禅の開祖達磨（だるま）禅師がついている。達磨だけじゃない、臨済禅の栄西だって、曹洞禅の道元だって、黄檗（おうばく）禅の隠元だって、みんなこっちの味方だ。

テキストだって、「大乗起信論」とか「臨済録」とか「正法眼蔵」とか、数え上げればキリがないぐらい立派な書物がごまんとあるんだ。

こうして書き上げるとマンガみたいだが、口にこそしないものの、心の中は本当にこんなマンガみたいなことを思っていた。

ところが女性というのは強いもので、こちらがいくら強硬に反対しようと、何がなんでも、こうと決めたら一歩も後へ引かない。

そのうえ、こちらが一歩譲歩すれば、一歩出てくる。

そして橋頭堡(きょうとうほ)を作り断固死守などという心構えを見せられると、弱い男性としては譲歩に譲歩を重ねて、挙げ句の果ては「勝手にしろ」ということになり、「自分の領域には入ってくるな」とモンロー主義を決め込むしか道は残されていない。

これが、その頃の僕の心の状態だった。そんな自分を見透かされるのがイヤで、せっせと座禅に通い、不動心を培おうとした。

ところがどっこい、こんな安っぽい自分は端から見透かされていた。

ある日、女房の口を通して、自分の中から語りかけてくるものがある。

「あなたの心は狭い」。あるいは言う。

「そろそろ囲いを外し、中の羊を自由にさせてやったらどうですか？」と。

最初は、茶番劇みたいで、女房が自分の思いを言ってるだけだ。チャネリングなどというたわけたモノを武器に、俺の聖域に斬り込みをかけてきやがった。

（言葉づかいが下品になって申し訳ない。）

ここだけは何があっても譲れない、そう力んでみたが、どこかで自分が間違っている、そんな思いも疼い

ていた。

　こんなに鬱々とするくらいなら、いっそ、本家本元を訪ねてみようと思った。

「田池という　いたずら者が　世にいでて　多くのものを惑わするかな」

　などと一休の歌を弄んでみても、何の解決にもならない。その人に会うしかない。それしかない。それで、すべてがスッキリする。

　こうして、僕はその人のもとを訪ねることになった。

　こんな気持ち、もし君が男ならきっと分かってくれるはずだよな。

　さて、ここは大阪の南の外れ、僕は、その人の住む大宝という町を訪ねてきた。ここへ来るまでは、何度途中で帰ろうとしたか知れない。その都度、勇気を奮い起こし、近鉄の貴志という駅まではやってきた。

（そうだ、その人はいないかもしれない。確か女房が、学校の用事で東京へ出張しておられるとか言っていた。よし、電話だけかけてみよう。留守だと言えば、このまま帰ることにしよう。）

　僕は、留守であることを願いつつ電話をした。

……が、その人はいた。そのうえ自宅で待っているという。

いろいろと聞きたいこともあった。いろいろと鬱屈（うっくつ）した思いも抱えていた。でも到着するなり、僕から出た言葉は、

「女房がいつもお世話になっています。今日はご挨拶に伺っただけです。では、これで失礼します。」

我ながら情けない話だった。

それに対し、その人は、

「大阪の北の端から南の端まで来たんだ。何か言いたいことがあるんだろう。上がって話していきなさい」という。

そう言われても、頭は真っ白で何を話していいのかよく分からない。適当に仏教や通っている座禅会の話をしたりしていた。そのうち、こちらも打ち解けて、丹波哲朗の話題やらシャーリー・マックレーンの話題までが飛び出してくる。

不思議なことが起こった。奥さんが、頃合いを見計らって、イチゴに練乳をかけたモノを運んできてくれたが、それを食べながら涙が出てくるのだ。

こんな体験ははじめてだ。しかも一方的にこちらが

しゃべっていて、その人は相づちを打ったり、「それはこういうことではないか」とご自身の意見を話されたりしているだけなのだ。話に感動したとか、そういう次元の問題ではないようだ。

僕は、その人を崇めまつっており、直接対面できたから感涙にむせんでいるのか。

そんなことは、ありえない。僕はその人のやっていることに反対してきたのだ。新興宗教のまねごとだと批判し、女房が月に一度、日曜ごとに「勉強会」と称し、家を留守にするのをやめさせるために、ここにいるのだ。

しかし、こちらはそんな話はすっかり忘れ、ただ訳もなく涙を流している。

その時、なにか本物に出会えた、そんな気がしたものだ。世間では、こんなことを「ミイラ取りがミイラになった」って言うのだろうか。

3

「エル」の話がどっかへ行っちゃったって？

回りくどくて悪いとは思うのだが、自分の中では道

筋ができていて、これを飛ばして話すことはできない。しばらく付き合ってほしい。

僕が勉強会に通うようになって１年近くたった頃だろうか、その頃は、月に何度もいろんな形で勉強会があった。その人を囲んで喫茶店で話を聞いたり、有志の家で一日の勉強会だったり、大阪のなにわ会館（現ホテルアウィーナ大阪）で、仕事が終わった夕刻から2、３時間の勉強会だったりと、いろんな場所で、いろんな形で集まった。

そんな中、その人から「本」を書いてみないかという話があった。あれだけ反対していた人間が、なぜ、この勉強を始めるようになったのか、一度書いてみたらどうかということだった。

余分な話は飛ばすとして、要は考えた末に引き受けさせてもらった。何ヶ月かして原稿ができた。せっかく原稿ができたのだから出版しようという話になり、原稿を何社かの出版社に送った。

その中の一社から返事が来た。初版は印税免除、本が出版された時、著者サイドで全国紙に広告を出してほしいという条件だった。厳しくはあるが悪い条件で

はなかったので、その人とも相談し、出版しようという話になった。

　ところが土壇場になって、その出版社が降りたいと言ってきた。出版社がこれから力を入れようとしている、ある精神世界がらみの本のシリーズと「光のなかへ」の内容が抵触するのだという。出版契約まで交わした後だったので理不尽だと思ったが、その人から「諍いを起こすことが本意ではないでしょう」と言われ、同時に契約書を破棄するということで決着することになった。

　これからまた出版社を探すのも大変だし、自費出版でやったらどうだという。その人の教え子に柳々堂書店の松原社長がいるが、僕の勤める会社の得意先でもあり、この松原さんに相談を持ちかけた。この本の冒頭に登場された方だ。

　松原さんは、即座に大阪創元社の社長を紹介してくれた。そして編集部の谷川さんに引き合わされ、ただ自費出版するのではなく、編集の仕事も教えていただくことになる。この時から本ができるまで、夕刻仕事を終えると、僕は、せっせと大阪創元社に通い、自分の本を材料にして編集のいろはを教えていただくこと

になった。

　ただ一つ困ったことがあった。

　当時、四六判並製の本を5000部刷ろうと思えば、300万円近い費用が必要だった。所帯持ちの安サラリーマンには、かなり厳しい話だ。この出版費用をどのように捻出するか、そのことが頭から離れなくなった。

今なら、それが仕事だから、安くできるノウハウも身についており、個人出版で本を出される人にもいろいろアドバイスできる立場にある。が、当時は出版のことなど何も分からなかった。

　その日も、出勤途上、千里中央の駅で、そんなことを漠然と考えていた。

「朝から、なにを暗い顔してんねん。」

　後ろから肩を叩かれる。同じ千里に住む目良さんだった。目良さんとは女房を通して「心の勉強会」で知り合ったのだが、僕が目良さんを最初に知ったのは、その特

徴のある低音の声からだった。

先ほども触れたが、目良さんのご実家で勉強会が開かれたことがある。

その時、僕は仕事の都合で参加できなかったが、その時の模様を女房がカセットテープに録音していた。

漫然とそのテープを聴いていると、いきなりドスの利いた声が響いてきた。周りを圧倒するような声が、その人田池氏に質問していた。何を質問していたのかは覚えていない。その存在感のある声だけが耳に残っている。

「誰、この人？」

「目良さんのご主人。」

これからだ、目良さんとの付き合いが始まったのは。

最初の頃、勉強会に参加する男性は少なかった。僕らの住む千里からは４人の男性が参加していた。僕と目良さんと、小南さんに大柿さん。いずれも女房同士の付き合いからはじまったが、四人とも、住まいも千里なら、働く場所も近接していた。

特に目良さんとは職場も歩いて２、３分の距離のところ、昼飯もよく４人で一緒に食べたりもした。

その目良さんと、出勤途上の千里中央の駅でバッタ

り出くわした。
「今にも飛び込みそうな感じやったで……。」
　冗談混じりに目良さんが言う。
　地下鉄に飛び込もうなどと考えていた訳ではないが、僕は気になっている出版のことを目良さんに話した。
　目良さんは、一通りの事情を聞くと、「何や、金のことか」と言いながら、いきなり出版費用の立て替えを申し出てくれた。思いもかけないことで、いきなり道が開けたような感じだった。
　その日の朝のことは、鮮明に覚えている。目良さんと待ち合わせ、２人で大阪創元社に出版契約に向かった。青い空に雲一点なく、風景は同じなのに、何か空気までが一新されたような爽やかさだった。そんなことを思っていると、
「気持ちのいい日やなあ。空気までいつもと違うなあ」
と、期せずして目良さんからも、そんな言葉がこぼれてきた。
　一生の中で、こんな幸せな朝は、そう何度も迎えられないだろう、そんな感じをもったものだ。

4

ＪＲ横浜線の町田駅で降り、橋上駅舎（きょうじょうえきしゃ）を南口の方面に出ると、横浜線の線路に向かい合って、かつて洗心洞画廊という建物があった。名前は忘れてしまったんだが、この洗心洞画廊の隣のビルに、エルの出版事務所が設置されたんだ。1989（平成元）年８月のことだ。

その同じ年の１月、63 年間続いた昭和という時代が幕を閉じた。

当時、僕は政府刊行物の大阪サービスステーションで官報公告係の仕事をしていたんだが、その日は、日曜の休みを返上して事務所で待機していた。

何を待機していたかって。元号が変わるんだよ「昭和」から「平成」に……。

元号を改める閣議決定がされたら官報の号外が出るんだが、それをいち早く掲示しなければならないんだ。聞くところによると「改元」を告げる官報の印刷は１時間 20 分で完了したという。その一枚だけの官報が、まずファックスで送られてくる。それを拡大し、目立つところに掲示するんだ。

掲示板に「官報号外」を貼りながら、「昭和が終わったんだなあ」って、しみじみ思った。

この前日、1989（昭和64）年1月7日午前6時33分、昭和天皇が、吹上御所で亡くなられた。本当は、天皇なんだから崩御されたって言うべきなんだろうけど、ニコニコ手を振っている姿が好きで、崩御なんていうと、何か遠い人のように感じてしまってイヤなんだ。

毎日新聞

特別号外

天皇陛下　崩御

激動の昭和終わる

87歳、十二指腸がんで

7日午前6時33分

天皇陛下は七日午前六時三十三分、皇居・吹上御所で崩御されたと、宮内庁が同日午前七時五十五分発表した。八十七歳八カ月のご生涯だった。不幸な戦争をはさみ、激動と平和の「昭和」は終わりを告げ、皇太子明仁（あきひと）親王殿下が皇位を継承、即位された。政府は「昭和」に代わる新元号を、急き協議するとともに葬儀の日程、様式などについて宮内庁など関係省庁と検討を始めた。

ご在位、最長の62年

お元気だったころの天皇陛下

新天皇ご即位

新天皇陛下

宮内庁発表文

何かの機会に昭和天皇の御製だという歌を見たことがある。

　　戦をとどめえざりし　くちをしさ
　　　　　　ななそぢになる　今もなほおもふ

それを見て以来、昭和天皇が好きになった。

僕の会社のある肥後橋の南側交差点は、阪神高速道路・肥後橋出口の延長線上にあって、昭和天皇や皇太子などが来阪される時は、必ずこの交差点を通るんだ。

その都度、警察官がたくさん出て、周辺の交差点から沿道に配置され物々しいことこの上ない。ビルの窓が開いていたりすると、たちまち飛んできて「早く閉めるように」と促される。

僕も野次馬根性が強いものだから、仕事ほったらかしで交差点で昭和天皇のお乗りになる車を待ったことがある。

やがて車の後部座席に座られた昭和天皇が通り過ぎていった。その時、窓を大きく開け、乗り出すようにして手を振っている昭和天皇と、一瞬、目が合った。心なしか口元がニッコリしたように感じられたのは気のせいだろうか。

物々しい警備とは、あまりにもちぐはぐなあたたかい笑顔だった。

昭和天皇の大喪の礼は、国の儀式として、その年の2月24日、新宿御苑で執り行われた。

昭和が終わり平成になるや、俄然、僕の周辺もあわ

ただしくなってきた。
その年の９月には「本」が完成してくるのだが、流通の目処が立っていない。地方小出版が流通を受け持ってくれることになったのだが、個人ではなく、やはり出版社としてやったほうがいいという。
僕は会社を辞める決心をし、その報告をするべくアメリカへ電話を入れた。
なぜアメリカなのかって？
その時、アメリカで初のセミナーが開かれていたんだ。ロスに住む日系の弁護士の方の要望で開かれたのだが、このため、その人はアメリカへ渡っていた。
報告のため電話した時、一緒に渡米した久保さんご夫妻もその場におられた。
やがてアメリカから電話が返ってきた。
久保徹夫さんは神奈川で製造業を営んでおられるが、奥さんの明子さんもまた、東京の町田で「洗心洞」という画廊を経営されていた。
この洗心洞画廊を出版の事務所代わりに使い、僕は、「画廊で働いていることにしたらどう」という申し入れだった。
願ってもないことだった。いきなり出版社を作って

も、数字に弱く経営センスもない僕としては、運転資金の問題やら何やら、一人でやっていけるのか不安が付きまとう。

　それを久保さんが、洗心洞画廊を母胎に出版事業を運営してくれるという。

　厚かましいと思いつつも、願ってもないことであり、家族揃って神奈川へ引っ越すことになった。平成元年八月のことだった。

「本」が出版されるや、読者の方が一緒に働きたいと集まってきたり、スタッフも揃い出し、その年の十二月には、出版事業を発展させ、株式会社エルという会社が発足することになった。

　やがて、今まで有志が交代で行っていた勉強会のお世話も、エルがやるようになっていった。

5

　エルの思い出話もそこそこに、僕は久しぶりに会った久保夫妻にマイクを向けた。（久保さんについては、ご夫婦でセミナーをお世話いただいている方でもあり、これからお世話になる方のためにも、あえて実名にし

ている。）

セミナーとの出会い、つまりはその人との出会いは、久保徹夫さんが四41の時だという。奥さんの明子さんの妹に笹木加寿子さん（当時、宝塚在住）がいる。

彼女は大阪を中心に展開するある新興宗教団体に所属していた。その加寿子さんが、この団体を辞めさせられるという事件が起こった。加寿子さんの勧めで家族ぐるみで入会していた久保夫妻だったが、正義感の強い明子さんは、会に対し、「なぜ辞めさせられたのか理由を教えてほしい」という質問状を提出した。

明子さんは会から呼び出され、何の理由もないまま、会員証というか、バッジの返却を要求され脱会させられたという。

明子さん自身も、その会ではお世話係をしており、会の裏も見えるようになっており疑問を持っていた矢先だ。たとえば、会費は「3千円のみ」と言いながら、役につくと、その人によって「この人は一本だなあ」というように多額の金額が要求されるという（ちなみに一本というのは100万円のこと）。

怒った明子さん、「こんな会は偽物」とばかり、自分ばかりか、親戚や家族のバッジをすべて集め、突き返

したという。
　当の笹木加寿子さんだが、腰痛の治療のため、下田良典さん（当時、大阪の心斎橋で開院）という整体師のところに通っていた。その下田さんから「心を見るセミナー」のことを教えてもらい、早速参加してみた。「これこそ本物、今度こそ本物だ」と、その感動を姉の明子さんに伝えたという。
　すぐ何でものめり込んでいく加寿子さんに危惧を覚え、もし変な団体なら「ブレーキをかけなきゃ」と明子さん夫婦は、偵察のつもりで、東京の全社連会館で開かれたセミナーに参加してみた。
　この時、徹夫さんが試しに自分の意識をチャネリングで出してもらったが、「この集まりは偽物だーっ」というような内容だったらしい。他の人にも言えることだが、チャネリングの内容が「当たっている」とか「当たっていない」ということではなく、なぜか参加した後、不思議に気持ちが変わっていることが多い。内容に関係なく涙が止まらなくなったり、「間違ってきた」という思いが噴き出してきたり、名状しがたい思いにとらわれたという体験をよく聞かされる。
　明子さんの夫、徹夫さんも、会の正体を暴きにきた

つもりが「本物に出会えた」と手放しで喜んでいる状態だ。明子さんはその人田池氏に質問した。

「自分がかって所属していた会でも『ここは宗教ではない』『他力の学びではない』と言っていました。言っていることは同じですが、どう違うんですか」ということを質問したという。

その人は、熱心に説明してくれたが、具体的にはよく分からなかったという。

ただ、「とりあえず10回、来てみなさい」という言葉に引かれるように、心を見る学びに参加するようになったという。

ところで久保徹夫さんは、幼い時に両親の元から、杉並の祖父母の家に預けられ、お婆さんに育てられたという。というのは、昭和28年、お父さんが会社をつぶし、住まいの一部も事務所に取られてしまい、6畳間に家族6人が暮らすようになった。六畳間といっても家具もあることだし、とても六人が暮らせる状態ではない。

そこで、まずお姉さんが祖父母の家に引き取られ、ついで小学一年の時、徹夫さんが引き取られ、下の妹

二人だけが両親とともに川崎の実家で暮らすこととなった。

　こうして徹夫さんは小学一年から中学３年までの、ほぼ９年間をお婆さんに面倒を見てもらうことになり、１年に２回だけ実家へ帰ることができたという。

　ところで祖父母の家だが、お爺さん、お婆さんの夫婦仲があまり良くない。

　お爺さんは高松出身でお坊さんになったのはいいが、大変な食道楽で、こっそりとすき焼きを食しているところを見つかり破門となった。

　寺を追い出されたお爺さん、縁故を頼ってボルトを作る会社に就職したという。ここでお婆さんと知り合い結婚した。

　これ以降、お爺さんは会社を継承し、戦後、徹夫さんのお父さんへ実権を渡したのだが、昭和27年に会社をつぶし、ブラブラと遊んで暮らすようになり、やがて寝込むようになった。お婆さんは下宿屋をしたりしてお爺さんの介護をしながら生計を立てていた。徹夫さんは、そんなお婆さんを助け、お爺さんの介護を手伝いながら学校へ通ったという。お婆さんにはたいそう可愛がられたようだが、いかんせん、徹夫さんの

お母さんと、このお婆さん、異常なほど仲が悪かったという。
　徹夫さんにしてみれば、そんな仲の悪い祖母に、なぜ自分を預けたのか、それが心のしこりとなって、いつまでも後を引いたという。
　高校1年になり、家族が揃って暮らせるようになってからも、自分は両親に可愛がられていない、そんな思いがつきまとった。
　このため、兄姉の中でも、母親に「認められたい」「可愛がってほしい」と、勉強に誰よりも精を出し、小・中と劣等生だった徹夫さんが、高校では優等生となった。
　当時、徹夫さんの通っていた高校では、実験的にある種の英才教育が行われていた。学年全体で11クラスがあるが、1年ごとに理数系だけのクラス編成が行われる。
　徹夫さんは、学業も、クラブの柔道も必死に頑張り、ある点を除いて皆から一目置かれるようになっていた。ある点というのは、対人恐怖症というか、赤面症というか、人と話そうとするとどもってしまい、このため物言わずで、しかも感情を表すことがない。表すことがないというより、感情がないといったほうがピッタ

りくるかもしれない。高校３年、大学４年間を通じ、彼が笑ったところを見た者がいなかった。

高校２年になった時、当然のように理数系だけが集められるＫクラスへ入れられることとなった。その時、今の奥さんである明子さんと知り合ったのだという。このクラス、女性はたった３人だけだった。

徹夫さんは、明子さんのことを「やさしい人だなあ」と思ったという。

こんなにして頑張ってきた徹夫さんだが、それでも可愛がられていない自分を感じずにはいられなかった。後のこととなるが、幼い頃の自分の写真が一枚もないことを、徹夫さんはお父さんに訊いてみたことがある。

お父さんは、「空襲でみんな焼けちまったな」と言う。徹夫さんは「俺は戦後生まれだ」と憮然として言うと、「そうか……。そりゃそうだなぁ、撮った覚えがないんだから、ある訳はないな」と、平然と返されたという。

徹夫さんは、自分の中にあるさびしさや虚しさから逃げようと、今以上に学業に精を出し、さらに柔道にも打ち込むようになり、柔道ではついに東京で軽量級のクラスで優勝しインターハイ（全国高等学校総合体育大会）に出場するまでになった。

しかし先生や友人が、そのお祝い会を開いてくれても、挨拶をする訳でも、お礼をいう訳でもない。赤面症であり、どもり症の徹夫さんとしては、うれしそうな顔をする訳でもなく、ただ黙っているしかなかった。

事実、「うれしい」という感情が起こってこないのだという。

これは柔道部の副将になっても変わらず、ただ闘うだけの副将であり、皆からは奇人変人として見られ、その強さから「あいつには近づくな」と言われるようになっていく。

明子さんとの付き合いは、高校３年間、そして徹夫さんが大学へ行き、明子さんが就職してからも続き、やがて大学卒業後、２人は結婚した。その間、いつも明子さんがしゃべり、徹夫さんは、それを聞いているだけという状態だった。

明子さんは、徹夫さんとは反対に、ごく普通の家庭に育ったようだ。お父さんは農林省の役人で、このため転勤が多く、小学校は北海道、中学は岩手、高校は東京という具合に転々としたが、家庭や学校での明るい話題に事欠かず、その楽しくて明るい話を、いつも徹夫さんは黙って聞いていたというのだ。

「この人があんなに勉強ができなきゃ付き合っていなかったわよ」と明子さんは言うが、本心かどうかは定かでない。

大学を卒業すると、話さなくても済む「設計」の仕事に就いた。しかし、図面引きの仕事は単調でよく居眠りすることがあったという。明子さんは、こともなげに「向いてないわよ、辞めたら……」と言い、徹夫さんも、その言葉通りに、あっさり辞めてしまった。

大阪で万国博覧会が開かれ、世間が高度経済成長に浮かれている頃であった。

これ以後、将来独立することを前提に、お父さんが勤めていた三菱重工の下請け会社の管理者となったが、独立の機会は意外と早くにやってきた。

27 才の時、関係会社の社長が死に、独立してその仕事を引き継ごうとした。しかし、自営で苦い思い出のある両親は、会社を興すことに猛反対し、徹夫さんは「これ以上反対するなら親子の縁を切る」と自分の意志を貫いた。

やがてお父さんを招き社長の座に据え、34 才の時、徹夫さんが社長職を引き継ぐことになる。この間、赤面症やどもり症を克服するべく、青年会議所等でしゃ

べる練習、人と対等に付き合う練習を自分に課した。
徹夫さん41才の時、「商売繁盛」の目的で、奥さんの妹、笹木加寿子さんに勧められるまま、明子さん共々ある新興宗教団体にに入会したが、前述したような理由で脱会するに至った。

久保徹夫さんの今の気持ち

闇出し現象等を通じ自分の心を見つめるようになって、表面おとなしい、どちらかというと感情のないと思っていた自分の中が見え出し、その激しさに愕然(がくぜん)とし、「つらい生き方をしてきたな」と思うようになった。
また両親に対しても冷たい思いしか出なかったのが、このセミナーに集うようになって、はじめて親子のぬくもりを感じられるようになった。子供の頃から引きずっていたさびしさや親への恨みが、今は、何かあたたかいぬくもりに包まれているように感じる。

久保明子さんの今の気持ち

昔から「人を助けたい」という強い思いがあった。この学びが続けられたのも、この「人を助けたい」と

いう思いがあったからだと思う。たとえば目の悪い人は、先祖の「業」とか、本人がこんなことをしたからとか、あんなことをしたからだとか、またその逆にしないからだとか……。そんな目で見られている人たちに、「本当はこうだよ」と知識の上だけでも伝えてあげたかった。「そんなことで苦しむことはないよ」と伝えてあげたかった。

そんな思いで、出版物を出し、セミナーのお世話をしてきたと思う。

そんな「人を助けたい思い」や「正義感」が間違いだと分かった時はショックだった。でも、この思いに気付くための人生だったと、今は感じている。

エルという会社は、1989（平成元）年12月の設立以来、久保夫妻のお世話で数々の出版物を発行し、200回以上のセミナーを運営し、2002（平成14）年7月、下呂でのセミナーを最後に、その役割を終えて解散した。

その後、親会社である徹夫さんの会社も、エルで勤めていた人たちを中心に再スタートすることになった。

徹夫さんは、今の会社の状況を「素人集団で再スター

トした会社だが、不思議に業績は伸び続けている。僕の経営方針は『意識の流れ』、あの本の中にすべて詰まっています」と話を締めくくられた。

第四章　ベスト・パートナー

1

君はまだ独身なのか、それとも、奥さんかご亭主がいるのだろうか。

僕は既に結婚して、子供が4人、孫が4人いる。病弱だが威勢のよい母親もまだ健在だし、それに少し太り気味のうさぎと、「何て落ち着きのない」と近所で評判の犬が1匹……これが僕の家族のすべてだ。

今まで紹介してきた人たちも、ほとんどがご夫婦で紹介してきたが、でも、結婚するってどういうことなんだろう。そんなこと、考えたことはないかい。

夫婦って他人じゃないか。それが引かれあって結婚し、家族となる。最初のうちは好きで結婚したから、仲むつまじいと言えるかもしれないけど、育った環境も違うし、性格も違う訳だから、そのうち、お互いのイヤなところが鼻につき、いつか衝突することだってあるよなあ。

もちろん、親が決めたとか、見合いとか、そんな結

婚だってあるし、最初から夫婦で戦争ばっかりっていう家庭だってあると思う。

でも夫婦になるっていうことは、ただ好きになったとか、子孫を増やすためだとか、それだけじゃないような気がするんだ。

「赤い糸で結ばれてる」とか世間で言うけど、やっぱり、なにか目的とか、約束みたいなものがあるように思えて仕方がないんだ。仕組まれているというか、天の配剤とでも言うのだろうか、お互いがお互いを通し、人生の目的に気付いていくような、そんなプログラムが用意されているように思えて仕方がない。

これから紹介するカップルも、夫婦で悪戦苦闘しながら、そんなことを心で感じられるようになった人たちだ。

彼らの悪戦苦闘ぶりは誰でもが体験することかもしれない。ただ違うのは、その体験を通し、彼らは「意識の世界」の一端を覗いたと言える。そこから夫婦である意味とか、人生の目的を感じていったことが大事だと思うんだ。

2

ＪＲ高田馬場駅を歩いて５分、だからといって都心型マンションによくあるような高層マンショではなかった。目指すマンションは、民家の中に埋もれるようにして建っていた。東京都心にあるとは思われない静かなたたずまいだ。

この３階に磯川さん夫妻は、２匹の犬とともに暮らしていた。

奥さんの夏子さんがセミナーを知ったのは、大阪のお母さんからの情報だという。

その頃、夏子さんは荒れていた。自分が何を荒れ狂っているかもよく分からなかった。ただ苦しい、生きていること自体が苦しかったという。

結婚したら幸せになれると思った。子供が生まれたら生きがいが見つかると思った。

しかし、結婚しても人生が満たされることはなかった。

子供にも恵まれることはなかった。

当時、住んでいたマンションの七階から飛び降りて死のうと思ったことさえあった。

子供さえ生まれたら、子供さえ産むことができたら、そんな思いが募っていく。どうしたら子供ができるのか。友人の勧めで、能力開発や、新興宗教の集まりにも顔を出してみた。

そんな矢先、大阪に住むお母さんから、その人の主宰する「心の勉強会」のことを知った。その頃、相模原市橋本には、有志の運営する「心の相談室」もできていた。

相談室を訪れた夏子さんは、「自分の心を見ていく」、それ以外に自分の苦しみを癒していく方法がないということを伝えられた。

「このままではあかん、このままでは自分はダメになる。」

そう思い定めた夏子さん、勧められるままに、熱海で開かれたセミナーに参加したという。

以来、熱心にセミナーに参加するが、自分の心を見るというのは分かっているつもりでも、今思えば、やはり何かにすがる、何かに頼る——いわゆる他力の思いで参加していたようだとも述懐される。

それは、「ご主人の反対を押し切り、相手をだまして参加してはダメですよ」という、その人の言葉にも現

れていた。
　夏子さんは「そう言われる本当の意味が分からなかった」と言う。
　ご主人の和雄さんは、この学びに対し半信半疑、どちらかというと反対の立場をとっていた。
　ある時、奥さんからセミナーに誘われ、「温泉ならいいが、セミナーには参加しないよ」という条件付きで同行した。そうは言っても、やはりセミナー会場には顔を出していた。ところが、チャネリングの時間になると、
「この人たちは狂っている」とばかり、一人でさっさと帰ってしまったという。
　それからというもの、夏子さんが参加するのは止めないが、自分は参加したくないという姿勢をとってきた。
　そんな状態が一年ほど続いた。
　ある時、どんな訳か、夏子さんに勧められるまま、愛知で開かれた一日だけのセミナーに参加してみた。
　……だが、その時も途中で帰るという結果になってしまった。
　チャネリングがイヤでイヤでしようがなかったと言うのだ。

チャネリングは、本来、心を見ていくための助けでしかなかった。それがいつの頃からか、チャネリングは、過去世を知るための道具のようになってしまった。

過去世を知るということがダメだというのではない。過去世を知ることで、自分の隠された闇の心を知り、それを供養していくことができれば、過去世を知ることの意味はあるのだが、「自分の過去世は誰々という偉い人だった。あんたの過去世は誰……」などというように、立派な人が自分の過去世であれば誇り、とんでもない悪党が自分の過去世であれば落ち込む、いわゆる過去世ごっこが盛んになったことがある。

本来、自由になるための勉強が、過去世に自分が縛られる（というより自分が縛っているのだが）、そんな窮屈なことになってきた。

もちろん、セミナーの方向は、そちらを向いていないのだが、参加する人間がその方向に心をとらわれていく。そんな時期があった。

その面にとらわれると、チャネリングに現れる心の状態こそ見なければならないのに、チャネリングが正しいとか間違っているとか、歴史的事実と符合しないとか、そんな思ってもみない方向に走っていく。

夏子さんのご主人和雄さんも、この面をとらえたのだろう。奥さんとの間で過去世を巡る議論が絶えなかったそうだ。

そんな矢先——。

夏子さんが子宮けい癌と診断されたのだ。今から12年も昔の話で、その頃は「癌告知」自体、しないほうが当たり前の時代だった。それが、夏子さんや和雄さんには、医師からハッキリと病名が伝えられ、ただちに入院することが勧められた。

話を聞かされた和雄さんは「心の勉強」のストレスから、妻がこんなことになったと思った。

医師からは、緊急手術の必要性が伝えられ、和雄さんは同級生の縁故で、夏子さんを癌研（財団法人癌研究会といい、日本で最初にできた癌専門機関）に入院させることにした。

癌研の婦人科副部長は「転移が進んでいるようだから、今週中に手術の必要がある」という。普通は入院して1ヶ月ほどは心のケア等を行い、その後、手術ということになるのだが、このことから見ても、癌はかなり進んでいたものと思われる。

医師は、2・6～3の段階だと言う。4のレベルでは余命は半年、5のレベルでは死んでいるということになる。

こんな状態だというのに、夏子さんは手術することにとまどいを見せた。手術の執刀医は、いわゆるゴッドハンドと呼ばれるような名医。親友の紹介ということで、特にスケジュールをあけてくれているという。夏子さんが手術をためらったのは、メスで邪魔なものは切り取ってしまうという考え方だった。自分の心を見ていくことで自然治癒力が働き治っていくのでは……そんな思いもあった。

「確かに自然治癒力というのはあります。しかし進行の度合いが激しく、今はそんなことを言っていられる段階ではないんです」と、医師は言う。

また、いつまでも待っていられないとも言う。

ご主人は思いあまって、大阪からご両親を呼び説得に当たってもらった。

それでも迷いは取れず、夏子さんは、その人田池氏に電話で相談し、やっと手術を承諾したという。

これがご主人には納得できない。どれほど家族が心配し、親身になって説得したか。

いかに熱心にセミナーに通っているからといって、自分の命に関わることをセミナーの指導者に相談して決めるということ自体が考えられない。

このことが、ご主人のセミナー嫌いに拍車をかけたとも言える。

結果、手術は成功したが、リンパ節が二箇所もやられており、抗癌治療が必要ということになった。

医師が抗癌治療がいかに安全かということを見せようと、夏子さんに実際に抗癌治療を受けている女性患者を紹介した。

「ほら大丈夫でしょう。この患者さんも、こんなに元気だ」と、医師は言う。

だが夏子さんはその女性を見て、「ひからびてるみたいやった。こんなになるんならイヤや」と、さすがにこれだけは受けたくないと拒否した。

手術後、普通よりかなり長く入院したものの、緊急性がなくなったということで家へ帰ることも許されるようになり、その後１ヶ月に一度の検診も続けてきたが、再発の恐れもなく３年ほど過ぎた頃には、自然と検診にも行かなくなっていった。

ところで退院後はゆっくり養生してと思っていたが、

予想外のことが待っていた。
飼い犬のチャメの散歩だ。それも生半可な散歩ではなく、2 時間でも 3 時間でも公園廻りをさせられるのだ。
でも、これが良かった。自然の中で犬と歩いていると、フーッと心が広がる時がある。そんな時、自然に対して噴き出すような懺悔の思いが飛び出してくるという。
それが何に対しての懺悔なのか分からない、ただ「悪かった、ごめんなさい」の思いが止まらなくなる。
やがて、自分の心が見えてきた。癌になった自分を責めている自分があった。癌になった自分が許せない、素晴らしい自分が癌になったことが許せなかった。
チャメと公園を散歩していると、そんな自分が見えてきて、それに気付いた時、今度はそんな自分を受け入れ許すことができるようになった。
それが何よりうれしかったという。
そして思った。自分は、これだけのものを乗り越えることができた。
自分は素晴らしいと……。
するとご主人の反発が返ってくる。「セミナーには行くな！」「セミナーのビデオも見るな！」と、ビデオデッキを叩き壊すような荒れ方をする。

何より「セミナーに行くな」と言われたことがショックだった。そのうえ、その人にまで「ご主人が反対すればセミナーに来てはダメですよ」と言われた。

それでもしばらくすると、日帰りでの参加はＯＫとなり、一泊でも大丈夫となり、ご主人もセミナーに顔を覗かせたりもするようになってくる。

ところが、「これで私は大丈夫、自分は真っ直ぐ正しい道を歩いている」、そんな思い上がりが出てくると、またぞろご主人が反応して、それが自分の心を見せてくれる。

最初、その人が「ご主人が反対すればセミナーに来てはダメ」と言われるその本当の意味が分からなかったが、実はご主人の反応は自分の心を見る鏡だったのだ。

ご主人はその役割を演じてくれていた。

取材を終えから、夏子さんからメールが届いた。

今日はありがとうございました。

少し思いを付け加えさせてもらってもいいでしょうか。

実は、こちらの話のほうが、本当はしたいという思

いがあったのですが、すみません、言い出す前に「さようなら」になってしまったので……。

私としては、自分が病気になったことが、それほど大きなポイントだという感覚ではないんです。それよりも今私が一番感じていることは、色々なことを経て、やっと自分が本来見なければいけない自分の心癖、今世の私の課題が見えてきた、「これを見せてくれる一番良い相手」と、そのように夫のことを思えるようになってきたことなんです。これが今の私の一番のポイントなんです。だから何の変哲もない今の生活が本当にうれしいし、「ありがとう」って弾んでる気がするんです。

「何で生きているの、苦しい、幸せにしろ」と、夫に半狂乱で襲い掛かってきた自分からは想像できないような心の変化です。「殺してやる、死ね！」しか出てこなかった自分の心から、「ありがとう」って出てくることが何よりもうれしいのです。夫婦になった本当の意味を知れて、本当によかったと、今は思っています。

本当は、その辺のことも、夫にも話を聞いてみたいと思っていました。

今までこういう話は一度もしたことがないんです。
「ゆっくりとこういう話をするのもいいなあ」って今日は思いました。
ありがとうございました。

3

その日、朝食の後、岳川完爾さんと静子さんは、ゆったりと「心の学び」について話し合っていた。老夫婦２人きりの住まいで誰に気を遣うこともない。

話の中で、ご主人の完爾さんが、はずみで「おまえは、何にも分かっていない！」と、上から押さえつけるような話しぶりになってしまった。

奥さんの静子さんが、その言葉尻をとらえた。言い返された言葉に逆上した完爾さん、いきなり奥さんの胸ぐらをつかまえ殴りつけた。

空手で鍛えた拳で思いっきり殴られたのだからたまらない。

一瞬、息ができなくなったという。

仁王立ちになったご主人を見て、静子さんは「殺さ

れる」と思った。
ちょうど食後のデザートに柿を剥いていたところだった。
静子さんは手にした包丁を完爾さんに向け、「あんたも、これで殺ったろか」と開き直った。その時、静子さんは自分の中から「素直に自分の思いを出しなさい」、そんな思いを感じ、思いの丈をご主人にぶつけた。

あなたは自分の思いが通らなければ、いつも瞬間湯沸かし器のようにすぐカッとなって、暴力でもって相手の口を封じようとする。人に厳しく、自分に甘いその身勝手さに気付いてほしい。

長い間、狭い家の中で2部屋も占領して、10年以上使用したこともない不要品すら捨てることを嫌い、だからと言って整理することもなく、六帖と四帖半の部屋はいつもヒッチャカメッチャカ、ルーズそのもの、山のように積み上げて必要な物を捜すのに時間を取られ、「本」に対する執着も相当なもので、何年待てばスッキリと自分の部屋を一つに整理できるのですか。

意識の世界を信じるならば、消えてなくなる物に執着する心を見てほしい。2人で共同生活しているのだ

から、少しは快適に風通しよく暮らせるように協力してほしい。私の我慢も限界です。孫が来た時に、もっとゆったりとした部屋で、心で受け入れたいのです、お正月までにお願いします！

静子さんは、押さえ込んできた自分を、この時、少しだけ解き放つことができた。そう思った。

それにしても、ご夫婦ともに激しい気性の持ち主だった。

完爾さんは、外へ向かう爆発的な激しさ、奥さんの静子さんは、内に秘めた静かな激しさ、そんな感じだ。

そもそも、お二人の結婚は、静子さんのお父さんの勧めによるものだったという。

1951（昭和 26）年のことだ。

その頃、完爾さんは警察予備隊の第 200 会計隊本部におられた。

警察予備隊というのは、1950（昭和 25）年 8 月、アメリカの占領政策に基づき設置された、警察力の不足を補うための武装部隊であり、現在の陸上自衛隊の前身にあたる組織である。

この警察予備隊に、静子さんのお父さんが仕事で出

入りしていたという。物資調達の関係だと思うのだが、そんな関係から会計隊に所属していた完爾さんも、お父さんのもとをしばしば訪ねるようになった。

　そこで静子さんのことを見そめたという。静子さんには、その頃付き合っていた男性もおり、何とか断れないかと思うのだが、一方に、

「あいつは気骨のある男だから、少々短気だという欠点はあるが、何か見込みがあるように思う」、そんなお父さんの強い勧めがある。

　家柄や世間体を重んじる家庭に育った静子さんには、お父さんの勧めに逆らうことなど思いも寄らなかった。

　こうして静子さんは、「最後には父の言葉を信じ、自分の意志で」結婚に踏み切ったという。

「しかし、夫は想像を絶する短気者、そのうえ気ままで、まったくどのように接したら、穏やかな平和な生活ができるのかと悩みました。女とは養ってやるのだから男に素直に従って当然とし、すべてのことが自分中心で気に入らなければ平気で拳を振り上げてくるような夫でした」と、静子さんはいう。

　そんな話を聞くと、完爾さんの意外な一面を見たような気がする。

完爾さんとはセミナーで、何度か部屋が一緒になったことがある。

1日のセミナーを終えると、各自が泊まる部屋へと引き上げる。一部屋にだいたい4、5人が泊まるのだが、夕食までの時間、あるいは夕食後、就寝までの時間と、お茶を飲みながらいろいろな話題に花が咲く。

その多くはセミナーでの体験だが、時に、人生の大先輩から数奇な人生経験を聞くことだってある。

完爾さんはよく満州の話をされる。中でも「ダイヤモンド号」というトラックでの新邱（しんきゅう）脱出のエピソードは圧巻だ。僕は長い間、この脱出劇が、終戦時のことだと思っていた。ところが今回取材をさせていただいて分かったことなのだが、それは終戦時のことではなく、満州事変の時のことであった。

完爾さんは1926年、つまり大正15年生まれだから、満州事変の起こった昭和6年は数え年でいうと6歳ということになる。

この年9月18日、柳條溝にある南満州鉄道線路上で爆発が起き、線路が破壊される事件が起こった。これを契機として日本軍・中国軍が武力衝突し、日本軍は直ちに中国側兵営・北大営を占拠、翌日までに奉天（現

在の中国遼寧省瀋陽)、長春、営口の各都市をも占領するに至った。世に言う柳條溝事件である。

完爾さんのお父さんは、当時、大新公司の社員として満州奥地にある新邱炭坑開発のため入山していたが、9月21日、本社から以下のような電報を受信した。

「日支軍ノ衝突重大化ス　重要書類ヲ始末シ　身柄ハ善処セヨ」

新邱炭坑に入山していた日本人は、男女合わせ23名（社員11名、夫人6名、子供6名)、6歳になる完爾さんと父親、それに2人の弟さんもこの中にいた。ただ、お母さんは、現地で前年病没し、叔母さんが子供たちの面倒を見ていたという。

身柄を善処とはどういうことか、結論を得ないまま、奉天に向け脱出することが決められたが、護衛の警官も日本軍もいない。どこそこで日本軍が破れたとか、馬賊団が出没するとか、未確認情報ばかりが行き交い不安は募るばかりだった。

馬賊上がりの馬車屋と交渉が成立し、トラック「ダイヤモンド号」と六台の馬車に分乗し、やっと新邱を出発したのは連絡が入ってから5日後の26日昼過ぎであったという。

子供や女性は中国服に身を包んだうえに、風呂敷や手ぬぐいで頭を巻き蒙古人のように変装し、男連中は中国人の長衣をまとった。

途中、馬賊の襲撃に遭い激しい銃撃戦が展開したが、昼夜兼行で走り続け、28 日午後３時、九死に一生を得、新民府領事館に到着したという。

完爾さんは、人生の多感な時期を戦時下の満州で過ごし、5 年間を奉天一中で学び、京城（ソウル）師範学校在学中、現地召集され、鹿児島市郊外にあった西部第 18 部隊に入隊、その後、本土決戦要員として、独立混成第 206 師団司令部に転属となり、日本の土を踏むこととなった。この時、長崎に原爆が投下された。

完爾さんの配属された部隊は、天草下島・本渡町の小学校をにわか兵舎としていたが、その日８月９日は、四季咲岬で航空監視哨の任務に就いていたという。

午前 11 時過ぎだった。猛烈な閃光が走り、凄まじい炸裂音とととともに辺り一面の空気が振動した。やがて真っ青な空に､巨大なキノコ雲が湧き上がっていった。

完爾さんは、ただ呆然と大空を見ていたという。

完爾さんとセミナーで部屋が一緒になると、こんな

話で盛り上がるのだが、話している時は、風貌こそ厳ついものの、おだやかな語り口で、とても奥さんを殴りつけるような、そんな激しい人だとは思えなかった。

奥さんも穏やかそうで、お２人を見ている限り、そんな激しい争いを内に抱えているようにはとても見えない。

そんなお２人に、セミナーとの出会いを聞かせてもらった。

その一番の原因は息子さんだという。

息子さんだが、生まれた時から体が弱かった。このため空手を学ばせたが、それが世界選手権に出るまでになったという。強いばかりではなく義侠心にあつく正義感の強い人でもあった。

ある日、喫茶店でやくざに絡まれた人を助けたが、その報復でズタズタにされて帰ってきた。自分は空手をやっているので、自制し、やられるままになったのだという。

取り調べにあたった警察の人から「人情味も根性もあるので、大学を卒業したら警察へ来ないか」と勧誘を受けたほどだ。また同じ理由で、そのやくざからも勧誘されたという。

そんな長男が、交通事故で留置された。それも二回。いずれも死亡事故で、一度は相手が自殺するために飛び込んできたのだという。

とにかく息子さんのことでは問題は尽きなかった。

当時、岳川さんは大阪の府立高校で事務長をされていたが、ある宗教団体の会員でもあった。その団体は、「神の光の顕現」および「自己の変革」を中心課題に据えた独自の教えを説いており、岳川さんの入信の動機は、やはり、この息子さんのことであったという。

その人田池氏も一時は、このセミナーに参加したことがあったが、偶然、岳川さんと同室になったという。

しかしこれ以降、その人は、何かが違うと思い、この会からは離れていった。そして自ら気付いていったことを、教職を離れ、「人間は意識ですよ」「自分の心を見ていかない限り何も変わりませんよ」と、周りの人たちに伝え始めた。

岳川さんがその人と再開したのは、そんな時だ。

早速、岳川さんは、その人の主催する勉強会に参加した。岳川さんは、その頃、別団体のリーダー的存在であり、その団体の主立った人たちを率いての参加だった。

チャネリングを通し、その人は、「息子さんが荒れる

のは、夫婦の不調和に気付くことを促しているんですよ」と、完爾さんに伝えた。

こうして、岳川さん夫妻の心の勉強が始まった。しかし一朝一夕に夫婦間の不調和は直るはずがなく、息子さんの問題もまた、治まることがなかった。

息子さんは卒業後、空手道場やらブティック店やら食堂経営、父の定年後を考えて、あげくは古本屋までやるという敏腕ぶり。

ところが、それが破綻（はたん）し10億円もの借金を抱えることになってしまった。

その10億の借金というのがヤクザ絡みだというから堪らない。

岳川さんの自宅へは、毎日のように借金取りが後を絶たない。そんな時に限って、頼りとなる完爾さんはいない。静子さんは、そんなヤクザを相手に「ないものはない」と開き直る。その剣幕の凄さに、さすがのヤクザもしっぽを巻いて帰っていく。

そんな気丈そうな静子さんだが、内心は自殺まで考えていたという。

アメリカでセミナーがあった時も、ハドソン川を見ては、「飛び込んで死にたい」、「ホテルの屋上から飛び

降りたい」と、そんな思いばかりが込み上げてきた。
　その後、息子さん共々、不動産として所有していた「山」や「本屋」を売ったりと必死で借金の精算に奔走し、何とか一億円が残るだけとなった。
　岳川さん夫妻も、息子が新築してくれた自宅を処分し、この時、今の府営住宅に移ったという。
　こうして時の流れ、心の学びと共に落ち着いた日々が帰ってきたが、そんな矢先、今度はご主人が癌で入院することになった。
「これが良かったんです。私は主人から離れて自分を見る時間が与えられました。これまでは、『主人さえ変われば』そればかりを思っていました。主人だけを見て、自分を見ることがありませんでした。」そう静子さんは言う。
　完爾さんは完爾さんで、病院で「死と向かい合う」心づもりで、自分の一生を思い出し反省された。そして、奥さんに対する思いも変わっていった。
　完爾さんは奥さんに対する思いを次のように綴った。

　かしずけ、従え、夫の存在を認めよ。そんな要求ばかりが出てきた。

妻たるもの男に従うことは当然とする思いが、根強く残っていた。女は男の従属的な存在とする、日本の家長制度という、因習と共に生き続けている自分の心があった。

いかにセミナーに通おうとも、日々の反省がおざなりであった。まったくの野放しで、自分の使った心を供養するとか、心の修正をはかるとか、反省懺悔につなげるとか、こと妻に関わるものはすべて論外、問題外、歯牙（しが）にもかけようとはしてこなかった。

男子を上位とする、「女子たるものかくあるべし」、「男子たるものはかくなるものぞ」と、家訓の用語のようなものまでが噴き出してくるありさまである。

自己供養もへったくれもない。自分の心に、自分の心が驚いている。あまりにも凄まじいエネルギーである。

「偽我に死ね」という思いが通り過ぎた時、ふと、「お前、もうすぐ死ぬんやで、何を張り切ってるんや」と語りかけてくる自分があった。

いかに大声を張り上げて反省ノートを読み上げてみても、「こん畜生」と叫んでみても、返されてくるのは、肉への未練と生への執着であった。そして、読み上げ

ていくほどに出てくる思いは、さびしい、さびしい思いと、空威張りのむなしい、むなしい、鬱ろな心ばかりだった。

また完爾さんが、その人に宛てた手紙がある。

（略）私は病院処方の利尿剤パルナールD錠0.2ミリグラムを飲んでいますので、当然のことではありますが、頻尿が改善され、12月27日の病院の尿の検査では、何度も顕微鏡を覗き込んだ医師から、尿血が少なくなっていると言われました。

それにしても、私は今まで通りに自転車に乗り、買い物にも行き、すこぶる元気に過ごしております。世の中には、頭で考えても分からないことがたくさんあると教えてもらいましたが、体調の快復の変化に驚き、息子にも感謝しております。（中略）

何れにしましても、今まで安閑としてきた「死」についても真剣に考えざるを得なくなり、誰にでも訪れる死ではありますが、覚悟や如何と、自らに問いかけております。

田池先生が、講話の中で、人間は皆、病気か、事故か、

天変地異などによって死にます。死の五分前でも良いから心を見てくださいと言われたことを思い出し、この現実を目の前にして、今、真摯（しんし）に心を見ております。

僕が、岳川さんのお宅を訪問した時、お２人とも明るく元気で、争いや病気の陰など、どこにも感じることができなかった。

取材を終えて帰り際、奥さんの静子さんがポツリと言われた。

「これほど激しい夫婦が変わったら、希望を持つ方も出てくるわね。」

4

夫婦になるって表面上は、好きとか嫌いとか、親が決めたからとか、いろんなパターンがあるように思うけど、その水面下には意識の世界での計らいというか、約束事のようなものがあるようだ。お互いが相手を通して、自分の闇に気付き、本当の自分に帰っていく、そのために夫があり、妻があり、そして子供がある。

そんな目で見直してみると、僕たちが日常的だって思っているものの背景に、何か壮大な『意識の流れ』まで感じるんじゃないだろうか。

ここでは触れなかったけど、過去世でのつながりまで考えていくと、〝夫婦の縁〟というのは、どこまで奥が深いんだろうって思ってしまう。

ところで次に紹介するのは、夫婦の関係も勿論あるのだが、どちらかというと親と子の関係だ。賢ちゃんっていう障害を抱えた男の子と、その子の面倒を見ながら、自分の心と向かい合おうとしたお父さんの事例だ。

その親子は滋賀県の湖東に住んでいる。

お父さんの名前は小森良夫、1943（昭和18）年生まれ、今年で64歳になるが、角張った顔にいつも人なつっこい笑顔を浮かべていて、せいぜい五十代後半にしか見えない。

電話で取材申込をすると、ＪＲ北陸本線の長浜駅で落ち合おうということになった。

その日、大阪から新快速・近江塩津行に乗る予定が、間違って一列車前の快速に乗ってしまった。それも間違って乗ったことにも気付かぬ間抜けさ加減。途中、乗る予定だった新快速にも抜かされ、約束の時間には

15 分近くも遅れての到着だった。

改札で待機していてくれた小森さん、乗っているはずの電車に乗っていないものだから心配して僕の携帯に電話をくれた。

僕のほうも、途中から乗り間違いに気付き焦り出す。

そこへ携帯電話が鳴り出した。電車の中だし、携帯電話で話すのはまずいよな。次の駅に着いたら、こちらから電話しよう。そう思うのだが、電話の呼び出し音が気になって仕方がない。

（小森さん、ごめん。もうちょっと待って）とばかりに、携帯電話を手で押さえた。

遅れた 15 分が一時間にも思えたが、それでも、何とか長浜駅に到着した。

改札口から出てきた僕を、小森さんは、いつもの人なつっこい笑顔で迎えてくれた。

「外に車を止めてるから、賢も車の中で待たしている。」

小森さんは、そう言いながら僕を外の車を止めてある場所へ誘導してくれた。

今日の取材場所は、小森さんの車の中だ。八人乗りのワンボックスで、後ろの座席が向かい合わせになり、即席の応接間になる。

小森さんが、車を湖岸まで移動させてくれ、そこで小森さんが調達してくれた寿司をつまみながらの取材となった。

ちょっとしたピクニック気分だ。

賢ちゃんが僕の寿司をねらって割り箸攻撃をかけてくる。防戦に集中するが、あえなく防御戦が崩され、一部を引き渡して白旗を掲げることとなった。

こうして未練もなくなり、いよいよ取材開始。

「賢ちゃんと話ができる場所があるぞ。」

1991（平成 3）年 1 月、ある新年会の集まりで、良夫さんにそう話しかけてきた人がいた。

馴染みの税理士さんで、小森さんの家の事情にも詳しい。良夫さんは、以前から障害を持つ息子の賢ちゃんと何とか心を通わせる方法はないかと思っていた。

賢ちゃんは 1973（昭和 48）年 9 月に生まれた。

生まれた時、仮死状態だったという。しばらくして泣き声が上がり安心していた。

しかし長女の時は 3 ヶ月を過ぎると首が据わり出したのに、賢ちゃんは 3 ヶ月が過ぎても首が据わらない。一歳を過ぎても言葉らしいものも発しない。心配になっ

て調べてもらったが、「聴覚に異常はないので、間もなくしゃべるようになるでしょう」という返事だった。それでも、何か気になり滋賀医大で検査してもらったが、この時も「異常なし」という結果が返ってきた。

　しかし脳に障害があったのだろうか、成長しても、知恵遅れのままで言葉も発することはできなかった。しかも食道が細いのか、食物を一度に溜飲することができず、何度も吐き出しながら摂取するという状態だ。

　小森さん夫婦は､賢ちゃんの状態を「仕方がない」と、自然と受け入れるようになっていった。でも「賢二と話ができたらなあ」そう思わない日はなかった。

　そんな矢先のことだ。

「大阪の八尾で、セミナーが開かれる｣、税理士さんは、そう言って一枚の案内プリントを差し出した。その税理士さんは、エルの出版物でセミナーのことを知ったという。

「申し込みはどうしたら？」

「何もいらん。ただそこへ行くだけでいいらしい。」

　八尾と言えば、仕事でもよく行くし、知り合いの家も八尾にある。良夫さんは何か身近なものを感じ、ぜひ行ってみようと思った。

当時、良夫さんは、息子さんの賢ちゃんのこと以外にも問題を抱えていた。
「救う会」事務局の運営に行き詰まっていたのだ。仲人の息子さんが白血病と診断され、良夫さんは、「一肌脱ごう」と骨髄移植のドナーを探すために「救う会」を立ち上げた。
最初は「血液型さえ合えば」と、簡単に考えていたが、骨髄移植のドナーというのは、血液型が合えばＯＫというものではなく、ＨＬＡ型という白血球の型が適合しないといけない。
ドナーは、なかなか見つからなかった。そして見つかった時には、既に本人の体力がなくなり手術もできない状態になっていた。「救う会」もこれまでと思っていた。

その日、良夫さんの記憶では２月３日のことだという。大阪の八尾で開かれる１日セミナーに参加した。八尾の会場は、有志の方が、ご自分の所有するビルの一室をセミナー会場として利用できるようにしてくれたものだ。
会場は入り口に靴箱があり、２部屋をぶち抜いたと

大阪府八尾市にある研修センターでセミナーの準備

思われる会場には絨毯（じゅうたん）が敷かれており、正面に講師用のテーブルと椅子が置かれ、前のほうには座布団が適当に配置され、後ろのほうには一部椅子席も用意されていた。

　良夫さんは、受付をしていた男性に「知人に紹介され、白血病の知人と、息子の賢の意識を知りたいと思ってきたんですが……」と話しかけた。

「これに希望事項を書いてくれませんか。」

　男性は、そう言いながら「チャネリング申込書」なるものを小森さんに手渡した。

氏名、住所、年齢、紹介者、それに希望事項と……良夫さんは、Ａ４用紙に印刷された申込欄をボールペンで丹念に埋めていった。

準備完了、後は待つだけだ。

やがて、会場は人で埋まり、思い思いの会話があちらこちらで交わされるようになる。

講話の時間になると、紺の背広に紺のネクタイ姿でその人は現れ、大阪弁で冗談を交えながら「人間の本質」について、「意識の転回」について、休憩も取らず二時間以上も熱心に話された。良夫さんは、たちまち、その人が好きになったという。

「親父みたいでもあり、兄貴みたいでもあり」「今思うと、お母さんのように感じる時もある」「その時々の自分の思いで、いろいろに感じる」と言う。

講話の時間の後、休憩時間をはさんで、いよいよチャネリングということになる。

チャネリングは、人の心を読んだりとか、過去世が誰だったかを教えてくれたりとか、未来を予言してもらったりとか、そんな当てもののようなことではない。あくまで希望者が自分の心を見ていくうえでのお手伝いをするのが、チャネリングということだ。

ところで良夫さんだが、いくら待っても自分の番が回ってこずイライラしていた。そのうち終了時間が来て「今日はこれまで」となり、「時間が許す人は、まだ残って続けます」ということになった。

良夫さん、大あわてで「朝一番に滋賀から出てきて、真っ先にチャネリング申込書を出しているんですが……」と、手を挙げた。

その人は、厚い申込書の束を捲り、「あった！　これか？」とプリントを差し出した。

一番に申し込んだため、束の下のほうになっていたのだ。既に前に出ていた女性が「私、大阪やから、今度にします」と引き下がってくれた。

「時間がないから、二つはでけへんなあ。どっちにする？」と、その人が訊いてきた。

良夫さんは「白血病の知人」の意識を出してもらうことを選んだ。

自分の番が来るのを待っている間、良夫さんは、チャネリングを分析し、「夫婦の問題はこうだな」「子供の問題ならこうだな」と、大まかな台本ができているのではないか、そんなことを漠然と考えていた。

ところが自分がチャネリングを受けてみて、そんな

考えは吹っ飛んでしまった。確かに耳から入ってくる情報は「そこは当たってるなあ」「でも、ここは違うなあ」と、当たったり、当たらなかったりと、あやふやなのだが、そこに座っているだけで、頭の思いとは裏腹に、腹の辺りがカーッと熱くなり胸奥から込み上げてくるものがある。
「まるで、『頭』と『心』が別の反応をしているような不思議な体験でした」と、良夫さんは、はじめてのチャネリング体験をそのように話してくれた。
　この体験で、ぜひ賢ちゃんの意識を出してほしいと思うようになり、「奥道後プリンスホテル」で開かれた2泊3日のセミナーには、奥さんと賢ちゃん、それに娘さんと、家族4人で参加することとなった。

　君は、「そんなセミナーなら参加費用が高いだろうなあ、4人で参加したら、かなりな出費を覚悟しないと」、そんなことを思っていないかい。
　老婆心で言うんだけど、基本的にセミナー費用は無料なんだ。ただホテルへ泊まると宿泊費がかかる。会場を使うと会場費がかかる。それを頭割りする、つまり実費徴収主義っていう訳だ。エルっていう会社がで

きてからだって、その人の講師料なんて一切払ったことはない。その人は、いつも本当のものには「金」がかからない。「太陽」だって「空気」だって、「お金はかからないでしょう」って言う。
　宿泊するホテルだって団体で交渉するから、個人で泊まるよりはずっと安く泊まれるということになる。

　僕の老婆心から、話が横道にそれてしまったが、いよいよ良夫さんが待ちに待った「賢ちゃんのチャネリング」ということになった。
　ところが肝心の賢ちゃんは部屋へ帰ってしまっていない。
「あの賢は部屋なんですが……」と言うと、
　かまわないからと言われ、良夫さんが前へと出てきて、用意された椅子に座った。横にはチャネラーが座り、その人が、良夫さんの前に立つと、手をかざして良夫さんの意識を自分のほうへ向くよう誘う。
　やがて、チャネラーの口を通して、賢ちゃんの思いが語られていく。
　耳から聞こえてくるチャネラーの言葉を聞いているうちに、やがて言葉を頭で理解している自分が遠のき、

言葉の意味がどうでもよくなってくる。

良夫さんの場合、「僕は意識です。僕の肉を見ないでください」という、賢ちゃんの意識が強烈に響いてきた瞬間、心の底から噴き上がってくるものがあった。

後は身体が震え、汗と涙と鼻水でグショグショになり、チャネリングが終わって、その人がコメントをしている間もこの状態は治まらなかったという。

1日目の夕食の時だ。「まさか」と思った。

その人が、みんなと一緒に食事をしている。良夫さんにしてみれば、その人は特別な人で、みんなと一緒に食事するはずがない。どこの宗教団体に行ったって教祖が信者と一緒に並んで食事するなど聞いたことがない。

ここは宗教団体ではない、教祖もいないし、信者もいない。いくら頭でそう思ってみても、やはり、考えられないことだった。

その夜、良夫さんは、賢ちゃんを寝かしつけて風呂に行った。風呂場の階段を下り、湯船のほうへ向かおうとして、湯船の中に二重三重の人の輪ができているのに気付いた。近づいてみると、湯船の中で、その人が、講話の続きをやっている。湯殿が、男連中のセミナー

会場に早変わりしていた。質問があると、その人が納得するまで話される。それを集まった男連中がうれしそうに聞いている。

以来、良夫さんはセミナーに参加する都度、昼の勉強会以外に、このお風呂での勉強会が楽しみで仕方がなくなった。

こんなエピソードがある。良夫さんが、賢ちゃんを呼ぶ時「ケンッ」「ケーンッ」と、語尾を上げて偉そうに呼ぶらしい。その人が、そう指摘する。そして「もっとやさしく呼ばないかん」と、風呂場で賢ちゃんの呼び方の講習会が始まる。

「ケンちゃん」と、語尾の後ろを下げるようように呼ぶようにと指導される。だが気恥ずかしくてなかなかうまくいかない。周りで聞いていた男連中のほうが、よっぽど上手に呼ぶようになった。

「ケンちゃん」って……。

セミナーが待ち遠しいのは良夫さんだけではなかった。何より賢ちゃんがセミナーを一番喜んでいるようだ。カレンダーを見てセミナーが近づくと、セミナーに持参する七つ道具（リュック・ティッシュ・タオル

等々）をうれしそうに準備する。セミナーの間隔が開くとリュックを差し出し催促してくるありさまだ。

　最初は、セミナーに集まってくる人たちも迷惑そうな目で賢ちゃんを見ていた。うれしいと手を打って走り回ったり、食べ物を探して他人の買い物袋を覗き込んだり、食道が細いせいだろうか、食べたものがノドを通らず何度も吐き出す様子を見て顔をしかめる人がほとんどだった。

　でも、その人は、賢ちゃんを見るなり「賢ちゃん、よう来たなあ」と喜ぶ。賢ちゃんも、時々ちょっと恥ずかしそうに下を向いたりするけど、うれしそうに手を打って走り回る。そんな様子を見ていて、セミナーに集う人たちも、賢ちゃんのことを自然と可愛がるようになり、今やセミナーのアイドル的存在になってきた。

　良夫さんが、「次のセミナーは休もう」と思っていたりすると、その人は、「賢ちゃんまた来いや、今度は熱海やな、お父さん忘れるでな言うたりや。」

　それを横で聞いている良夫さんは、自分の心を見透かされているようで、「それで、またセミナーに足を運んでしまうんや」とうれしそうに話してくれた。

「その当時は分りませんでしたが、その会話からやさ

しい波動を、私は感じていたと思います。帰って早速申し込みをしていました。」

やがて賢ちゃんも養護学校を卒業する日が来た。今のように作業所もない。作業所というのは、障害のある人たちが地域で生き生きと暮らせるよう労働の場を提供しようというものだが、その頃は、数も少なく、あっても一週間に一度預かりましょう程度のものでしかなかった。自然、賢ちゃんが家で暮らす割合が大きくなり、奥さんの負担も大きくなってくる。奥さん自身は、そうは思っていないのだろうが、良夫さんの目には、「このままでは、やばい」「ノイローゼになる」、そう映ったようだ。

良夫さんは、仕事を奥さんに引き継ぎ、自分は、運送業など賢ちゃんと一緒に動き回れる仕事をしながら、セミナーに参加していこうと決心した。

こうして20年近く、賢ちゃんと学び続けてきたが、取材の最後のほうで、

「今まで『そびえ立ってる』とか『己が偉い』とか言われて、『ハイ』『ハイ』と返事だけしてきたけど、今になって、言われてきた意味が分かったって気がするわ。」

そう話を結ばれた。

第五章　世間という現実

1

　君の住む世界ではどうか知らないが、僕たちが住んでいる世界は、「肉」を中心にすべてが成り立っている。「肉」という表現は、君には抵抗があるかもしれないね。でも他に表現のしようがない。「物」あるいは「物質」と言っても少し意味が違うし、「肉体」と言っても、ずれてしまう。要するに、「心」や「意識」に対するものとして「肉」って言ってるんだ。理解してほしい。

　ともかくだ、ともかく法律も、道徳も、政治も、経済も、もちろん教育だって、みんな肉的な充足を目指し、肉的な安全を確保するために作られたシステムだ。

　このシステムの中で、「世間」とか「常識」という考え方が生まれてくる。

　この「世間」とか「常識」というやつが人を縛る。

　信号を守ろうとか、人の物を盗ってはいけないとか、そんな最低限のことは「常識」で済ませるかもしれない。むしろ、従わないといけないんだけど、そんなレベル

の話じゃなくて、「世間並み」とか「常識」というモノサシが「生き方」そのものを縛り出し、歪めてしまうことが多々ある。
　教育だってそうだろう。良い学校へ行って、良い会社に入って、出世して……それが世間というモノサシでは素晴らしいことなんだ。だから、子供の思いに関係なく、親たちは、みんな、それを目指す。「おまえのためなんだ」と言って、子供を「世間」という価値観でがんじがらめにする。
　悲鳴を上げないほうが不思議だと思わないかい。むしろ悲鳴を上げられる子のほうが幸せだと思うよ。
　児童相談を担当する婦警さんがこんなことを言ってた。
「荒れる子供は幸せなんです。一番かわいそうなのは、荒れることもできない子供たちなんです」って。

　次に紹介するのは、公の児童相談施設のカウンセラーとして、この問題に直面した一人の女性の話だ。
　半田節子さんという。
　彼女は、昭和25年、函館市に生まれ、大学や大学

院修士課程で発達心理学、児童心理学を学び、以来、保育専門学院講師、家庭児童相談室相談員、保健所発達クリニック心理相談など、約20年あまりを児童教育の問題に携わってきた。

過日、あるホテルの喫茶室で、「母親のぬくもり」の出版打ち合わせをした。その席上、半田さんがどのようにして「心の学び」を始めるようになったのかを尋ねてみた。

彼女は、もともと精神世界に興味があったという。お母さんは信仰心のあつい方で、「おついたち」といって、毎月1日には必ずと言っていいほど神社仏閣へ参拝する。半田さんも、三つの頃になると、お母さんに連れられ、このおついたち参りのハシゴをして歩いた。

それが高じて、小学生の頃には、神社仏閣参りをすると「神より上に立とう。どうか神々よ、ご照覧あれ」、そんな思いまで抱くようになったという。

その頃から自分は素晴らしいという思いが強く、長じては、特別な力・霊的な力を求めるようになった。もともと霊感も強かったのだろう、お盆の頃になると、亡くなった人の足音が聞こえたり、夜中に肉体から離れた心が隣家を覗きにいくというような、俗に言う幽

体離脱現象も、高校生の頃には体験した。

その後、不安な思いから様々な会や団体を経巡（へめぐ）ったが、そこには確かに他力の思いもあったが、一方で本当のものを探している自分をも感じていたという。

そんな宗教遍歴に、結婚生活がピリオッドを打った。それは嫁•姑の葛藤からだった。同居して数年は頑張っていたが、もう限界だと思った。

その頃、半田さんは公営の「家庭児童相談室」でカウンセラーとして働いていたが、職場の仲間に、毎日のように姑の愚痴をこぼすようになっていった。

その同僚というのが、「心の学び」に集う僕たちの仲間だったのだ。

職場の同僚は言う。「あなたは、かわいそうな人ね」と。

さんは、最初、「かわいそう」という意味を取り違えていた。毎日毎日、同居したがためにつらい日々を送る。そのことを「かわいそうだ」と同情されたと思ったのだ。でも、本当は「責める思い、裁く思い、そして自分は正しい間違っていないと思い込み、その心を放置しているあなたがかわいそうだ」と言ったのだ。

また、「苦しんでいる本人が一番悪い」とも言われた。「そんなバカなと、なかなか友人の言うことは受け入

れられず反発しました。
　でも苦しいのは確かに自分です。相手を変えようと思っても変えられる訳がありません。じゃぁ、どうしたらいいのだろう、どうしたら苦しい自分を楽にすることができるのだろうと、半信半疑で学びの門を叩き、それから20年あまり、自分の心を見るということを続けてきました。
　最初の動機はそうでしたが、途中で紆余曲折があり、何度も挫折しそうになりました。
　でもあきらめずにこの学びを続けてきたのは、自分の中に切なる思いと決意があったのだと、今はそう思っています。はじめは他力的に楽になれるものなら、自分も変わって、相手も変われば、それで万事うまくいくという単純なものでした。しかし、次第にこれは自分が探し求めていたものだという確信が深まってきました。この学びを伝えてくれた田池留吉氏との出会いは私の人生を変えました。他力の思いが強いとなかなかこの学びの真髄に触れることはできませんが、他力の思いに気付くというだけでも、生き方は変わってきました。」
　半田さんは、心の勉強に出会った経緯をこのように

語る。
　ここで一つの問題が起こった。仕事との関わりだ。仕事では、子供の発達に関して相談を受け、悩んでいるお母さんや子供たちにアドバイスしないといけない。
　ところが、自分の心と向き合う学びの中で、彼女は霊道を開いてしまった。この時から苦しみが始まった。
　霊道を開くと、相談するお母さんや子供の意識が、直接、彼女の心に訴えてくるようになった。それは往々にして、口で言ってくる内容と意識で伝わってくる内容とが食い違っている。そのことを伝えてあげたいのだが、公的な機関に属しているため、それにも限界がある。また、本当はこう言ってあげたいのに、「この場合はこう」と、マニアル通りに答えないといけない、そんなことだって起こってくる。
　それは、自分の心から見れば、結果的に、嘘を伝えるということにもなってくる。
　また、発達クリニックというのは、子供が今どの段階にあるかを位置づけていくことで、「あなたの発達は、今、何歳ぐらい」とか「言語ではこれぐらい遅れている」「社会性ではこれぐらい遅れている」「情緒的にもこれぐらい遅れている」という風に、子供の発達を段階づ

けしていく。
「こういうことって、意識の世界から見れば、まったく必要がないことだし、自分は、相反することをやっているって、そのジレンマをいつも抱えていました。」
　と、半田さんは言う。
　そして、このジレンマで身体を壊し、すべての仕事を辞めた。というより辞めざるを得なくなった。
　2000（平成12）年6月の下呂セミナーの時、それは起こった。
　脚から腰にかけ、半田さんを激痛が襲ったのだ。セミナー参加者の中には腕のいい整体師やスポーツトレーナーもいる。しかし手に負えなかった。学びの友が、彼女をワゴン車に横たえたまま、数時間かけて地元の救急病院へと運んでくれた。
　3ヶ月入院することになったが、原因が分からない。加齢によるものでもないし、その他の整形外科的な原因も見つけられない。我慢できないような激痛で座ることもできず、寝ていても、身体はピーンッと張ったまま。
　その人は「他力の反省ができていないから他力の反省をすることと、周囲に出してきた思いを見るように」

と促された。

　これ以降、半田さんはすべての仕事を辞め、自分の心を見つめることに専念した。

　その合間を縫って、カウンセラーの仕事をしている時、伝わってきた親たちの思い、追いつめられた子供たちの思い、様々な苦しい思い、伝えてあげたくても仕事の性質上伝えられなかったこと、それらを「母親のぬくもり」という１冊の本として出版した。

　最後に重複するところもあるが、その本から、彼女の思いを抜粋しておく。

　私は今50歳半ばです。自分の小さい時、また学生時代を振り返っても、今とはまったく様相が違います。いつのころからか社会が大きく動き、人々の価値観も変貌をとげています。20年あまり子供の問題についての相談業務にたずさわってきましたが、子供の問題も複雑化し多様化していることに気づきます。相談内容にも大きな変化が見られるようです。公的な相談機関に勤務してきましたが、そこでは、言葉や発達の遅れ、自閉症、学習障害、注意欠陥・多動性障害、ダウン症、また登校拒否、落ちつきのない子供、適応障害、

非行などの子供を持つ親とのカウンセリングを主にしてきました。

障害や問題を持つ子供の療育というよりも、障害や問題のある子供の親との心のふれあいや交流をはかってきました。悩みを聞いて受けとめ、アドバイスをしてきました。

しかしながら、カウンセリングを行いながら、私はその当時、学び始めた、「人間とは何か、人生の目的とは何か、人間の本質とは何か」を探求するうえで、自分が心の中に見出してきた解答と、学問を基盤としたカウンセリングの間のギャップにとまどいを感じるようになっていきました。

言葉の遅れや発達の遅れは親にとっては大きな問題です。だから、その対応は一応伝えます。でも私の本音は、そんなことはたいして重要なことではない、それよりももっと大切にしていかなくてはいけないことがたくさんある。

夫婦は仲良くしていますか、嫁姑の間はいかがですか、あなたは自分を大切にしていますか、あなたが子供に望んでいること、それは本当に大事なことですか。外に見える事柄よりも、もっと子供の心を大切にして

欲しい、そのように伝えたい相談が山のようにありました。

子供の能力を引き出すことも大事かもしれない、でも、それよりももっと大事なこと、私は親たちがひとりひとり、もっと自分の心を見つめていくということを、伝えたくなりました。相談室では親は直接的な解答を求めてやってきます。しかしながら、家庭の歴史の中で培われてきた諸問題はそう簡単には解決できません。それには親自身の意識の変化がどうしても必要になってきます。生活をしていく基盤、もっとはっきり言えば、生きていく基盤を変えていく必要があります。それを伝える時に、私は公的な機関では、無理があるということにだんだん気づかされました。

形の世界、また表面的な心の世界を変えていくということは、相談室でも伝えることはできます。でもそれはいっときの変化です。

本当に大切なことは、生きる基盤を変えていくということ、そしてそれは肉的な幸せ、肉的な解決を求める心とは、相容れない世界なのだということを、思い知らされました。

親が不満を訴える、自分の心を語る、でも親自身の

意識が真っ直ぐに私に伝えてくる思いとは掛け離れていても、親の心情を考慮したり、自分を守る思いから、それを指摘することも、本当の幸せについて語ることも十分にはできませんでした。

それがだんだん苦しくなってきて、私は職を辞しました。

2

人が生きていく中で、その社会の構成員として冠婚葬祭に関する常識、あるいは世間体というものがついて回る。

誕生に当たっては、まずは安産祈願。妊娠5ヶ月目に安産を祈って神社に詣で、腹帯とか岩田帯と呼ばれているものを授けられ、これを捲く。生まれたら生まれたで、7日目をお七夜と称し、この日に赤ちゃんの名前を付けるのが古来からの習わし。そして、この名前を命名書に書いて神棚にお供えする。

生まれて1月が過ぎると、初宮参りといって、男子は生後31日目、女子は生後33日目に神社にお参りする。

この後も、お礼参り、七五三参りと生まれてからしばらくは神社との縁が切れない。

特に「氏神」だ、「氏子」だと意識しなくても、多くの人が、このように神社と関わり、当たり前のように正月には神社に初詣をする。結婚式も圧倒的に神式が多い。最近はクリスチャンでなくても教会で式を挙げる人も増えているが、葬儀となると、俄然、日本人は「自分は仏教徒」だという意識を強くするようだ。生まれる時は「神様」で、死ぬ時は「仏様」となるのが日本人の普通の姿になってしまった。

ところが最近、葬儀についてのトラブルが後を絶たない。その多くがお寺、あるいは僧侶との関係にあるようだ。こんな中、「葬儀不要」「墓不要」「戒名不要」の声もにわかに勢いづいてきた。つい先だっても朝日新聞の朝刊に、シニアの３割が「葬儀を望まず」という記事が掲載された。

しかし、一方で「葬儀は仏教でし、僧侶にお経を上げてもらい、戒名を授かり、死んだら墓に入るのが常識」という感覚が根強くある。

先日も、ある女性からこんな体験を聞いた。彼女も「葬儀不要」「墓不要」という考え方なのだが、ある時、知

り合いの町会議員の奥さんと話す機会があったという。話題は、息子さんの結婚式の話。ところが話すうちに、「うちの息子が、結婚式は外国で自分たちだけで挙げる。たくさんの人を招いて披露宴など挙げたくないと、バカなことを言い出したの」と怒り出したのだ。

　ご主人の立場上、そんな訳にもいかないらしく、それがもとで口喧嘩となり、あげくは、息子さん、「そんな体面ばっかりの儀式に縛られたくない。結婚式は内輪でしたい」と自分の思いをぶちまけたらしい。

　これには議員さんの奥さん、よっぽど腹が立ったらしく「近頃の若い者はけしからん、あんた、どう思う」と、彼女に同意を求めてきた。

　それをよせばいいのに、「私だって、今の形の結婚式や葬式は必要ないと思っています。お墓だって必要ないですヨ。先祖や親を敬うっていう気持ちが、どれだけ大きな葬儀を挙げるか、どれだけ立派なお墓を建てるかにかかっているなんて、ナンセンスだと思います。狭い日本、そのうち墓だらけになってしまいますしネ。息子さんの言ってること、案外、筋が通っていると思いますけど……」と口が滑ってしまったからたまらない。

「葬儀がいらない！　仏教徒が墓を建てない！　そん

なバカな話がありますか！」と、怒りの矛先は遂に彼女に向かった。
「私たちは仏教徒です。お釈迦様を敬い、先祖を敬っています。仏教徒が墓を建てないなど聞いたことがありません。家を建てなくても墓は建てるべきです。墓を持たない家は、いずれ衰退していきます。私が死んだら、墓がいらないというあんたの人生、これからどうなっていくか、草葉の陰からじっくり見届けてあげます。」
　ちなみに、この女性というのが、ともに心の学びをする僕の女房だった。
　このことをどうこう言うつもりはないのだが、私たちは、仏教徒だからこうしなければならないとか、お坊さんが言うからとか、常識だからとか言いますが、本当はどうなんだろう。
「お釈迦さんは、本当はそんなことは言ってない」とか、そんな難しい話は抜きにしよう。「人間は意識だ」という本質に立って考えれば、単純に答えは出るはずだ。
　私たちは、永遠に存在する意識であり、生まれ変わり死に変わりしながら、本当の自分に帰るために旅を続けている。そう考えると、「お墓」の中にいるのは、

一体誰なんだろうということになってくる。
　むしろ、「自分は死んだらお墓に入るものだ」と思っている常識が、その人を墓に縛りつけ、苦しみの中から抜け出せないようにしているんじゃないだろうか。
　同じように僧侶の上げる読経、そこに流れている波動は、死者を押さえつけ、死者を縛り付けてくる。お経の内容を云々しているのではなく、そこから流れてくる思いを言っている。
　もちろん、葬儀をしてはダメ、お墓を建ててはダメ、そんな学びではない。
「何をするのも自由、何をしないのも自由。そうする時の心を見てください」と、その人は言う。
　そうは言っても、地域という共同体の中で、自分の思いに忠実に「死者を送りたい」というのは、普通に考えれば大変なことなのだと思う。
　しかし一方で、自分の体験も含めて、いくつかの体験をお聞きしたが案外そうでもないようなのだ。苦労したという感覚でもなく、スーッと思い通りに事が運んでいく。
　僕の親父も、「世間様」とか「世間並み」とかをうるさく言う人で、自分の葬儀に関しては、子供は当てに

できないと、自分でいろいろと動いていたようだ。
　もちろん、親父がしてほしいなら最低限のことはしてやろう、そうは思っていたのだが、ところが親父のほうが変わっていった。
　病院では、殴られていない看護婦はいないというほど我が儘だったらしいが、死期が近づいてきたのが分かったのか、お袋に、自分の葬儀は「家族だけでやってほしい」と遺言したという。
　お袋も、僧侶は呼びたくないと言い、結局、家族だけで静かに送り出すことができた。葬儀の費用は、すべて含めて30万円を少し出た程度だった。
　次に紹介するお二人も、そんな体験をした方々だ。お二人については、地域の方にぜひ伝えたいという思いから、あえて実名を掲げている。

　滋賀に住む宇野さんは、5年前にお父さんを亡くされた。宇野さんは知り合いの葬儀店に連絡を取り、会場だけを貸してほしい旨を連絡し、家族だけで送ろうとしたが、お父さんがこの地域で指導的な立場にあったため、役場から情報が流れ、県会議員をはじめ市長や多くの名士が参列する大がかりな葬儀となってし

まった。
　ただ参列者が驚いたのは、そこには読経を上げる僧侶も存在せず、焼香もなく、線香の一本さえも上がっていなかったことである。
　ところで、この地区は因習や地縁関係が根深く残っているところであり、しかも宇野さんもお父さんも、この地区の指導的な立場にあり、檀那寺とも親しく、代々、檀家としても代表的な立場にあったという。お寺との関係ばかりではなく、この地区では行事といえば神事を指すほど、神社や氏神との関わりも強い。氏子としての役割も強かったという。
　話は前後するが、こんな環境の中、宇野さんのお父さんが直腸ガンの手術で入院することとなった。ところが開腹してみると思ったより状態がひどく、このまま手術を続ければ、老齢ということもあり生命の保証もできない。手術を中止するか、このまま続けるか、5 分以内に回答をほしいということになった。
　立ち会っていた宇野さん、相談する相手もなくすべての判断が自分にかかっているという状況に追いつめられてしまった。しかもゆっくり考える時間などない、5 分以内に答えを出さなければならない。

この頃、宇野さんは「人間の意識」ということについて学んでおり、本当に伝わるのは、「言葉」や「態度」でなく、その人の「思い」だということを教えられていた。口で「あなたはいい人だ」と言っても、心で「この野郎！」と思っていれば、「この野郎！」という思いがエネルギーとして働く。その場はだませても、このエネルギーが働くため、結局はうまくいかないし、相手も表面上はだませても、実は本人が気付かないだけで本音が伝わっているのだと……。

要は、自分が変わらない限り、いくら宗教に頼っても自分も人も決して救われることがないということを分かり始めた頃であった。

思いあまった宇野さん、このことを思い出し、「意識は伝わるんだ」と自分に言い聞かせ、必死の思いでお父さんの心の中に話しかけた。

「親父さん、どうしたらいい。手術を続けるほうがいいのか？　中止したほうがいいのか？」

その時、宇野さんの心の中に「手術を続けてくれ」というお父さんの思いがハッキリと響いてきたという。宇野さんは、半信半疑ながらも、その思いを信じ、医師に「手術を続けてほしい」旨を意思表示した。

やがて手術も無事終わって、お父さんの意識が回復した時、
「不思議な体験をしたよ。おまえが私に手術をするべきかどうか話しかけてくるんだ。」
宇野さんは声に出して話しかけた訳でもないし、しかもお父さんは麻酔をかけられて手術室に入っていた。このことを話すと、「おまえが常々言っていたのはこういうことだったのか、おまえのやってる学びは本物だ」と、あっさり脱帽したというのだ。
これからが、このお父さんの偉いところだ。
病状がある程度快復すると、宇野さんと二人して檀那寺へと挨拶に出かけた。
「息子が常々、人は意識だと言っている。私も病院で不思議な体験をし納得した。人は己の心を見つめ己自身が変わっていかない限り、寺に頼っても、経文に頼っても人は成仏することはできないことを知った。分かった以上、寺の檀家であることはやめたいと思う。理解してほしい。こんな訳だから、葬儀の時も、あんたが僧侶として出席することは控えてもらいたい。私との長年の付き合いで顔を出してくれるというのであれば、背広にネクタイで出席してほしい。袈裟や数珠などは

不要である。」

二人は、この後「長年、お世話になった」と礼を述べると、寺を後にした。

この後一年して、お父さんは、遂にセミナーに参加できずに亡くなった。肺気腫やその他の病気を併発しボロボロの状態であったという。死を悟られたのか、死ぬ一週間前、咳き込みながらも十分近く、自分の最後の思いをテープレコーダーに録音された。

「自分はこれまで自分の信じたことをやってきたが、その結果が果たして良かったのか、今、疑問に思っている。本当のことに早く気付けたのに、それをないがしろにし、今まで来てしまい、人生を無駄にしてしまったことを後悔している……」

宇野さんの奥さんが、たまたま録音されているその姿を目撃されたが、録音し終えると、しばらくはその場で泣いておられたという。

やがて宇野さんのお父さんは亡くなり、今回の葬儀となった。

集まった人たちは、僧侶もおらず、焼香もなく、線香の一本も上がっていない葬儀会場に面食らったが、静かに童謡の流れる会場に、やがて録音された最後の

メッセージが流れ始めた。
　咳き込み、時に涙ぐみながら語る故人の声に感動しない人はなかった。
　集まった人たちは、葬儀が終わると、
「葬儀もこれからは変わっていきますなぁ」「重苦しい読経よりさわやかでよかったですよ」「本当に気持ちのいい葬式でしたなぁ」と口々に語られていた。
　その弔問客の中に、檀那寺の住職も背広姿で参列していたという。
　この話にはまだ続きがある。この地域ではありえない、この一風変わった葬儀の後、非難の声が起こると思いきや、追随する人が出てきたのだ。この地縁関係の結びつきの深い地域でも、確実に因習に縛られたくないという思いが広がっており、宇野さんの行動に触発される人が今も続いているという。
　以下に掲載するのは、宇野さんのお父さんがテープレコーダーに残されたという最後のメッセージである。
　宇野さんの許可を得て、ここに掲載させていただくことにした。

　本日は私のお別れの会に当たり、皆様方にはご多忙

中わざわざお出でいただき本当にありがたく、はなはだ高席からではありますが、あつくあつく御礼を申し上げます。

私の生前中は、皆様方には一方ならぬお世話になり、これに対するご恩返しもできずに人生を終わっていくことを、ひたすら残念に存じております。何とぞお許しをいただきたいと存じます。

私の人生80年を振り返りますと、いったい私は80年間なにをしてきたんだろうと自問自答する時、やってきたことすべてが幻であったとしか言いようがございません。80年と申しますと、日数にして２万９千２百日、時間にして70万８百時間、億という数字から見ますれば、本当に瞬きしている間、ほんの瞬間に過ぎ去ったと思います。時計の針の１秒１秒の積み重ねが80年間で25億２千２百88万秒となりますが、その１秒１秒の大切さを、今更（声が詰まる）、「死」を直前にして知らされました。

１年は８万７千６百時間です。どうか、皆様、各々の年齢から割り出し、残りの時間を大切に悔いの残らぬよう、ご活躍あらんことを願うものでございます。

私は60歳を過ぎてから、人生が本当に幸せな１日

１日が送れたのではないかと思います。家庭においては、子供らに親らしいことは何もしてやれなかったのに、本当にみんなが「爺ちゃん、体の調子はどうや」と言って体をさすったり、また「栄養をとらなあかん」と言って嫁が料理をつくってくれたり、兄弟みんな日曜日に寄って、部屋の掃除をしたり、本当に至れり尽くせりに面倒を見てくれ、私ほど幸せ者はなかったと、１人、部屋から子供らのほうを向いて手を合わせておりました。

なお老人会の皆様には、ゲートボールをはじめ、旅行、ぼちぼち広場、忘年会、新年会と、老人同士で語らい、忘れることのできない老後生活をさせていただいたことに対し、お礼と感謝を申し上げます。今後はお体をお厭いになり、楽しい老後の人生をお過ごしになることをお祈り申し上げます。

いろいろと申し上げたいことは多々ございますが、言い尽くすことはできません。

最後に、本日お集まりいただきました皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げつつ、お礼の言葉と最後のお別れの言葉に換えさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。それでは皆さん、

さようなら、さようなら、皆さんの健康を祈ってます。
（泣きながら）どうかお幸せに、さようなら……。

3

大阪の千里に住む園部さんは、重度重複障害児を持つ60代前半の女性。亡くなったのは、障害児である娘の綾女（あやめ）ちゃん、20歳を迎えたばかりだという。

実は綾女ちゃん一家とは、僕自身、ごく親しく近所付き合いをした仲だ。今も手許に綾女ちゃんのお母さんの手記が残っている。

「娘の名前は綾女です。昭和52年11月18日、1500グラムで生まれました。7ヶ月の初めに早産しました。生後2、3日で呼吸困難を起こしました。同時に黄疸を伴い、保育器の中で光線療法も受けました。その後、順調に発育していると思っていましたが、未熟児網膜症になっておりました。それは比較的軽く終わりました。現在は左が弱視です。生後九ヶ月目に脳性マヒと診断されました。昭和54年1月末日に重度の脳性マヒによる四肢体幹マヒ、分かりやすく言うと、寝たきり、

一生涯寝たきりの子です。たとえ訓練をしても、寝たきりから脱することはできませんと診断されたのです。」

それから20年が過ぎた平成9年12月、綾女ちゃんのお兄ちゃんが結婚することになった。この時、綾女ちゃんは吐血が始まり病院に入院したまま。主治医のお医者さんも「もう長くはもたないだろう」と言っていた。それでも結婚式には病院の外出許可をもらって参加、式が終わるなり、また病院へとんぼ帰りしたという。

式場から病院へ帰り着き、看護婦さんに迎えてもらってうれしそうな綾女ちゃんの写真が残っている。

それから1月あまりが過ぎた平成10年1月14日、綾女ちゃんは病院で亡くなった。明け方の午前3時だったという。病院のストレッチャーで車まで運び、大好きだったお兄ちゃんのライトバンで団地の一階にある家へと連れ帰ってもらった。

綾女ちゃんはよく「キャッキャッ」と声を立てて笑った。外にいても、その笑い声が窓を通して聞こえてくるほどだ。亡くなったその日も、お母さんとお兄ちゃん夫婦がライトバンで連れて帰ってきたのだが、部屋

へ入るなり「キャッキャッ」という笑い声が聞こえるというのだ。
「いやぁ、アーチャン、生きてるわ！」と、一瞬思った。
　だが、それは飼い犬エルの鳴き声であった。
　夜が明けるなり、市役所に電話し、葬儀社を紹介してもらった。
「何も要りません、葬儀も不要です。棺桶と焼き場の手配だけをお願いします。」

　この日は、綾女ちゃんを知る人たちだけの送別会となった。
　急遽、綾女ちゃんの寝ていた部屋が立食パーティの会場となる。焼香も線香もなし、来る人も香典はなし、数珠も持たない。というのも、綾女ちゃんのお母さんが、仏教の葬儀に疑問を持っていたからだ。いや仏教ばかりではなく宗教で人は救われることはないと強く思っておられる方だった。
　だから来る人も、「綾女ちゃんが花が好きだったので……」と、花だけを持って参加した。来る人、来る人が花を持ってきた。
　常々、お母さんは、綾女ちゃんに「死んだら、アーチャ

ンの好きな花でいっぱいにしたげるワ」と言っていたが、期せずして、部屋はその言葉通り花でいっぱいになった。棺も花でいっぱいにした。ただ花だけを折って入れるのは「何となく残酷そうでイヤだ」というので、花だけをちぎるのではなく茎のままを入れたという。

　誰も泣く人はなく、綾女ちゃんの思い出話をし、ジメジメした雰囲気はなかったという。綾女ちゃんの担任だった先生も、集まった人たちも「こんな雰囲気っていいですネ、私もこんな風にしたい」と感想を漏らしていた。

　明けて1月15日、普通なら成人式となるのだが、この日、綾女ちゃんは黒いバンで斎場へと移された。

「焼いている間、みんなで食事をしました。お骨は迷った末に持って帰り、撒こうかとも思ったのですが、トラブルの元になってはと、実家のお墓へ入れました」とお母さんは淡々と語る。更に訊くと、それはお墓が大事だという意味ではなく、処分に困ったあげく、ここへ入れておけば誰にも迷惑がかからず土に帰るだろうと思ったからだそうだ。

「葬儀の費用は」と問うと、「棺桶代が4万円だった。そう、全部含めて13万円だったのを覚えているけど、

明細は覚えてないわ」と明るく答えてくれた。

　ちなみに大阪の市役所に電話で確認してみたが、大阪市では、お骨は持って帰らなくてもいいそうだ。最初に渡される書類に「お骨を持って帰る」「お骨を持って帰らない」の希望欄があるそうで、電話に出ていただいた係りの方に「お骨を持って帰らない場合、そのお骨はどうなるんですか」と訊いてみると、「1 年間保管し、その後、共同霊園にお入れします」という答えが返ってきた。

　このことは、全国どこの市町村でも同じらしいが、確認した訳ではない。

第六章　他力の反省

1

僕たちが、自分の心を知るうえで、最も大きな手がかりになるのが「母親の反省」だ、ということは、もう言ったよね。

それと同じく大きなポイントが「他力の反省」なんだ。

どういうことかと言うと、僕たち人間の最大の誤りは、「肉体」を「自分」だと思ったことだと思うんだ。

他力信仰というのは、まさに肉体を自分だと思うところから始まる。僕たちは、肉体を満足させるため、肉的な不安を解消するため、神というものをつくり出し、手を合わせ、祈り、拝んできたんじゃないだろうか。その心を他力と呼んでいるんだ。

神社や仏閣、いや教会だっていいんだけど、僕たちは、手を合わせる時、どんな心を使っているだろう。「他力の反省」というのは、自分以外のものに救いを求めようとする、その心を見ていくことだと思う。

どこそこの宗教団体に属したから悪いとか、誰それ

の本を読んだから悪いというような、そんな形じゃなくて、その時の自分の心がどうかを見ていくことなんだ。なぜ、手を合わすのか。なぜ、その会に入会するのか。その時の心を見、その心がどこから来るのかを探っていくのが「他力の反省」ということなんだ。
「他力の反省」ができていないと、いくら「本当の自分」に心を向けようとしても、いくら「母なる宇宙」に心を向けようとしても、肉的な満足を与える「間違った神」にしか、僕たちの心は向いていかないんじゃないかなあ。
　もともと僕たちの心が、肉的な充足のほうにしか向いていないんだから……。
　そんな弱い人の心を操り、自分たちの目的を達成しようとするのが、宗教を商売にする人たちだ。中でもカルト教団と言われる存在は凄まじい。その目指すところは「金」だったり、「力」だったり、時に「政治」だったりするが、「心」では絶対にない。「心」は看板でしかなく、利用するものでしかないんだ。
　僕たちの時代に、そんなカルト教団による大変な事件が起こった。
　少し横道にそれるが、話を聞いてほしい。

1995（平成7）年3月20日午前8時過ぎのことだ。営団地下鉄の日比谷線・千代田線・丸の内線の3路線・5本の電車にサリンという毒物が撒かれた。このため通勤客、駅員など12人が死亡し、約6千人の重軽傷者を出した。この前年には松本サリン事件というのがあって、長野県松本市の住宅街でサリンが散布され、7人が死亡し660人が負傷した。最初は、第一通報者が警察によって犯人に仕立てられ冤罪事件として物議を醸したが、完全に容疑が晴れたのは、地下鉄サリン事件が起こってからなんだ。

この二つの事件は、日本において、戦後最大級の無差別殺人であり、大都市で一般市民に化学兵器が使用された史上初のテロ事件として、全世界に衝撃を与えた。

警視庁は、数々の状況から、犯行はオウム真理教の仕業と断定し、翌々日の22日、総本山である山梨県の上九一色村の教団本部へ強制捜査を実施。5月16日に麻原彰晃（本名・松本智津夫）ら教団幹部を逮捕して事件は決着に向かった。

これだけなら「宗教って怖いねえ」だけで終わるんだけど、僕たちも、本当のことを少しでも多くの人に伝えたいって「セミナー」を開いたり、「心の相談室」

を運営したりとか活動してるだろう。

　そのせいだと思うんだが、公安警察が、僕たちの「心の相談室」へ調査にやってきたんだ。たまたま僕がいたんで、僕が公安警察の捜査官と面談することになった。

「公安警察って何のことか」って……。

　うーん、一口で言うと、公安警察というのは警察活動の中でも、特に国家に対する犯罪行為を取り調べるところだ。だから警察では最も優遇された扱いをされている。

　その調査官が言う。

「あんな事件があったもので、悪いんですが、人の集まる場所へはお伺いし話を聞かせていただいています。ご了解ください。」

　言葉や態度はひどく丁寧だったけど、やっぱり公安警察の人っていうのは、何か独特の厳しさを感じさせる。話していても、随分気詰まりだったことを覚えている。それでも、学びの趣旨と活動状況を話すと、「申し訳ありませんでした」と、恐縮しながら帰っていった。

　以来、調べられることはなかったが、僕自身に不可思議なことが起こった。

　大阪から引っ越す際に持ってきた自転車が行方不明

になった。防犯登録もしていないし、名前も消えてしまって分からなくなっている。見つかったところで、僕のものだとは決して分からないはずだ。諦めるしかなかった。

　ところが、ある夜、パトカーがその自転車を積んで我が家へやってきたのだ。

　玄関の呼び鈴に、出てみると警官２名とパトカー。その後ろのトランクには、はみ出すように自転車が積まれていた。

　いきなりのことだった。前にも他の自転車をなくしたことがあったが、その時は名前も住所も書いてあったので、駐在所から電話が入り、印鑑を持ってできるだけ早く引き取りにこいということだった。

「盗難自転車の出前なんてありかよー。」

　口に出かかった言葉を飲み込み、「あなたの自転車ですね」という警官に、「そうですけど、どうして分かるんですか。防犯登録もしてないし、名前だって、ほら、消えてしまっているじゃないですか？」警官は一言「分かるんです」と言う。

「受け取りのハンコ、いるんでしょ、取ってきます」と中へ入ろうとすると、あわてて「拇印でお願いします」

と、用意した朱肉を取り出した。

結局、指紋を採られてしまった。多分、オウム捜査の一環で指紋を採られたんだろう。僕はそう思っている。そうだとしたら、随分手の込んだことをするもんだ。僕の思い過ごしなら、「ごめんなさい」と謝るしかないが……。何も僕は警察を批判しようと、こんなことを長々と書いてるんじゃないんだ。誤解しないでほしい。

でも今になって、当時のことを書こうと整理していると、僕自身、何か日本の不透明な部分と袖をすり合わせてきたような気がして仕方がないんだ。

勿論、僕の気のせいかもしれない。オウムの事件なんて、大変な事件だとは思うけど、僕自身、あまり興味はなかった。「他力」のことを書こうと思って、当時起こった、地下鉄サリン事件のことを調べていたら、いきなり、自分の中に眠っていた一人の人物の記憶とつながってきてしまった。

映画俳優で映画監督でもあった伊丹十三さんの記憶だ。

もう、かれこれ36、7年も前のことになる。まだ20代前半だった。その頃、僕は、某広告代理店の子会社でＣＭフィルムの制作助手をしていた。

伊丹さんと知り合ったのは、ある「カレールー」の

コマーシャルの仕事でだった。伊丹さんが奥さんの宮本信子さんと掛け合いで、ユーモラスな家庭の一場面をコマーシャルとして再現する。

　決まりの文句が「女房、大いに喜ぶ！」で、当時は、この言葉もよく流行(はや)ったものだ。

　その頃、伊丹さんはまだ俳優業をしておられたが、ディレクターにアイデアを出したり、カメラマンとカメラアングルの相談をしたり、ただ俳優というだけではなく、まるでスタッフの１人であるかのような動きをしておられた。

　そうしてできたＣＭフィルムだが、スポンサーからクレームが付き、野菜を炒めるシーンが取り直しということになった。

　取り直しには同じフライパンを用意しないといけない。食通の伊丹さんは、カレーの作り方にも一家言を持っておられ、撮影のためとはいえ、愛用のフライパン持参で自らカレーを作る。今回は、野菜を炒めるフライパンのアップだけで、伊丹さんに来てもらうことはないのだが、フライパンは借りてこなければならない。

　これは制作助手の仕事だ。電話で約束を取り付け、狸穴(まみあな)のマンションに伊丹さんご夫婦を訪問した。玄関

先でフライパンだけ渡されるかと思いきや、部屋へ通され、コーヒーまでいただき、そのうえカレー談義まで聞かせていただいた。

伊丹十三さんといえば、往年の名監督、伊丹万作さんの息子で、当時は「北京の55日」とか「ロード・ジム」とか、主にハリウッド映画で活躍されていた。

映画マニアの23歳の青年が、そんな人と一緒にコーヒーを飲み、カレー談義をしたんだ、舞い上がるのも無理はないと思わないかい。

お礼を述べ、マンションを出るなり、背後から「おーい」と伊丹さんの呼ぶ声がする。振り返ると、伊丹さんが奥さんと一緒にベランダへ出てフライパンを振っていた。

のぼせてしまい、借りてくるはずのフライパンを忘れてきたのだ。

以来、このことは、僕の大切なエピソードの一つとなった。

あれから22年が過ぎ、エルから、「綾女、ありがとう」という本を出版した。サブタイトルに「チャネリングでとらえた綾女ちゃんからのメッセージ」とあるように、肉体的には脳性麻痺のため話すことのできない娘

の意識を、お母さんがチャネリングでとらえ、心で話し合うことで、人間は肉ではなく、意識こそが本当の姿だということを浮かび上がらせようとしたものだ。

この本を、どうしても伊丹さんに渡したいと思った。伊丹さんの義弟が大江健三郎さんで、大江さんには光ちゃんという障害を持った男の子がいる。このお二方に、どうしても読んでほしいと思ったのだ。読んでもらって、どうしてほしいということはなかった。ただ読んでもらいたい、そう思って、まず、都内麻布にある狸穴のマンションを訪ねてみた。

1992（平成4年）年5月22日のことだ。

以前、住まいだった場所は「伊丹プロダクション」の事務所になっており、伺った時は、事務員らしき男性二名が詰めていた。

「昔、伊丹さんとＣＭの仕事をしたことがあって……」と、当時の話をし、「最近出版した本を、ぜひ伊丹さんに読んでほしいと思いやってきたんですけど。当時は、ここにお住まいだったもので」と来意を告げた。

二人の顔から警戒心が解け、急に親しそうになった。

「内緒だけど、今でもこの上の階に住んでるんだ。自宅は別にあるんだけど、こっちに来るほうが多い。で

も残念だけど、今日は取材でいないよ。別の日に、直接、上の階に行けば会えると思うよ。この真上の部屋だから。」

次に来ようと思っても、いつのことか分からないし、僕は、とりあえず本だけは預けていこうと思った。

「ああ、いいよ。間違いなく渡しといてやるよ。」

1人の男性が気軽に本と名刺を受け取ってくれた。

事件は、その日の夜に起こった。帰宅した伊丹さんが、付近で待ち伏せしていた3人の男性に襲われ重傷を負った。当時は、伊丹監督の作品「ミンボーの女」公開に抗議した、やくざ組織の犯行だと言われていた。

僕が伊丹さん宅を訪問した日に事件が起こっている。預けた本は、事件のどさくさに紛れてしまい、読んでもらえはしないだろう。

テレビのニュースを見ながら、漠然と、そんなことを考えていた。しかし、忙しさに紛れ、そんなことも忘れてしまい、次に伊丹さんのことを聞いたのは五年も経ってからのことだ。

1997（平成9）年12月20日、某写真週刊誌に取り沙汰された不倫疑惑に対して「死をもって潔白を証明する」との遺書を残し、あの狸穴のマンションから投

伊丹夫妻が住まいしていた狸穴のマンション

身自殺を遂げたというのだ。当時は、伊丹さんが「不倫の身の潔白」に自殺する訳がないと思っていた。きっと他の理由があっての自殺だと思った。

今になって知ったのだが、伊丹さんは、次回作の準備中だったという。それも巨大化した某宗教団体をモチーフにしたものだという。オウム真理教ではない、とだけ言っておくが、どうも、その組織と、北朝鮮の日本における資金調達の窓口になっている産廃業者、それに暴力団、この三者の関わりを映画製作のため調査されていたようなのだ。

そして伊丹さんの死因もここにあるという。一説に殺されたのだという。5年前の伊丹さん襲撃事件も、何らかの関連があるようなのだ……。

僕は、その真偽を云々する立場にはないし、それを大上段に振りかぶって「日本の黒い霧」を一刀両断する、そんな思いもない。

ただ自分の周辺に、オウム事件があり、伊丹さんの

伊丹監督襲撃事件など言論をめぐる事件の特別展示

自殺があった、それを調べる時、思いもしない不透明な部分が見えてきた。

ただ、それだけのことである。本文からずれるのは承知で、僕の生きた時代、自分の周辺でこんなことが起こっていた、それを君に伝えたかった。それだけのことだ。

人の心は弱い。常に不安を抱えて生きている。謂われの知れない不安、生活や仕事の中での悩み、生きていくことの苦しみ、それがどこから来るのか、何のためにあるのか、本当のことが分からず、それに耐えき

れなくて、心の拠り所を宗教に求める。

　そんな人の弱さを利用すれば、何だってできるに違いない。金儲けは勿論、政治的軍事的利用も可能になってくる。これが現実の今の姿ではないだろうか。今や宗教は、気付くと気付かないに関わらず、この現実の中にある。

　その人は言う「人生は苦しみではなく、喜びだ」と。しかし、本当のことを知らない限り、人生は不安と苦しみでしかない。その人の言うように「いかに癒しを外に求めようと、自分の心と向かい合わない限り、決して本当のものは見つからない」し、「人生は喜びだ」と心から感じられる自分にはならないだろう。

　次に一組のご夫婦を紹介したい。

2

　吉田正治さんと奥さんの博子さんは、ご夫婦で東大阪のマンションに暮らしておられる。

　韓国の出身だという。お爺さんは釜山の警察署勤め

だったが、お父さんが16歳の時、日本へ渡り、苦労して吉田軽金属工業所を興し、30人の従業員を抱えるようにまでなった。戦時中は、軍の依頼で松ヤニから油を採り出す研究にも従事したという。

正治さんは、そんな血筋を引いているのだろう。仕事もできるが、遊ぶのも半端ではない。

セミナーを始めた頃は、仲間からも「悪(わる)」の代表選手のように思われていた。

取材では、そんな正治さんの変貌ぶりを見せつけられた。

その日、マンションを訪ねていくと、入り口に1匹の猫が出迎えてくれた。

顔を見るなり「ニャーッ」と一声泣いてマンションへと入っていく。猫を追うようにして中へ入ったが、エレベーターには「点検中」のカード。

また「ニャーッ」と一声。見れば、件(くだん)の猫は、奥にあるドアの横手に座りこちらを向いて泣いている。行ってみると、ドアの向こうに階段があった。目指すは六階建てマンションの最上階。覚悟を決めて上り出すと、猫はまた「ニャーッ」と一声泣くや外へと出ていって

しまった。出迎えてくれたつもりなのだろう、フワーッとうれしい気持ちが残った。
　吉田さんの部屋に着くや、「大変でしたやろ」とねぎらいの言葉とともに熱いコーヒーが出された。余談だがこのコーヒーがうまい。普段は砂糖とミルクを入れて飲むのだが、ストレートで一口飲んでみて、砂糖もミルクも入れる気はなくなった。
　コーヒーの苦みが残っている間に、開口一番、この学びとの出会いについてお聞きした。
「女房でんがなあ。女房がこの学びをしてたんです。」
　では、「奥さんは？」とお尋ねすると、知り合いに勧められたという。
「以前は何かされていたんですか」と問うと、
「他力ですわ。親から言われて……世間では誰でもやってまっしゃろ。」
　いきなり正治さんが口を出した。
「おがみやババアでんがな。1年にいっぺん……」
「お祓（はら）いしますんや！」と、博子さんが言う。
「相当な金額ですねん。1回に5、60万はかかるんです。それを毎年やるんですわ。私はそれが嫌いでね。やめてくれいうてもあきまへんねん。ほらひどいです

よ、おがみやババアが２、３人連れて来て、３日３晩太鼓叩いてやりまんねんで。」

　ご主人の言葉に、奥さんは、それをやっている時は本当に苦しかったという。

「お金もかかるし、家も散らかるし、子供や家族にも迷惑かけるし、自分でもしたくない。そのうえ、この人が怒りまっしゃろ。それでも、やめられませんねん」と言う。

「何で、こんな苦しい思いまでして」と思うのだが、「やれへんかって何かあったら困る、そう思うたら怖くてやめられませんねん」とも言う。

　そんな苦しい思いをしながら何十年もやってきた。だから、この勉強を知り、何もしなくて良いと知った時、「この勉強ってすごい勉強やなって思いましたわ。同時に、なんて幸せで、なんて楽な勉強や、こんなに楽な生き方があったんやなあって、しみじみ思いましたわ。」

　博子さんが、ホッとしたように、その一言を口にされた。

　セミナーに奥さんが行くようになって、不思議なことが起こった。以前は神棚をしつらえ、お母さんの法事に誰より熱心だったご主人が、「法事」の「ほ」の字

も言わなくなったことだ。正治さんは、お母さんが大好きだった。そのお母さんが43歳で亡くなった。正治さん、24歳の時だ。残された正治さんは気が抜けたようになり、あまりのショックで、何をする気もなくなり、一時は精神科のご厄介にまでなるほどの落ち込みようだった。

正治さんの耳には、電話口で聞いた「お母ちゃん、しんどいから早よ、来てや」、その臨終の言葉だけが今も残っている。

だから、お母さんの法事は今まで欠かしたことがなかった。

それがプッツリと言わなくなった。おまけに、今まで率先して行っていた「初詣」や「戎(えびす)さん」まで行かなくなったという。

だからといってご主人が、最初からセミナーに賛成だった訳ではない。博子さんがセミナーに行こうとすると、必ずと言っていいほど、もめる。

博子さんがセミナーを録音したテープを聴いていても、ご主人が帰ってくれば、あわててスイッチを切る、そんな状態だったという。

ところが、こんな事件があった。

1993（平成 5）年 6 月のことだ。ある会の集まりで、男同士で秋田県の玉川温泉に行った。2 週間のコースで先輩と同室だったが、その先輩は用事があるとのことで 1 週間で帰ってしまった。残り 1 週間、部屋では 1 人ぽっち。おまけに自炊の湯治場なので、消灯時間があって 9 時には灯りが消えてしまう。

食事が終わって 1 人になると、山奥の大自然の中、シーンッと辺りは静まりかえり、凄まじい恐怖に襲われる。どうしようもない恐怖で、「死に直面しているような感じで、自分にはどうにもできない」と、奥さんに電話を入れた。

奥さんは「お父さん、よかったね。早よ帰っておいで」と笑っている。

2 週間が過ぎ、やっと天王寺まで帰ってきても、なぜか家へも帰れずウロウロするありさま。何とか家にたどり着いた時、奥さんにまで、その恐怖が伝わってきた。

奥さんの博子さんは、「勉強してなかったら、私まで同通して、夫婦でおかしくなってしまったやろね」、それほどの恐怖だったという。

しかし、ご主人は、帰ってからもズッと落ち込んだ

まま。恐怖のあまりベランダへ出ては、「宇宙の神よ、助けてほしい」と、祈り出す始末。

博子さんは、その人に電話すると「ウチの主人がこんな状態で、何か先生に話したいことがあるようなんです」と相談した。

結果、「セミナーに来てみたら」ということになった。こうして正治さんは、この年の七月、石川県の北陸荘で開かれたセミナーにはじめて参加することになり、この日から正治さんは自分の心と向かい合うこととなった。

正治さんが秋田の山奥で出会った恐怖は、外にあるものではなく、自分の中にあるものだと思う。過去世で作った恐怖が、「大自然の中に一人ぽっち」という環境に置かれたことでよみがえってきたのかもしれない。奥さんの博子さんは言う。

「あのきっかけがなかったら、うちの人は、絶対セミナーにつながってないと思う。そう思ったら、過去世ってありがたいねって思いますわ。」

セミナーで学ぶようになって、正治さんには気がかりなことがある。

「本当のことを知らないで死んだら、みんな地獄です

よ」という、その人の言葉だ。

　勿論、死んで地獄へ行くのではない。本当のことを知らない心が、そのまま地獄を作っているということだ。生きている間は、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、周りの人や環境に紛れて感じることができないが、死んでしまったら、自分の抱えていた心だけが残る。人を恨む心、争う心、妬む心、さびしい心、怒る心……そんな心の世界がクローズアップされる。それを地獄という。

「お母ちゃん、しんどいから早よ、来てや」。

　お母さんの最後の言葉が、今も正治さんの心の中に響いている。

「大変や、お母ちゃんが地獄にいる。何とか助けてあげたい。」

　それから正治さんは、気が付くと、お母さんに語りかけていた。人間の本当の姿は意識だということ、肉体は仮のものだということ、永遠に続く意識こそが自分たちで、これに気付くために肉体を持って生まれてくるのだということ。

「母親が地獄にいると思うと、話さずにはおられませんでした。」

お母さんに語りかけながら、正治さんは、自分自身にも語り続けていた。お母さんに話すことで、今、地獄を抱えている自分自身をも供養していたのだと思う。

戦争中、疎開先の福島でのことが思い出された。1、2歳の頃で記憶もなかったと思うのに、深い雪の中で遊んだことや、囲炉裏で冷え切った身体を暖めた、あの感覚がよみがえってくる。そのぬくもりの中で、正治さんは、そっとつぶやいてみた。

「お母さん、ありがとう。田池先生と出会えたで」と……。

奥さんが始めた勉強。今では、ご夫婦そろって学んでいる。

「田池先生が、講話の中で、1人でも2人でもいい、本当の道を歩んでいく仲間になってください。そう言われたことがあったんですわ。その言葉が胸にしみて、何とかつないでいきたい、今はその一心で学んでいます。」

この原稿を書いている時、『意識の流れ』のホームページを開いた。心を見る仲間たちが拠り所としているウェブサイトで、僕も毎朝開いて更新をチェックしている

のだが、たまたま次のようなメッセージが公開されていた。その一部を引用させてもらう。

> （上略）それぞれすごいエネルギーを蓄えているのです。他力にひれ伏してきたエネルギーの向け先を変えれば、本当に自分自身でも驚くほどのものを感じることだろうと思います。
>
> 何もかもぶっちゃけて、何もかもさらけ出してといかなければ、格好ばかりつけていては、その人は一番出遅れます。みんな真っ黒です。どこに賢くて高潔な人がいるのか、地獄の自分を感じれば、そんなこと絶対に思えません。
>
> 中途半端な、生半可な学びを続けてきた人は、それなりの結果しか出ないでしょう。

3

喜多田テル子さんには、2人の姉と2人の妹がいる。5人すべてが女性という、聞くだけで、にぎやかそうと言うか大変そうと言うか……。

その日、喜多田テル子さんはじめ、４女の堀江幸代さん、五女の近藤みどりさんに無理を言って大阪に集まっていただいた。本当にありがとうございました。

しかし女性が３人集まると、その字のごとく姦（かしま）しい。まして姉妹となると､圧倒されるものがある。その日は、堀江さんのご主人にも同席いただいたのだが、か弱い男性２人では、どうにも意気が上がらない。

ただでさえ素人取材なのに、果たしてうまく進行するものだろうか。

そんな心配をよそに、話はひとりでにドンドン進んでいく。こちらの仕事は､遅れないよう､ひたすらノートを取り続けることだけであった。

喜多田姉妹は、福井に生まれた。お母さんは山形の旧家の出だったが、親同士で決めた結婚に二度とも失敗し、逃げるようにして福井に来たという。

そして、今のご主人と結婚した。お母さんの思いの中には、山形での結婚の失敗が大きく尾を引いていたのだろう。「色情因縁を切るためだ」と、ある宗教団体にご主人共々入信した。

娘さんたちから見て、夫婦仲は良くなかった。「喧

嘩ばかりしていた」と言う。ただ入信している宗教がらみのことになると、驚くほどよく協力し合っていたという。

家は裕福だった。喜多田さんは「昔の写真なんか見てると、長女なんか、ベレー帽かぶって、まるでお嬢さんみたいやった」と言う。

ところが福井地震の発生で、喜多田家は、裕福な暮らしから貧乏生活へと一転することになる。

『福井烈震誌』（福井市・1978 年３月刊）をもとに、いかに福井地震がすごかったかを紹介しておこう。

昭和 23 年６月 28 日、この日は朝からどんより曇って蒸し暑く、何となくイヤな感じのする１日であった。人々は窓を開け、少しでもと外気を求めた。

時に午後５時 14 分、学校の授業がすんだ子供たちは喜々として戯れ、１日の勤めを終えた人々は「ほっ」として家路を辿っていた。

その瞬間、突如「ごおっ」という気味悪い音がしたかと思うと、大地は「ぐらぐらっ！」と大波の如くうねり、家も、人も、犬も、地上のあらゆるものは大地にたたきつけられた。橋という橋はいくつにも

折れて河中に墜落し、進行中の汽車や電車はその場に横倒しになった。土煙で空は夕暮れのように暗くなり、余震はひっきりなしに続いて、正に地球最後の日を思わせた。

地震と共に、市内各方面から火災が発生し、猛烈な勢いで全市に拡がった。建物の下敷となって圧死する者数知れず、生きながら焼かれて死んだ人も少なくなかった。

こうしてほんのわずかの間に、市内の家屋１万5000余戸が倒壊し、2000戸あまりが焼失、950余名の人々がその尊い生命を奪われた。

この地震を契機に、気象庁は「震度７　激震」という震度階級を設定したほどであった。福井地震は、家屋や橋梁など建造物を倒壊させただけではなく、喜多田さんの家計をも直撃した。

お父さんが落下物の下敷きになり背骨を折るという大事故に見舞われたのだ。

以来、寝たきりで、山中（やまなか）の国立療養所に５年間も入院するという大怪我だった。

働き手を失った喜多田家は、このため豊かだった生

活が一変した。
　そして福井地震の直後、喜多田さんは生まれた。地震の間、お母さんは「まだ生まれないように、今生まれたら大変」と、お腹を抱えるようにして逃げ回ったという。
　その翌７月、喜多田テル子さんは誕生した。
　やがてお父さんも退院し、幸代さんやみどりさんも生まれた。
　幸代さんが、小学校に上がる時のことを思い出し書いた一文がある。

> 　その赤いランドセルを目にした時、この世の終わりを感じた。小学校に入る前から、自分がこれからどんな人生を歩んでゆくのか、知ってしまったような恐ろしさだった。私は革でできたピカピカのランドセルを想像してきた。だから、薄汚れた朱色の、しかもまるで安物の大きな牡丹の花が描かれているのを確認した時には、声も出ないほどのショックを受けた。
> 　母は狭い部屋の入り口に、ランドセルと一緒にちょこんと座って、「こんなのしか買えなかったけれど」とか何とか、私に声をかけてくれたと思う。私は今に

福井大地震（正面のビルは大和百貨店）

も崩れそうな泣きたい衝動と必死で戦っていた。（略）

最近、あの赤いランドセルが心の中で変わってきた。お母さんの反省をする時、幾度も感情的になって、その憎悪をあらわにさせてくれた赤いランドセルが、時々ものすごく愛しくなってくる。お母さんを心から呼べば呼ぶほど、あんなに嫌った牡丹の花びらが、どうしようもなく本当に懐かしい。

そして本当は誰よりも独占したかった母が、今は私の心の中で独り占め、やっと母と本音で語り合えると思う。意識の世界では、タイムマシンに乗らなくても、心を見たいと思ったその時代に行けるのだと実感した。

横手から、テル子さんが、
「私は、そんなランドセルさえ買ってもらえなかった」
と、言った。
その後、少しずつ家計は上向きになり、市営住宅も当たりヤレヤレという時、またまたお父さんが踏切事故で亡くなってしまった。53歳だった。
遮断機が故障して下りなかったというのだ。
お父さんは学生時代、野球の選手だったが、ボールが直撃するという事故で右眼が義眼だった。このため、右からやってくる列車が見えず難を避けられなかった。
「これがまた良かった」と幸代さんが言う。
「冗談ではなくて、ＪＲの見舞金を食いつぶして、姉2人が嫁に行けたんです。」
集まっていたみんなが大笑いする。僕も（笑っていいのか？）と思いながら、つられて大笑いしている。ともかく笑いっぱなしの取材だった。
ところが話されている内容は、とても笑って聞ける内容ではないのだが、女性陣3人の話しっぷりが、見事というか、潔いというか、すべてのことを笑い飛ばしてしまう。

テル子さんが、そんな雰囲気に乗せられ自分のことを話し出した。

福井に足羽山（あすわやま）という墓地がある。かつて足羽山の西側には火葬場があった。1999年に火葬場は移転し、今では墓地公園として整備されているが、ここがテル子さんの子供の頃の遊び場だった。

「生きている人間が怖かった。火葬場は何かに見られているような気配がして嫌いだ」という。

子供の頃、台風の日に幽霊の行列のようなものを見たことがあるそうだ。

ある時、戦争中に埋められた骨を見せられたことがあって、以来、怖くなって墓地には行かなくなったという。

その頃から、「死にたい。なぜ生まれてきたのか、なぜ今生きているのかが分からない」。そんな思いから「役に立つ人間になりたい、役に立たない人間は生きているべきではない」とも思い、「好きで生まれてきたのではない。だから死ぬ時は自分で決める。死はすべてからの解放」と、そんな思いがいつもあった。

ご両親はテル子さんのことを「友達はなく、いつも1人でポツンと遊んでいた」とよく言っていたそうだが、自分でもどんな子供だったのか思い出せないという。

ある時、母親に「自分は何のために生まれてきたのか」と訊いたことがある。

母親は「神様が、人々の陽気暮らしを見て楽しむために人間を創られたのだ」と、入信している宗教団体の考え方を話した。テル子さんは反発する。

「何で神様を喜ばせるために、私が生まれてこなければいけないのか！」

テル子さんは一歳の時に手を火傷（やけど）して、指が曲がっている。このため性格がひねくれ友達ができない。保育園時代には、お遊戯の時も手をつないでもらえなかったのだという。「この指さえ真っ直ぐになれば幸せになれる」、そう思うたびに母親を恨んだという。

母が傍にいたのに、こんなことになってしまった。母が信じる神様は、奇跡を起こすことができるという。だから必死になって信仰した。でも、私の曲がった指を元へ戻すことはできなかった。

曲がった指はあきらめたが、人を助けるということには興味があった。お授（さず）けというパワーをもらえると、病（やまい）等で苦しんでいる人を助けることができる。だから一所懸命に信じようとした。しかし、テル子さんの場合、指が曲がっていて、そこからパワーが漏れてしま

うと言われた。一所懸命だっただけに反発もすごかった。会長さんと言われる人に食ってかかったが、その時は、怒りで後先が見えなくなった。その時、他力信仰のエネルギーは怒りだと思い、以来、熱心になれなくなったという。

母親の一言がいつも引き金になった。何か自分が事を起こすたびに、母親が一言いう。その一言が許せない。私が死ねば母が苦しむ。自分が死ぬことで母に復讐することができる。そんな思いで、何度か自殺未遂をすることになった。

今思えば、自分の中にある闇を、母親が気付かせてくれていたのだが、当時はそんなことは思えなかった。ただ母親を懲らしめるために自殺を図る、その思いが根深くあった。同時に母親が大好きという思いもあり、その２つが自分の中で喧嘩しているという状態だった。

この頃のテル子さんは、酒とタバコと精神安定剤で保っていた。

それが睡眠薬が効かなくなり、医師からは、精神科へ行くよう勧められた。

テル子さんは、いつもはしないのに、なぜか妹の幸代さんに連絡をとった。二人は犬猿の仲、二人してど

ちらもが「親より嫌いだ」という。そう言いながら、どちらかに何かあると励まし合っている。仲が良いのか悪いのか、まったく見当がつかない。
「話、聞いたげるから、早よ、こっちへおいで。」
　幸代さんにそう言われ、家を訪ねてみると、なんと、瞑想中!!
　既に幸代さんは、息子さんの悩みから、この勉強を始めていた。そして「読めるとこだけ読んでみたら」と、『光のなかへ』という本を渡された。
　読んでみてチャネリングに興味を持った。自分も霊道者になりたいとも思った。
「精神科へ行く前に、まず、セミナーに参加してみれば」と、幸代さんに言われ、何でもいいからこの苦しみから逃れたい、そんな思いでセミナーに集ったという。
　こうしてテル子さんは、自分の心と向かい合うことになった。
　心の学びを始めるようになって、客観的に自分を捉えることができるようになったと思う。母親が原因ではなく、母親は自分の中にある闇を見せてくれていた。
「こうして話していても、話しながら、そうだったのかと分かっていく、それが何よりうれしい」と言う。

テル子さんにとって、精神科は今では遠いものになっていた。

後ろで何かゴソゴソする。

何かと振り向いてみると、幸代さんちの飼い犬がバスケットの中で身体を動かしていた。そうとは知らずに、このバスケットに寄り掛かっていたのだ。

幸代さんが、「その頃、妹は、何かやってたなあ、病気か？」と、妹の近藤みどりさんに話を振る。

「私は結婚してから、流産、死産の後やっと２人出産できたが、上の子が小学校に上がる年に夫と別居、それから卵巣破裂……」と、みどりさん。

「卵巣破裂やったんか！」

「それで入院してる時に、あんたら二人が本を持ってきたんやんか。」

テル子さんと幸代さんは、妹のみどりさんが卵巣破裂で入院していると聞き、「婦人科系の病気は夫婦の不調和が原因や」とばかりに、「今がこの勉強を勧めるチャンスや」と、当時、エルから出てる本を何冊か持って見舞いに行った。

集中治療室に入れられ、麻酔が効いている間は、二人の言うことに素直にウンウンと聞いていたみどりさんだが、快復に向かうや、猛烈な拒否反応が先に立ち、本は読まずに捨ててしまったという。

「見えないものは信じられん。」それがみどりさんの感想だった。

1999（平成 11）年 11 月、幸代さんが、堀江さん（今のご主人）と再婚した。式も挙げず、ただ記念の写真だけ撮ろうということになった。

みどりさん、この時はじめて大阪へ出てきた。遠方へ出かけるのが億劫で、今まで福井から出たことがなかった。テル子さんから「幸代が記念写真を撮るから来るか」と連絡があった時、どういう訳か「行く」と言ってしまった。

これがきっかけだった。

幸代さんが言い出したのか、テル子さんが言い出したのか、

「こうして 5 人揃うことも、もうないかも知れんから、12 月に、みんなで下呂の水明館へ行こうや」という話になった。

当時、下呂の水明館は、定期的にセミナー会場とし

下呂温泉「水明館」（岐阜県）

て使わせていただいていた。温泉もいい上に、下呂では一流のホテルだ。しかも、トップクラスのホテルでは考えられないような金額。これが利いたのだろうか、5名全員が参加することになった。

セミナーに初参加して、みどりさんは、

「お母さんの反省という瞑想の時間があったのよ。その時に、何か訳が分からなくって、懺悔っていうのか、思わず泣いてしまった」という。

この頃、夫と別居中ということもあり心配してか、金沢の姉と暮らしていた母親がみどりさんの家で一緒に暮らし始めるようになった。もう5､6年になるという。

そんな母親のことを思うと、「なんで素直になれんの

やろか」と「ツッツッツ」と泣けてくるのだ。
　ところでセミナー会場は真ん中を大きく空け、その周囲を参加者たちが車座に座っている。そして、その大きく空いた円形の部分が現象の場になる。
　２日目の現象の時。
「物足りない人、出てきなさい」と、その人が言った。
「なぜか思わず出てしまった」と、みどりさんは言う。
「その人が自分の前に立って、手を自分の頭の上にかざすと何か異語のようなものをつぶやいた。」
（これは何度も言うようだが、手かざしでも何でもない。前に出た人が、その人のほうへ意識を向けるよう誘(いざな)っているだけだという。パワーを入れるとか、光をそそぐとか、そういう意味合いのものでは決してない。）
「突然、参加者の誰かが出てきて、背中をツンと押してくれた。その途端、何がなにやら訳が分からなくなり、ワーッと大泣きに泣き出してしまった。」
　そう、みどりさんは言う。
「自分でも何か分からないが、ただうれしくて仕方がない」とも言う。
　ただ自分だけ１泊２日の参加なので、その日の夜には帰らないといけない。しかし、帰りたくなくて「さ

びしいっ」と、いつまでもテル子さんにすがっていた。
　帰りの電車の中でも泣き通し、家へ帰ってからも、洗濯機を回していても泣けてくる。それが、泣いていて重くない。むしろ清々しい感じでホッとしている自分があるという。
　みどりさんはセミナー会場について、「廊下へ出たら何ともないのに、会場へ入るとあったかいんよ」と、当時を思い出して話された。
　それは肉体的に温かいとか、熱いとか、そういう感じではないとも言われた。
　これ以後、みどりさんは「次も行こうっ」と、欠かさずセミナーに参加されるようになった。
　ところで一番上のお姉さんだが、あまり何も感じてないようだ。どちらかというと、「現象は気持ち悪いが、お風呂だからいいか」、そんな感じで参加していた。
「この子の産んだ子が、長女のところへ行ったんですよ。」
　幸代さんが唐突に言う。何のことかと思うと、ジュリアンヌ —— 幸代さんちの飼い犬だが、その産んだ子犬が一番上のお姉さんのところにもらわれていった。
「その子が死んだんです。うまいこと……それで長女

がパニックになって。」
「それで勉強するようになった」とテル子さん。
　こうして、姉妹５人のうち、次女を除く４名が、進んでセミナーに参加するようになった。
　やがてお母さんが死んだ。2006（平成18）年２月14日のことだという。
　お母さんは、先ほども触れたように、ある宗教団体に入信しており、常日頃、その団体の形式で葬儀をしてほしい旨を意思表示しておられた。そのためにと、お金まで貯めておられたほどで、長女と次女は「遺言だから」、そうしようと思っていた。
　ところが一番上のお姉さんも熱心にセミナーに集われるようになり、「葬儀」のことは、みどりさんに一任ということになった。
　そんなことが決まった後、お母さんが亡くなられた。
　突然の「死」だったという。
　午前中、元気だったのに夜には死んでいた。テレビドラマのような劇的な最期ではなく、「静かなので部屋へ行ってみたら死んでいたのよ」、そんな感じだったという。
　みどりさんは脈を確かめ、死亡を確認すると、主治医

に来てもらい死亡診断書を書いてもらった。そのうえで葬儀社に連絡を取り……と、淡々と事を進めていった。
「本当に淡々という感じで、自分でもビックリした」と言う。
　しかし、思わぬことが起こった。
　通夜を終えて葬儀当日のことだ。会場へ来てみると、どうして知ったのか、逸早(いちはや)く、あの宗教団体の幹部さんが来ているではないか。しかも、その団体独特の形なのだろうか、「しのび詞奏上」といって、故人をしのんで巻物のようなものを読み上げるという。
「お断りします」、思わず断りの言葉が出てしまった。
　姉妹だけで、形に縛られず送り出そうと決めていたことなので、
「この葬儀は、母から生まれた私たち五人だけでやりたいと思っています。お世話をおかけして誠に申し訳ないのですが、本日はお引き取りください。」
　みどりさんが丁寧に挨拶し帰っていただくことにした。
　また最後のお別れにと、葬儀会場にみんなの歌声が響いた。

　♪うさぎ追いし　かの山　こぶな釣りし　かの川

♪ 夢はいまも巡りて　忘れがたきふるさと

以上で、喜多田姉妹のお話は終わりですが、取材を終えて翌日、喜多田テル子さんから、次のようなファックスをいただきました。

私の肉の人生を語り、肉では「あれのここが違った、ここも言えばよかった」と後悔しきりでした、でもただ人生をどれだけ語り、正しい人生だったとしても、私の疑問「なぜ生まれてきたのか。なぜ今生きているのか。なぜ死んではいけないのか」は、分からなかっただろうと思います。

物心ついた時からの疑問、それが何か分からなかったから、私は自殺をすべてからの解放と位置づけて自分を葬ろうとしました。もちろん、私の過去世は、私自身を何度も葬ってきたことでしょうが、私は死ななかった。

なぜなら私は「思い」だったからです。その「思い」に突き動かされて、私は何度も肉をくださいとお母さんに願い産んでいただいてきました。

真っ黒な地獄に私はいます。呪いと恨みとして真っ

黒な地獄の中にいます。

意識の流れを侮ってきた私の過去世が待っていました。流れは永遠の過去より永遠の未来に流れていました。その中の今、ただ心を見ていくこと、母のぬくもりをよみがえらせていくこと、それだけを待ってもらっています。

初めて「来世」の私の存在を感じました。以前チャネリングで自分が出してきたものと違い、言葉での説明はなく、感じる思いは今の私とダブります。もっと困難な肉を選びました。今よりもっと地獄を見ることになるでしょう。

それは私が選んだ設定にすぎません。

肉と意識の違いをハッキリ知っていくための選択です。そんな意識を感じます。私は私であって私ではない。いつか知っていくでしょう。そのための今、そんな決意を感じます。

本当にいいチャンスをいただきました。振り返ることの何たるかを自分の過去世に教えてもらったようです。私は今だけでなく、永遠に存在しているこのエネルギー、しかも真っ黒に固まって、母のそのぬくもりに帰っていこうとしている。

肉では分からないけれど意識の私は知っている。こんな幸せなことはないですね。ありがとう、ただありがとうしか思い浮かばない。

「本当に幸せです」。

いつか地獄の自分に、そう言ってあげたいです。

第七章　新しい流れ

1

2005（平成17）年6月1日から6月3日まで開かれたセミナーが、20年を超えるセミナー活動の最後のセミナーとなった。

この前年には、その人が、心の学びの基本を活字にしておき、迷った時は、その本に拠りなさいと、『意識の流れ』が出版された。

著者は、その人、田池留吉になっているが、この本、ちょっと変わった作られ方をしているんだ。今、君が読んでいるこの本は、作者である僕が、ない頭を働かせ、人に話を聞いたり、資料を使ったりして書いている。ところが、『意識の流れ』は、全編、チャネリングで書かれているんだ。

この本でも紹介したが、塩川香世さんという女性がいる。税理士をしながら、この学びを続け、意識の世界が本当の世界だということを、「頭」ではなく「心」で分かった最初の人と言えるだろう（勿論、その人は

除いてだよ)。

エッ、何のことかよく分からんって。霊道者とどう違うんだって!

ウーン、霊道者っていうのは、ただ「意識の世界」に敏感なだけで「意識の世界」が分かった訳じゃないだろう。塩川さんというのは、霊道者でもあるが、「意識の世界」が心で分かった人でもある。古ーい言い回しをすると、「目覚めた人」って言えば雰囲気は分かってもらえるんじゃないかなあ。

その彼女が、その人の意識をキャッチし、その人のペン代わりになって『意識の流れ』が生まれた。勿論、最後はその人が確認しているんだよ。

そんな作り方だから早い、早い。あっという間に本ができてしまう。頭を使って書いてたら、とてもこうはいかないよね。

本の作り方を説明するのに夢中になって、何を言おうとしてたんだか……。

そうそう、最後のセミナーが開かれたって話をしてたんだ。

ところが本が出版されたものだから、新しい人で『意識の流れ』を読んだって人が出てくる。次に「セミナー

はもうないのか」って話になる。本のほうも、ホームページの紹介まで入れた『意識の流れ・改訂版』が出され、その後も『ありがとう』や『母親のぬくもり』、それに『母なる宇宙とともに』Ⅰ・Ⅱが相次いで出版された。

そうすると、新しく本を読んだ人のために、今しばらくはセミナーを開きましょうということになってきた。それが今の時点での状況だ。

でも、それもいつまでも続かないと思う。

もし、この本を読んでる君が、未来の誰かさんじゃなくて、僕の同時代の人だったら、そして僕が話してきたことに興味があるのなら、ぜひ今の間にセミナーに参加してみたらどうだろう。

別に誘うつもりはないんだけど、でも、なにか勧誘っぽくなってきたので、この話はここまでにしよう。

2

さて、北海道で福祉施設を営む下田さんも、従来のセミナーが終了し、読者のためのセミナーが開かれるようになって集われるようになった。

ただ奥さんは古くからセミナーに参加しておられ、

そんな奥さんからは、何度となくセミナーに誘われたという。
でも行く気がしなかったという。では今になって、なぜ、下田さんがセミナーに参加するようになったのか。奥さんに誘われ根負けして？
いや、そんな人じゃない。イヤなものはイヤ。納得できないが妥協して、そんな器用なことができるタイプの人ではなかった。
下田さんについて話す前に、まず奥さんについて話そう。そのほうが話の流れとして分かりやすいと思う。

下田芳恵さんは学生時代からの対人恐怖症。大学時代がピークだった。
また対人恐怖だけではなく授業中も教室の静けさが怖くてたまらない。静かな教室に教授の話す声だけが響く、それが耐えきれず叫び声を上げそうになり、それを回避するため、トイレに逃げ込むこともしばしばだったという。
大学を卒業するにあたっても対人恐怖から卒業論文の口頭試問が受けられず、一年間休学し、担当教授に事情を話し、口頭試問をレポート提出に代えてもらい

何とか卒業したほどだ。

　大学を出てからも、今度は就職することが恐怖となり、会社勤めに入り責任を負わされることを考えると耐えられそうにない。その逃げ道として結婚を考え、お姉さんの紹介で今のご主人、下田純一さんと結婚する。

　しかし、結婚後も、対人恐怖症は治まることがない。目立ちたい、認めてもらいたいと思うのに、人と会う、人と話すという段になると、恐怖から来る緊張で何も話せなくなる。これを克服するために新興宗教に入ったり、座禅をしたり、座禅では悟れないので、手っ取り早く悟れるという能力開発の瞑想に走った。

　すべては自分の中にドッカリ腰を下ろした「恐怖」という邪魔者を克服するため。

　やがてお子さんが生まれるが、次男のほうが喘息（ぜんそく）の発作に苦しむようになり、やがてその症状が変わり、２時間おきに飛び起きて咳き込むような状態になる。たまたま読んでいたある宗教家の本に「霊的発作」ということが出ており、その症状と酷似しているため、芳恵さんは、次男の喘息も「霊的な障り」と思うようになった。

　そしてまた、これを治すため、今度はＯリングなどの霊的治療を試みるようにまでなった。この頃は、霊

的パワーに頼ろうとするのが、いかに危険でいけないことなのか分かっていなかったという。

1993（平成 5）年 11 月のある日、ある宗教家の本を全部そろえようと書店に行くが手に入らず、たまたま並んでいたエルの本が妙に気になり、10 冊あまりを買い込んで帰った。その中に「お母さんの子宮」の中に戻ったような体験が書かれており、それがまた気になり、当時、大阪で開かれていた「心の相談室」へ電話した。

この時は､芳恵さんはかなり精神的に危険な状態だったという。

急遽、ミニセミナーに参加し、霊的なパワーにすがろうとするのがいかに危険かを知らされ、自分の心を見ていく以外に方法はないということを知らされる。

そして翌年の 8 月、和歌山の「萬波（まんぱ）」で開かれたセミナー（チャネリング講習会）にはじめて参加することとなった。

1995（平成 7）年 1 月、ご主人の純一さんは独立して福祉施設を開設した。

この時から、資金繰りやら職員の管理を巡って、ご夫婦での諍(いさか)いが多くなる。

芳恵さんが夜遅くまでセミナーのビデオを見て、おかしなことを口走ったり、仕事に出ようとしないのだ。ご主人としては開設したところでもあり、人を雇うより奥さんに受付の仕事をしてほしい。

しかし、芳恵さんの中には恐怖心がドッカリ根を下ろしたまま。施設を訪れる利用者の中には、思わず自分が同通してしまう方もいる。夢の中にもその方が出てきたりする。芳恵さんは、「自分が狂うのでは」という恐怖心やら、自分も「兄のように自殺するのでは」という恐怖心に襲われたり、また、そのことを相手に知られたくないという思いの中で極度の緊張を強いられていた。

とても働ける状態ではなかったという。

当然、純一さんとしては、セミナーに対しても冷淡な状態だった。

純一さんの家には、奥さんがセミナーで録音されたテープを聴けるようにと、居間にスピーカーがセットされている。芳恵さんがそれを聴いている時、純一さんは、スピーカーから流れてくるセミナーの様子をイ

ヤでも聞くことになる。
　だから、セミナーのことをよく知っている。
　それが「闇出し現象を通じての学び」や、「異語を通しての学び」が一段落した頃から、スピーカーから流れるセミナーの様子も、奥さんの様子も変わったと感じ出した。
　セミナーではある時期、「闇出し」を通し自分の心を見ることを集中的にやったり、「異語」を通し「言葉」ではなく「波動」を感じられる勉強を集中的にやったりする時期があった。そのことを純一さんは言っている。
　また、この頃、純一さんの経営する施設の中でも「あの人は辞めさせるべきだ」とか「いや、あの人こそ辞めさせるべきだ」と人事を巡って中傷や相手を攻撃する言葉が、所長である純一さんの耳にも入るようになり、何人もの人間が辞めていった。
　それは純一さんにとって、まさに「天変地異」であり、心も鬱々とした状態が続いていた。そんな時だ。
　純一さんの耳に届いた一つの声があった。
　もともと純一さんも、セミナーの目指すところに興味がない訳ではなかった。
　昔から、漠とした不安や虚しさを感じ、「仕事こそ

生きがい」と仕事にのめり込んだりするが、自分の中にある不安を解消することはできなかった。心理学でも「ハイヤーセルフ 」とか「本当の自分」とか言うが、それに出会う具体的な方法を誰も示す人間はいない。それが、スピーカーから流れる声が、その方法を具体的に告げていた。
「本当の自分に出会うには、心を見ていけばいい」と……。
　純一さんの中で、何かが変わった。そういえば奥さんの芳恵さんが変わってきている。前は、奥さんの長話を聞いていて、一息入れたいと席を立ったりすると、「逃げるの！」と怒り出し、その怒りがいつまでたっても収まらない。
　それが最近はなくなってきた。怒っても後を引かない。全体にやさしくなってきているように感じる。また以前はうなされたり、よく寝言を言ったりしたが、それがパッタリなくなったともいう。
　芳恵さん自身も、その頃から自分が変わってきたように感じている。
　かつて、自分にとって最後の逃げ道は「死ぬ」ことだった。それが、この学びを続ける中で「死んでも逃げら

れない」ということが心で分かってきた。まして狂っても、自分の心から逃げることはできない。

そう思い定め、今は必死に自分の心と向かい合おうとしている。

また、自分は「対人恐怖症」だと思ってきたが、実は「死」に対する恐怖だと、その人に言われたことがあった。その時は、「そうなのか」と頭で理解してきたが、それが今になって心で分かるようになってきたとも言う。

純一さんも動き始めた。

2005（平成17）年9月、「本当の自分に出会うには、心を見ていけばいい」、その言葉に引かれるように、純一さんは最初のセミナーに参加することになる。

既に定期的なセミナーはすべて終了していた。『意識の流れ』が出版され、読者のために開かれた第一回目のセミナーだった。

その最初のセミナーで、純一さんは、「波動の勉強」に参加したという。

「波動の勉強」というのは、希望者の心の状態をチャネリングし、チャネラーが言葉を通して語っていく。希望者は、最初、耳から入る言葉を通し理解しているが、

次第に言葉ではなく、その人から流れてくる波動を感じるようになってくる。

要するに、希望者は情報を得るために参加するのではなく、そこから何かを感じるために参加する、そう思えば、ほぼ間違いではないと思うのだが、僕の理解が浅いためそれ以上のことは言えない。自分で参加してみるしかないだろう。

実際には、先ほども紹介した塩川香世さんがチャネラーとして、その人とともに、希望者が、波動を感じるお手伝いをしてくれる。

一回に、ほぼ四名の希望者が呼ばれ、会場の中央に出ると、四方向に向き合うように座る。その中央にチャネラーの塩川さんが座り、その人が、時に冗談を言い、希望者をリラックスさせたり、その様子を見ながら進行していく。

純一さんが前へ出て覚えているのは、チャネリングで、「頭を回しているということ」と、「心が澱んでいるということ」を伝えられたように思う——頭では確かにその通りだと思っている自分がいる。でも、それ以上に「何か、あたたかいものに包まれたような感じだった」と言い、「心理的にも、物理的にも、やっと、やっ

とここへ来ることができた」、そんな感じだったという。
　以来、純一さんは、以後のセミナーすべてに参加しているという。

　以前は、恐怖のため１人で電車に乗ることもままならなかった芳恵さんだが、今はセミナーに参加するため、１人で電車で出かけることもできるようになった。
　そう思った矢先だった。
　今ではセミナーに参加する時は、いつもご主人が一緒にいる……。

3

とても不思議な時を過ごさせていただきました。
　最初に朝食の場に連れて行ってくださった時に人数の多さに驚き、老若男女いろんな方が参加されていることにも驚きました。
　その後に私が寝起きする部屋に行かせていただきましたが、どんな方が一緒なのか不安でもあり楽しみでした。強烈な個性で印象なのがサワイさん。そしてやさしい印象の中村さん。このお二人には特にお世話に

なり、何をするにしてもこの二人にくっついていきました。

１日目の波動の勉強の感想はショッキングで、この方たちは大丈夫なんだろうか？　とか、これが波動なのか……。心を見るってすごいなぁ。

田池先生が、選ばれた人の抑圧された思いを解放するような様を見せていただいた時には「このセミナーが無くなったら自分でこの思いを解放してやるのってどうやればいいんだろう？……これは無理だよ」そんな風に思っていました。

その夜サワイさん、中村さんと田池先生がお風呂に入る時間に一緒に入りに行きました。風呂で先生は、久保さんや他の方たちを指先でクルクルッと操ってお湯の中に転ばせたりして遊んでました。

そこに集まる皆さんは、先生とそんな時を過ごすのがとても楽しそうでした。

その夜から朝にかけて、私はこのセミナーに参加してよかったか､あと残りの２回参加するかどうか迷い、判断できませんでした。

翌朝、部屋で中村さんと二人だけになった時に、お互いの身の上話をしました。

中村さんのお母さんに対して時々殴りかかりたくなる思い、奥さんに対しての価値観の違いなども話していただいた時「あ、自分と似てる」そう感じました。

おとなしそうな、穏やかそうに見えますが、内に秘めた不満やストレスはうまく出せずにたまっていく。中村さんも、少しそんなところがあるのではないかと感じました。

ラッキーにも午前の勉強の時に抽選に当たり、中村さんと一緒に抽選に当たったことに意味を感じました。

私は塩川さんに何を話されてもいいと覚悟をしていました。否定するつもりはまったくありませんでした。パワーを、私はこのセミナーに、この会に求めていました。私の悩みを救ってくれるようなパワーも求めていました。

ですから私は、この会をこのまま信じて続けるかどうか迷っていました。

塩川さんの「でも、でも、でも……」その通りでした。

でも、パワーが欲しい……。

でも、真実を知りたい……。

でも、この会を信じていいのか……。

でも、私は間違っているのか……。

でも、もう少し判断する時間が欲しい……。

「でも、でも、でも……。」

あの時は本当にいくつもの「でも」があって、どうしたらいいか分かりませんでした。

「あなたの求めているパワーは、ここにはない。」

田池先生に言われてスッキリしました。

その後、中村さんの心の奥を解放していただいている姿を見た時、私のもうひとつの姿だ……。そのように思いました。

同じように私も溜め込んでいる……。

あの後、「故郷（ふるさと）」をみんなで歌ってる時の私は、少し放心状態になり、「でも……」の先どうしたらいいか悩んでました。その時もまた桐生さんに手を引っ張っていただきました。

「香世ちゃんが呼んでたよ！」

何のことかさっぱり分かりませんでしたが、

「でも、の先はこれ！」

そういって塩川さんは笑顔いっぱいにして飛び跳ねてました。私もその時の精一杯の笑顔で飛び跳ねていましたが、私もいつか、あんな風に、心からの笑顔で飛び跳ねてみたいなぁ。そう感じました。

いろんなメッセージをそこからいただきました。

今までになく貴重な経験でした。鈍感な私でも気付くぐらい偶然があったように思います。大変もったいないです。皆さんに感謝しています。もっと前にこのセミナーの存在を知っていればよかったのに……。そのようには感じてません。このタイミングしかなかったのだと思います。

悩んできて躓（つまづ）いて、パワーを求め、他力を求め、追い求めることに限りがないことを感じ始め、疲れを感じ、追い求める歩みを止めてふと立ち止まってみた時に、この教えを桐生さんから教えていただきました。残り３回のセミナーということもあって参加する決意が固まった次第です。

これがまだ後しばらく続くのであれば、また話は変わったと思います。

長々と今回の感想を述べさせていただきました。ありがとうございました。また５月にお会いできることを楽しみにしております。よろしくお願いします。

ご主人様にも大変お世話になりました。ありがとうございました。

ご家族の皆様にもありがとうございました。

ひと時、家族の一員のようにさせてただいて、うれしかったですし、心強かったです。

これは、はじめてセミナーに参加した人の手紙なんだ。

この手紙の主は、実は、僕の女房が仕事の関係で知り合った人だ。メールだけのやりとりで一面識もない方だったが、メールで何か一言伝えたらしい。そうしたら「その言葉がやさしい。その言葉はどこで教えてもらったのですか」と尋ねられた。

妻がセミナーの存在とホームページを紹介すると、その後、書店で「意識の流れ」を購入するなど、次々と本を購入され、悩まれた末に後半の１泊２日でセミナーに参加されるようになった。

その人が、セミナー終了後にメールで感想を寄せてくれたんだ。

こちらから頼んだ訳ではないし、これまでのように取材したものでもないんだ。

正直に自分の思いを綴ってくれており、僕も、セミナーに最初に参加した人がどう感じるのか、興味のあったところでもあり、了解を取った上、その内容を、そのまま掲載させていただくことにした。

今までは、名前を伏せたり、変えたりしてきたが、ここでは彼の書いた内容をテニオハをいじる以外は何もせず、そのままを載せさせてもらった。

何も追加することはないと思う。

ただ、彼がみんなで「ふるさと」の歌を唄ったというところだけ付け加えれば、こういうことなんだ。

セミナーでは、その人を中心にして、よく「ふるさと」をみんなで歌う。ただ歌うだけでなく、そこから流れてくるやさしい波動、あたたかい波動、喜びの波動を、歌ったりリズムを取って身体を動かしたりしながら共有していくんだ。

その時、僕は自分が一本の音叉(おんさ)になったように思う。音叉っていうのは、楽器のチューニングの時に使うヤツで、U字型になっていて、叩くときれいな音で振動するんだ。学校の音楽の時間によく見ただろう。あれが振動している時、別の音叉を近づけると、鳴っていない音叉までが共鳴して鳴り出すんだ。

セミナー会場にたくさんの音叉が並んでいると想像してみないか。それが、その人の唄う「ふるさと」の歌を触媒にして、次第に共鳴し合い、最後には会場全体に大きな喜びの渦となって響いていくんだ。

それは壮観だよ。そして何よりうれしいんだ。

自分の中に、あんな喜びがあるなんて、とても信じられないほどだ。

言葉なんて本当に不便だと思う。あの感じを伝えようとしても、どう言っても、肝心なところがスルッと逃げていくようで、ただ焦(じ)れったくなるだけだ。

「体験してみてよ」としか言えない。

言葉の限界を感じてきたところで、そろそろ長話は終わりにしたい。

本当の自分に帰るため、「ふるさと」の歌声に合わせて歩いていければ、なんて幸せなんだろうって思う。転生の過程で、苦しくなったり、自分がどうしようもなくイヤになった時、この「ふるさと」の歌を思い出すことができるだろうか。みんなで、あの会場で喜びを共鳴しあった、あの感覚を思い出すことができるだろうか。

セミナー会場で、最終日にこの「ふるさと」をみんなで唄い喜びを共有しあった時、僕は思った。転生の過程でも、このぬくもり、この喜びだけは忘れたくないと。

終章　母なる宇宙へ向かって

　小さな頃から不安で仕方がなかった。団塊の世代の真っ只中に生まれてきたが、そのせいで幼稚園にも入れなかった。抽選で落とされたのだ。あの地区では僕一人が落とされ、遊び場だった路地から急に遊び仲間が消えていった。

　さびしいような、つまらないような、所在なく市電の走る電車道を歩いている自分がいる。考えるのはいつも同じこと、「死んだらどうなるんだろう」「死んだ先に何があるんだろう」「死ぬ時、痛いのはイヤだなあ」、思考の迷路に入り込み、抜け出すには現実の楽しいことを考えるしかなかった。

　家に帰っても母親はいないし、「おばあちゃんの家に行こう。おばあちゃんの家に行けば、かち割り氷に砂糖をかけて食べさせてくれる」、それが思考の迷路から抜け出す一つの方法ではあった。

　寝る時になって「死」は復活した。

　朝になっても起きれなかったら、寝たまま死んでし

まったら、そう思うと不安でたまらなくなる。「寝ないでおこう」と決め込むが、その努力もむなしくいつか眠り込んでしまう。

小さな頃から、明日、自分を待っている楽しみを見つけ出すのが、寝る前の行事となった。それは高校へ入る頃まで続いていたと思う。

高校生になった自分は、不安の塊みたいなものだ。何が不安なのか分からない。だから始末が悪い。「死」については、ほとんど考えなくなっていた。

それでも不安だった。好きな映画へ行く時だけ不安はなくなった。映画館に並ぶ時のワクワクする感じ、それは何にも代え難いと思った。

しかし、映画が大団円に向い出すと、たちまち不安が復活する。劇場を出るのが怖くなり、映画が終わらないでほしいと願い出す。あげくは映画館のハシゴをし、頭が割れるようになって家へ帰る。

そんな繰り返しだったように思う。

働き出すようになって、そんな不安はどこかへ行ったと思っていた。

それが、またぞろ噴き出した。それも浅間山の麓、嬬恋(つまごい)の村の中で……。

その頃、僕は映画好きが高じて、あるプロダクションでコマーシャルフィルムの制作進行の仕事をしていた。嬬恋には農耕用トラクターのＣＭ制作のため、外部スタッフとともに一月あまり合宿生活をしていた。

本来は１～２週間で終わる仕事のはずだった。それが天候の不順で、撮影が延び延びとなった。スタッフは、「お天気祭りをしないといけない」と騒ぎ出す。要は、飲んで食べて大騒ぎをするということだ。活動屋と言われた頃の名残だろう。制作部は、そんなスタッフの飲み代を予算の中で密かに作り出す。それができる人間が、良い制作進行と言われた。

テレビという媒体ができ、活動屋気質（かつどうやかたぎ）という古い体質と、きっちりした予算管理の下で番組制作を行う、そんな新しい体質がせめぎ合っていた頃の話だ。

明日はいよいよ晴れる、撮影も再開という日、あの不安が襲ってきた。

布団の中で、撮影手順を繰り返してみる。ロケ地の交渉、撮影機材の準備、撮影中のスタッフの昼食の段取り、どれ一つとっても準備万端、不安になる要素はない。

それでも不安は襲ってくる。

寝るにも寝られず、深夜に起き出し、旅館の外へ出てみた。街灯もない山の中。これでもかというほどの満天の星空。間違いなく晴れる。

天候がすべてだった。晴れるということが確信できた時点で、この仕事は80パーセント終わったも同じだ。でも堪らなく不安なのだ。

まんじりともせず、高台に座り込んでいた。やがて空が白み始めた。

僕はいったん旅館へ戻ると、みんながまだ寝静まっているのを確認し、身の回りのものだけを詰め込んだリュックを持って再び旅館を出た。

向かうのは嬬恋の駅。止まっている始発列車に乗り込むと、スタッフが追ってこないのを祈りながら、固いシートに横になった。

俗に言う蒸発というヤツをやってしまったのだ。しかも仕事の真っ只中の現場からだ。軍隊なら、さしずめ敵前逃亡で「銃殺」ということになるのだろう。

蒸発事件解決後、「現場からデスクに移れ」という会社の勧めを断り、僕は、プロダクションを辞めた。自分を知っている人間の中にいたくなかった、それが本

音のような気がする。そして大学へ行った。そして女房と出会い、その人と出会った。
　あれがすべての始まりだったような気がする。他の人間が当たり前にやっていること、それが自分にはできない。自分は弱い人間だと思った。そして自分が逃げ回っている「不安」の正体は何かということ、それが知りたかった。

　今ではハッキリと分かる。何にもできない人間が、何でもできる自分を演じてきた。できない自分を見破られたくなくて、いつも緊張しながら生きてきた。
　子供の頃は、母親によく見られたくて成績まで改竄（かいざん）した。社会へ出てからは、会う人ごとに自分を認めさせようとしてきた。
　この学びに出会って、自分の心を見ようとした時、出されたチャネリングがある。
「バカでもいいじゃないですか。できない自分でいいじゃないですか。」
　その言葉がいつまでも心に残っている。その人にも、最初に出会った頃「奥さんが怖いのか」と聞かれたことがある。

そんなはずがないと思っていたが、今になって思う。女房にも、自分をよく見せようと、「こうあるべき自分」を演じてきた。それが苦しかった。自分が逃げようとしてきたのは、他ならぬ自分自身だった。

演じてきた自分が苦しさのあまり破綻を来たし、嬬恋で蒸発した時、もう誰にも会えないと思った。自分を知っている人間と顔を合わすのが辛くて誰にも会いたくないと旅に出た。旅先に母親から電話がかかってきた。電話の向こうに「敏明、死ぬなーっ」と叫んでいる母親の声があった。

やり直したくて大学受験を考えた時、父親は冷淡だった。「いつまで苦労をかける気だ」、顔を合わすたびに、そう言われているような気がした。当然だと思う。

でも母親は、何があっても「この子は良くなるほうへ向かっているんだ」と信じて疑わなかった。ただ信じて待っていてくれた。

「母親の思い」っていうのは、こういう思いなんだと思った。自分の良いところとか悪いところか、そんな区別もなく、すべてを包み込んで受け入れてくれる思い、そんな「思い」が確かに存在する。そのことを母は教えてくれていた。

これからも自分と向かい合っていく中で、また、転生を続けていく中で、イヤな自分、認めたくない自分と出会っていくのだろう。

大変な時代をいくつもいくつも越えながら、僕たちは、本当の自分と出会うために、母なる宇宙に帰るために、まだまだ旅を続けていくのだろう。

僕には何も分からない。ただ今世、感じさせてもらった「喜び」や「母親のぬくもり」、それを忘れないよう歩んでいくしかない。

これを読んでいる君は、僕のことなんか覚えてはいないだろうが、僕たちをいつも包んでいる「ぬくもり」や「喜び」のことは忘れないでほしい。

もし忘れてしまっていたら、この本が思い出す手がかりとなればうれしい。

著者略歴

桐生敏明（きりうとしあき）

1948 年（昭和 23 年）大阪市西区に生まれる。
株式会社電通映画社　制作部を経て、2010 年、政府刊行物サービスステーションを退職するまでは、「オーダーメイド出版」と称して、商業性がなくても伝える必要のある著作物を発掘し、少部数でも出版物として政府刊行物のルートで書店に流す仕事を展開。/2006 年、乙武洋匡さんを審査員長にした「PureHeart エッセー大賞」(日本毛織株式会社主催) の立ち上げに、審査委員および出版部門で協力。/ 現在は「第二の人生」とばかり、精神活動の重要性を説く著作物 UTA ブックの出版活動を独自にすすめるほか、自らの「テーマ」を「物語」という形にしたいと、取材活動、執筆活動を進めています。/ 自身の作品「あなたの知らない奈良のかつらぎさん―葛城ガイドブック」「僕のナゼ、私のナゼ ―私たちはなぜ生まれてきたの」、「孤児たちのルネサンス―トマスの物語」、「死ぬということ」、「時を超えて伝えたいこと」、「バチカンから来た印刷機」ほか

「時を超えて伝えたいこと」
－かつて日本に生きた者から未来の自分に宛てたメッセージ－

2007 年 6 月 30 日　初版第 1 刷発行
2007 年 7 月 10 日　第 2 刷発行
2022 年 11 月 10 日　POD 版　発行

著者　桐生敏明
装丁　仁井谷伴子
発行所　編集工房ＤＥＰ
〒 635-0823 奈良県北葛城郡広陵町三吉 345-14
TEL 0745-55-8525 FAX 0745-55-8440
印刷・製本　ネクパブ・オーサーズプレス